

【偶語】 相對して語る。史、泰紀「有言一詩書一葉市」

【偶坐】 さしむかひてすわる。曲禮「御二同於長者、雖、貳不辭、一不辭、二對坐。」

【偶像】 木石又は金屬などにて作りたる像。漢書「霍去病過焉、誓山、得、休屠王祭天金人、此中國一之最古者」

【偶像教】 偶像を宗教的客體として崇拜し、之に依りて安慰を求めんとする宗教。

【偶作】 偶成に同じ。

【偶觀】 さしむかひてみる。二對觀。

【偶雨】 偶然に同じ。

【偶日】 偶丁の日。奇日の對。

【偶人】 さてく、人形。史、殷紀「爲二一、謂之天神、二、偶像。」

【偶處】 偶夫婦さしむかひて居る、同處する。春秋繁露「使更民夫婦皆一」

【偶數】 偶丁の數、二にてわりきれぬ數。奇數の對。自虎通「陰數偶」

【偶成】 思ひがけなく出来る、偶然に成る。作詩などにいふ。二偶作、偶做。

【偶然】 思ひがけなくして然る義。思ひがけず。列、黃帝、范氏之黨、以爲「一、」

【偶中】 はからずあたる、まぐれ

あたり。

【偶配】 つれあひ、夫妻。二配偶。

【偶舫】 もやひぶね(唐書、高麗傳「偶發」)

【偶發】 不意におこる、ふと起る。

【偶匹】 つれあひ。二配偶。

【倣】 倣(人部五畫)の俗字。

【倣】 倣(人部五畫)の俗字。

○一は親切に善を責める、又詳かにすすめはけます(詳勉)かとし。○鬚、多き貌。

詩、齊風「其人美且一」思。○國のぶ、思慕する。

【倣】 互にすすめて善をはげます。論、子路、朋友切切一

【倣】 俗字

【倣】 俗字

【倣】 俗字

【倣】 俗字

【倣】 俗字

【倣】 俗字

【倣】 俗字

○かたはら(旁)ほとり、そば(附近)○そばだつ。○ほのか(仄)いやし(卑)○たふる(仆)○ちぢむ(縮)○かたぶく(傾)○そむく(反)反一は叛黨なり。○いたむ。○憫。○がは。○ひとり、こゝに(特)

【側壓】 側面の壓力、堤防は水の力を防ぐ所以なり。

【側聽】 軽くしてうつくし。舊唐書、溫庭筠傳「能逐三鼓吹之音、爲三一之詞」二側聽。

【側近】 程近き場所(舊唐書)二旁近。

【側言】 かたよりたる言説。書、蔡仲之命「罔以一改其度」

【側耳】 みをそばだつ。史、周昌傳「呂后一于東廂聽」二側耳。

【側室】 〇そばめ、妾。漢書、文帝紀「文帝曰、朕高皇帝一之子也、〇古、次男以下の衆子の稱(左、桓二)

【側身】 〇おそれ慎みて其の身を安んぜざる義。詩序「遇災而懼、一修行」

【側注】 〇冠の名一高山冠。〇〇の本文のかたはらに記せる解釋。二側註。

【側席】 〇かたよりてせしむる。〇愛ありて席に安んぜず。説苑、尊賢、文公爲之、一而坐」

【側側】 〇いたむ貌。古樂歌「力、念、君、無、極」二側側。〇身にしみて感ずる貌。韓偓詩「一輕寒剪朝風」

【側息】 〇かたいき(片息)須臾の閉をいふ。孔叢子「不忘於一」二側息。二特別に設けたる「一」のさかたる「儀禮、士冠禮」

【側聽】 〇耳をそばだてて聴く。曲禮「毋二一」二側聽之詩「一風、薄木、逢、暈、月、開、雲」

【側柏】 〇このてがしは、常緑灌木の一。

【側微】 〇身分いやし、微賤なり。史記自序、尙父「一卒歸、西伯」二側微。

【側媚】 〇心よこしにして、つらふ。書經、無以巧言令色便辟一

【側筆】 〇筆を少しく斜にして書く。山谷題跋「一取、折」

【側聞】 〇うはきにきく、ほのかにきく。韓愈、與于襄陽書「一、閣下抱、三世出之才」二側聞。

【側面】 〇當面ならざる方面。そとが「一」親「一」攻撃

【側目】 〇めをそばだつ、敢て正視せざるなり。戰國策「一、而視、側耳而聽」二側目。漢書「皆一、一、於望之等」二望之は蕭望之。

【側顧】 〇軽くしてうつくし。南史「辭、一」二側顧。

【側隱】 〇身分いやしき人。書、堯典「明明揚」二側隱。

【停】 〇とどまる、やむ(中止)〇さだまる(定)〇とど(ぼる)(滞)〇やすむ(息)〇とどむ、とどまる(止)

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

【同】 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

○したがふ(從)つかふ(仕)〇
おとも、おつき(侍從)
【倭人】使者の召使入。唐の制、節
度大使、副使皆一あり。後世の承
差に同じ。

【倭從】おそばつきの家來。唐書、
封常清傳「秦一三十八人」
【倭卒】おつき従ふ兵卒。唐書「縱一
一尋二江陵令一」衛兵。

【倭】サ
【倭從】おそばつきて舞ふ貌。詩、小雅「屢
舞一」

【倭】サ
【倭從】おそばつきて舞ふ貌。詩、小雅「屢
舞一」

【倭】サ
【倭從】おそばつきて舞ふ貌。詩、小雅「屢
舞一」

【傘】サン 早 織に
退ず
からかさ、さしがさ、雨を禦ぎ
日を蔽ひて卷舒すべきもの。
【傘柄】花からかまの柄。耶律楚材詩
「一傘一」續前

【倭】サ
【倭從】おそばつきて舞ふ貌。詩、小雅「屢
舞一」

○むかふ(向)蘇軾、放鶴亭記
「暮則一東山而歸」〇したが
ふ(循)

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

○そば、かたはら(側)旁に通
ず。〇つくり(旁)字畫の右方。
〇みだりに(妄)〇そふ。〇よ
る(倚依)よりそふ。〇ちかづ
く(近)李白詩「雲一馬頭生」
〇一は己むを得ざる貌。詩、
小雅「四牡彭彭、王事一」

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

けしやうべや。〇裝身房。
【傍若無人】ワツカたはらに人なき
がごとし、無遠慮のふるまひをい
ふ。【史、刺客傳】〇傍若無人。
【傍生】〇側邊より生ずる。癸辛雜
識「甘蔗種一之則一」

【傍接圓】〇三角形の一辺と他の
二邊を延長せし二線とに觸接する
圓輪。

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

【傍】ハウ・ハク 深陽
【傍】ハウ・ハク 深陽

用意して、そなへ置く儀にも用
ふ。備三不虞〇の如し。〇具はもと器
具の具なり、事物の全くして缺け
ざる儀に用ふ。〇供は用に立つる
義、そなへものにするなり。左傳
「王祭不供」

【備位】〇其の官職にそなはる、官職
に在るといふ謙辭。漢書、魏相傳
「巨相、幸得一」〇充位。

【備員】〇其の數の中に加へる。史、
始皇紀「博士雖七十人、特一」〇
用。

【備考】〇参考にそなへる。
【備救】〇あらかじめそなへて、すく
ひたすける。左傳「一」〇凶患。

【備禦】〇敵をふせぐそなへをする。
梁書、修二城隍一〇

【備具】〇そなはる、そなへる。史、司馬
相如傳「百官一」〇具備。

【備荒】〇凶年のそなへ。
【備荒植物】〇凶年にそなへる植
物、食ひて害なき草木。
【備荒貯蓄】〇凶年の用意に、平素
金穀をたくはへ置く。
【備悉】〇十分にそなはる。魏志、陳
思王傳「一」〇備具。

【備】フ
【備】フ

【備】フ
【備】フ

【傳】フ
【傳】フ

【傳】フ
【傳】フ

【傳】フ
【傳】フ

【傳】フ
【傳】フ

【傳】フ
【傳】フ

【傳】フ
【傳】フ

〇人部 (十一) 畫 傳・備・倭

上書、宛珠之贊。一〇
【傳近】〇附近に同じ、近づく。仲長
統、昌言「宦豎一〇臥房之内、交
錯婦人之閒」

【傳御】〇つきそひ。詩經「王命一
一、遷二其私人」

【傳會】〇こじつく、附者會合の
意。漢書、袁盎傳「雖一不好一學亦善
一〇一篇の文の首尾完成する
をいふ。後漢書、張衡傳「作二京
賦、精思一〇十年乃成」〇つけ合
す。列、湯問「一〇革木膠漆、白黑
丹青一〇之所爲」

【傳玄】〇字は休奕、晉の北地の人、
少くして孤貧、博學にして善く文
を屬す、性剛直峻急、人の短を容る
ること能はず、晉に事へて侍中と
爲る、卒する時年六十二、顯貴に至
ると雖も著述を廢せず、傳子數十
萬言を著す、玄また能く樂府歌章
を作る、晉代宗廟朝廷の樂章、多く
はその手に成る。

【傳佐】〇人のたすけとなる。又、其の
人。左傳「皆有二親暱一〇以相一〇」

【傳彩】〇畫に彩色を施す。
【傳山】〇清初の人、少くして異稟あ
り、堅苦して氣節を持す、書を善く
す、趙秋谷推して天下第一と爲す。
【傳子】〇書名、一卷、晉の傅玄撰す、
儒家類に屬す、言ふ所、治道に切に
して儒風を啓く、精意名言少から
ず。

【傳相】〇つぎそひ、つきそひ。漢書
賈誼傳「置一〇方握二其事」
【傳婢】〇つきそひの女、こしもと、侍
女。漢書、王吉傳「爲一〇所一〇毒
一〇」
【傳粉】〇白粉をつけたる男の
義、魏の何晏の故事。世説、容止「何
平叔美一〇姿儀、面至白、魏明帝疑二其
一〇傳粉、正夏月與二熱湯餅、既噉、大
汗出、以朱衣一〇自拭、色轉皎然」

【偃】カ
【偃】カ

【偃】カ
【偃】カ

【偃】カ
【偃】カ

【偃】カ
【偃】カ

【偃】カ
【偃】カ

【偃】カ
【偃】カ

【偃】カ
【偃】カ

【偃】カ
【偃】カ

【偃】カ
【偃】カ

【傲】カ
【傲】カ

【傲】カ
【傲】カ

【傲】カ
【傲】カ

【傲】カ
【傲】カ

【傲】カ
【傲】カ

【傲】カ
【傲】カ

【傲】カ
【傲】カ

【傷】 戦國楚策「一聞三鼓音烈而高飛」

【傷】 南朝宋「傷其心」

【傷】 詩「傷心」

【傷】 漢書「傷心」

【傷】 後漢書「傷心」

【傷】 禮記「傷心」

【傷】 神「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傷】 傷心「傷心」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

【傳】 傳聞「傳聞」

○かる(假)なぞらふ(僂)下の者が分を越えて上の者のまねをする「越」○おごる、おごり(驕)○たがふ(差)○いつはり、いつはる、讒言をす。○譎。○みだる(亂)

【僂】分をこえて上をまねする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僎】分をこえて不相應のおごりをする。【僐】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

【僎】分をこえて上をまねする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

傳

○うやうやし、つつしむ(恭)敬(擯)に通ず。荀仲尼「恭敬而一〇あつまる(衆)〇一はおほし(衆)

僂

○したがふ(順)〇みやびやか(嫺)〇長き貌。

僎

○わらは(童)未だ元服せざるわかもの。〇しもべ、婢妾の總稱。史「貨殖傳」卓王孫家一八百人。〇かたくな(頑)〇おろか。〇無知の貌。〇おさなし(幼)〇一は疎敬の貌。

【僎】分をこえて上をまねする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

僐

一未有り知【僐】分をこえて上をまねする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

僐

○たふる、たふす(僂)左、隠三、鄭伯之車一于濟〇〇つがへりやぶる(覆敗)大學「一言一事〇うご(動)左、僖十五、張脈一興」

僐

○しりぞく(屏)〇今の雲南四川貴州邊に居りし蠻夷。炎微紀聞「人在漢爲僐爲郡、在唐爲子矢部蓋南詔東部也」

【僐】分をこえて上をまねする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

僐

一也〇つく(附)詩、大雅「君子萬年、景命有」〇かくす(隱)

僐

【僐】分をこえて上をまねする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

【僐】分をこえて上をまねする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。【僑】分をこえて上につけたる帝王の名。春秋注「夫差欲二中國」。【僑】分をこえて地位をぬすむ。南史「宋武帝紀」袁亮具職、一亦僑。【像】分をこえて上のまねをする。唐書「擅自尊大、忽二之嫌」。【僐】分をこえて不相應のおごりをする。

僐

孟萬章「鼎肉使己一巫拜一也」【僐射】秦の射を主る官。唐以後尙書の長官の稱(後漢書「百官志」)事物紀原「秦官、史始皇本紀有「周青臣」是也、古者重武以善射者掌事、故曰「青臣」者僕二役於射一也(中略)漢成帝建始元年初置二尙書五人、一人爲「青臣」此蓋其始也、獻帝建安四年、以二邵榮爲「青臣」、衛臻爲「青臣」置二左右之始也」

僐

【僐射】秦の射を主る官。唐以後尙書の長官の稱(後漢書「百官志」)事物紀原「秦官、史始皇本紀有「周青臣」是也、古者重武以善射者掌事、故曰「青臣」者僕二役於射一也(中略)漢成帝建始元年初置二尙書五人、一人爲「青臣」此蓋其始也、獻帝建安四年、以二邵榮爲「青臣」、衛臻爲「青臣」置二左右之始也」

【僐射】秦の射を主る官。唐以後尙書の長官の稱(後漢書「百官志」)事物紀原「秦官、史始皇本紀有「周青臣」是也、古者重武以善射者掌事、故曰「青臣」者僕二役於射一也(中略)漢成帝建始元年初置二尙書五人、一人爲「青臣」此蓋其始也、獻帝建安四年、以二邵榮爲「青臣」、衛臻爲「青臣」置二左右之始也」

【儀屬】シタヤク。〇儀屬。
【儀屬】シタヤク。〇儀屬。
【儀屬】シタヤク。〇儀屬。

十 儀

【儀】アイ

○ほのか(彷彿)かすかに見ゆ
(微見)〇むせぶ(吧)
【儀】シタヤク。〇儀屬。
【儀】シタヤク。〇儀屬。

億

億

〇萬の萬倍。〇萬の十
倍。禮、内則、疏、算法一之數、
有大小二數、小數以十爲等、
十萬爲一、十一爲兆也、大數
以萬爲等、萬至萬、是萬萬
爲一也。〇多數の義。〇やすん
ず(安)左、昭、二、心一則樂
〇おもんばかる(料度)論、先
進一則屢中。〇むね、臆に通
ず。漢書、平都侯相碑、餘悲馮
一〇かけもの(賭錢)おもは
くしてかける義。
【億劫】〇無無限に長き時。拾遺記
「億九天之正氣、生于一之内」
〇億劫。〇億劫。〇億劫。
【億載】〇久しく遠き後の世。載は年
に同じ。揚雄、長楊賦、規一、恢二

價

價

あたひ(直)ねうち(品位)李
白、與韓荆州書、一登龍門則
聲十倍
【價格】カ、ねだん、ねうち。
【價値】カ、ねだん、ねうち。
【價値】カ、ねだん、ねうち。

儀

儀

○のり、てほん(法則)荀、正論
「上者下之也」〇のり、
(法)かたどる(象)ぎやうぎ
「容」威一作法、ぎしき「
式」〇よし(善)ただし(正)よ
ろし(宜)釋名「宜也、得事
宜也」〇きたる(來)〇はかる
(度)〇あふ(合)〇たぐひ、つ
れあひ(匹、配偶)詩、邶風「實
維我」〇宇宙の大本。康熙字典
典「兩天地也、又三天地人
也」〇なごらふ(擬)

儉

儉

【儉】カ、人の模範となるべき立派な
る容儀。〇儉。〇儉。〇儉。
【儉】カ、人の模範となるべき立派な
る容儀。〇儉。〇儉。〇儉。

儉

儉

【儉】カ、人の模範となるべき立派な
る容儀。〇儉。〇儉。〇儉。
【儉】カ、人の模範となるべき立派な
る容儀。〇儉。〇儉。〇儉。

〇人部

〇人部 (十三畫) 儀・優・儉・儉

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

【儀制】シタヤク。〇儀制。
【儀制】シタヤク。〇儀制。

ノ充

【儉德之共也】カシハカシ節儉を守るは、徳義の恭しきなり、共は恭(左、莊二四)

【儉朴】ツツまやかにして飾なし、儉約質朴。白居易、策林「人情、一時俗清和」儉素。

【儉可ニ以助廉】カシハカシ節儉は廉潔の心を助け養ふをいふ。宋史、范純仁傳「親族有請教者、純仁曰、惟惟恕可ニ以成徳、其人書ニ於坐隅」

【儉約】ツツまやかにする。漢書、平津侯傳「身行儉約」

【儉用】ツツ費用をつづまやかにする。白居易文「量入、亦可ニ自給」

【儉吝】ツツまやかにしてをしむ、やぶさか。晉書、魏陽王望傳「性一而好取、儉吝」

【儻】シ 〇細かく砕く。〇まことなし。悃誠なし。史、高祖紀「救一莫若以忠」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

人。韓愈詩「周行多儻、議論無二瑕疵」

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

【儻】シ 〇秀逸。卓逸。儻出。英

田子方「儻然不趨」

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

「ひがみてほしいまま。孟、梁惠王「放一邪修無不爲己」

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇儻然

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

【儻】シ 〇ことなり(異)〇すぐれる(卓特)又、其の人。左、莊十一「得一日克」

て子張氏・子思氏・顏氏・孟氏・漆雕氏・仲梁氏・公孫氏・樂正氏の八となる【韓非・顯學】

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

○くるしみよわる(困窮)韓愈詩「始知樂名教何用苦拘」○儻は相呼び合ふ聲。唐書劉禹錫傳「鼓吹裝回其聲儻」

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

○賓客を導き主人を相づる人。○賓客又は鬼神に接するに禮を以てする。禮・禮運「山川所以鬼神也」(省きて賓に作ることもあり)○みちびく(導)たすく(相)○すすむ(進)○つらぬ(陳)詩「小雅爾籩豆」○ひそむ(眉蹙)○親以秦」○うやまふ(敬)つしむ(恭)

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

わがをきやくしや(倡者)藝人。漢書東方朔傳「朔好談諧武帝以俳畜之」たはむる(調戲)左・襄・六「少相狎長相」○ゆるやかにゆたかに。○あまねし(洽)○のろし。○伊は佞媚の貌。

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儻】 ヌイ 〇イ

【儲】

〇たくはふ、たくはへ(貯積) 〇たくはふ、たくはへ(貯積) 〇たくはふ、たくはへ(貯積)...

【備】

〇備位 太子のくらの唐書、不決定 〇備位 太子のくらの唐書、不決定...

【儻】

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

【儻】

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

【儻】

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

【儻】

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

【儻】

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

【儻】

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

兀部

兀

性、物之來寄也 〇いやしくも(苟)〇一乎は志を失ふ貌...

兀

〇高くして上平かなり 〇禿けたる貌 〇無知の貌 〇一は動かさる貌...

兀

〇兀 兀 動かさる貌 〇兀 兀 動かさる貌...

允

〇まこと(信・誠實)書、君爽 〇まこと(信・誠實)書、君爽...

允

〇允 允 動かさる貌 〇允 允 動かさる貌...

允

〇允 允 動かさる貌 〇允 允 動かさる貌...

儻

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

儻

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

儻

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

儻

〇儻 儻々として 〇儻 儻々として 〇儻 儻々として...

【元規之應】下の故事によりて、心よからぬ人の行爲をいふ。晉書「庾亮居外鎮、而執三朝廷之權、導內不能平、常遇西風塵起、舉扇自蔽曰——汚人」元規は亮の字、導は王導。

【元規】ガクハルもののかしら。元規。

【元君】道教にて女の仙人の美稱。男を眞人といふの對。紫虛——碧霞——の類。

【元勳】國家を興すに與りたる大功。又、君主を輔佐せし大功ありし者。梁簡文帝詩「校尉立——元勳」。

【元化】造化の大いなるはたらき。陳子昂詩「仲尼探——幽鴻」。

【元陽和】帝王の徳化に喩ふ。元結補樂歌「——油油兮、孰知其然」。

【元輕白俗】唐の元稹の詩は輕浮、白居易の詩は淺俗なりとの評語。謝靈運詩話「——郊寒島瘦、皆其病也」孟郊の詩は寒酸、賈島の詩は瘦瘠の氣味あるをいふ。

【元月】一年のはじめの月、正月の異名。

【元結】字は次山、唐の武昌の人。天寶の進士、道州の刺史と爲り、管經略使に進む、到る處、惡政あり、民石を立て徳を頌す、卒して禮部侍郎を贈らる、其の詩自ら胸次を寫し、古人を規撫するを欲せず。

唐人中に在りて別に一派を開けり。

【元元】根本の義。後漢書、班固傳「——本本、彈見洽聞」。

【元元】本本、彈見洽聞。〇たみ百姓。戰國策、制海内、子——。

【元后】元は大、后は君、おほきみ、天子をいふ。書、泰誓「——作民父母」。

【元后】天子の嫡后即ち第一皇后。明史、孝烈皇后方氏、世宗第三后也、后崩、詔曰、皇后比救三朕危、奉天濟難、其以——禮葬。

【元功】元勳に同じ。帝業を佐け興す大いなるがら。漢書、文景功臣表、注。

【元朝】元日に同じ。唐德宗詩「獻歲視——萬方咸在」。

【元策】大いにすぐれたるはかりごと。後漢書、注「——猶二妙策也」。

【元子】元は首なり、天子の嫡子。詩、魯頌「建爾——俾侯」。

【元史】明の宋濂撰す、本紀四十七卷、志五十三卷、表六卷、列傳九十七卷あり、此の書會卒にして成る、最も疏略となす。

【元祀】はじめのとし、第一年、祀は年、殷代の語。元元年。

【元始祭】元月三日に天子が賢所及皇靈殿に天神地祇と歴代の皇靈とを祭らるる祭。國本を年の首に祭る故にいふ。

【元次山】元結を見よ。

【元和】字は、微之、唐の河南の人。元和六年制科に擧げられ、第一たり、詩を善くし、白居易と唱和し、元白と並稱せらる、時に元和體と稱す。

【元首】天子。書、益稷「——明哉、股肱良哉、庶事康哉」。

【元首】天子。書、益稷「——明哉、股肱良哉、庶事康哉」。

【元帥】總大將の居る本營。蘇軾詩「——前驅萬戰」。

【元聖】大いにすぐれたるひじり。書、湯誥「求——與之戮力」。

【元宵】上元即ち正月十五日の夜。韓偓詩「——清景亞三元正」。

【元宵】上元即ち正月十五日の夜。韓偓詩「——清景亞三元正」。

【元宵】上元即ち正月十五日の夜。韓偓詩「——清景亞三元正」。

【元宵】上元即ち正月十五日の夜。韓偓詩「——清景亞三元正」。

六月「——十乘、以先啓行」。

【元嫡】本妻。〇よつき、嗣子。

【元德】大いなる徳。書經「鼓亦惟天若——、永不忘在王家」。

【元費】佛耳草の一名。

【元妃】第一番目のきさき、皇后。史、周本紀「姜原爲——帝壘」。

【元白】唐の詩人元稹（微之）と白居易（樂天）と。唐書、白居易傳、居易最工詩、與元稹、酬詠、故號——。

【元符】大いなる祥瑞。揚雄、長楊賦「方將快——、以禪梁父之基、增泰山之高」。

【元服】男子の二十にして冠を著くる儀式。元は首、冠は首に著く、故にいふ。儀禮、冠禮、合月吉日、始加——、塞爾幼志、順爾成徳。

【元本】物事のもと。晉書、天文志「北斗七星、在大微北、七政之樞、陰陽之——也、通典、宋孝建元年詔曰、尙書、百官之——、庶績之樞機、〇もと金（母財）利子金に對していふ。

【元老】國家に大功ある臣。詩、小雅、采芣「方叔——、克壯其猶」。

【元老院】國維新の際の功臣を以て組織せし立法部。

【元良】大いによし、又其の者。

書、太甲「——萬邦以貞」。

【元金】賈し又は預けたるときに、利子の對。

【元日】一年の最初の日、正月朔日。字彙「正月一日曰——」。

【元朔】物ごとを始め出したる人、鼻祖、又商品を始めて發賣せし家。

【元旦】元日のあした。梁三朝雅樂歌「四氣新——、萬壽初今朝」。

【元朝】元旦に同じ。僧惠洪詩「——喜見雪」。

【元年】帝王即位の第一年。〇年號のあらたまりたる第一年。

【元來】もとより、もと。日本來。

【元利】元金と利息の金と。

ふ。えは兄の義。

【兄公】妻より夫の兄を呼ぶ敬稱。爾雅、釋親。

【兄事】兄として敬ひつかふ。曲禮「十年以長、則——」。

【難兄難弟】兄弟の優劣をわがちがたき義。世説「陳元方子長文有英才、與季方子季先、各論其父功德、爭之不能決、諮于大邱、大邱曰、元方難爲其兄、季方難爲其弟、大邱は元方及び季方の父、大邱の長陳寔。

【兄弟】兄弟にあつたと。書、君陳「惟孝、友于——」。

【兄弟】兄弟にあつたと。書、君陳「惟孝、友于——」。

【兄弟】兄弟にあつたと。書、君陳「惟孝、友于——」。

【兄弟】兄弟にあつたと。書、君陳「惟孝、友于——」。

之倉陳實、府庫——。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充】さがる（塞）詩、邶風「衰如——耳」。

【充爾】ツル 充切に同じ。莊子「一ニ天地」
 【充用】ツル あてもあふる。
 【充閭之應】ツル 賓客が門閭にみつる。男子を生むを賀するの詞。晉書「賈充傳」充字公闓。父遠。晚始生。充言後當有一。故以爲二名字一焉。

四 書

兜

【兜】キヨウ 多
 ○あし(惡)凶に通ず。○あらし(暴)○おそる(恐)恟に通ず。○おそる(恟)恟(懼聲)
 【兜漢】ツル わるもの。兜徒。
 【兜器】ツル 人を殺傷するに用ふる器。
 【兜懼】ツル おそる。左傳「二八」曹人「一」
 【兜險】ツル わるくよこしま。兜惡にして險險。
 【兜手】ツル 直接に手を下して人を殺傷せし者。下手人。兜犯。
 【兜徒】ツル わるもの。兜人。兜漢。
 【兜妻】ツル わるくしてあらし。又其の者。
 【兜變】ツル 人ごろしなどの變事。
 【光】ツル 〇クワウ 深陽
 〇ひかる、ひかり、あきららか(明)てり、かがやく(耀)つや、

【消澤】いろ(色澤)てらす(照) ○大いなり、ひろし(廣) ○美しくしき文物、文化。易、觀卦「觀國之光」○ほまれ、榮譽。淮南、椒真「與之同」○いろいろ(彩)
 【光有】ツル 光は大いに保有する義。左傳「一ニ天下一」
 【光陰】ツル ときつぎ、歳時、光は晝日、陰は夜。李白、春夜宴三桃李園序「一ニ者百代之過客一」
 【光陰似逝水】ツル 歳月の速やかに過ぎゆくに喩ふ。顔氏家訓「光陰不可惜、譬諸逝水」
 【光陰如箭】ツル 月日の速かに過ぎて再び復らざるに喩ふ。李益、遊子吟「君看白日過、何異三弦上箭」
 【光映】ツル 輝りてりうする。南史、陳後主「一」
 【光榮】ツル 名に在りて女、竹帛に一。李白詩「名在二烈女籍、竹帛一」○榮譽。
 【光耀】ツル ひかりかがやく。列子「日月星辰、亦積氣中之有一者一」
 【光耀】ツル あきららかにひろむ。諸葛亮文「照烈皇帝、體二明敷之德一」
 【光耀】ツル もえる火、ほのぼの。次條に同じ。
 【光耀】ツル ほのぼの盛んなるいきほひ。韓愈詩「李杜文章在、一ニ萬丈長一」光耀。

長し光耀。
 【光價】ツル よき評判。魏書「吸引後生、爲二其一」○聲價。
 【光華】ツル 佛の眉間にある白き光明を放つ毛。
 【光學】ツル 物理学の一部にて、光線に關することを研究する學問。
 【光耀】ツル ひかりかがやく。魏志「德教一」九服慕義。○光耀。
 【光輝】ツル ひかりかがやく。班固文「清廟一」○光輝。
 【光華】ツル ○ひかり、かがやく。氣。竹書紀年「日月一、且復且兮」○光采。光輝。○光榮の義。龍照詩「宗黨生一」二實僕遠傾慕一」
 【光怪】ツル あやしくかがやくひかり。懷素法帖「夜風雪起一」
 【光光】ツル ひかりかがやく。魏書、名聲のかがやく形容。漢書、馮奉世傳「子明一」發二遊四疆一」
 【光見】ツル せきらとひらめく。王逸、九思「奔馳令一」
 【光景】ツル ○日のひかり。韓愈詩「晴日占一」○景色、おもむき。
 【光慶】ツル めでたき事。思經「先後一」皆君之德。○休慶。
 【光顯】ツル 徳などの明かにあらはるの義。詩經「明明在下」の疏「一之徳、在二乎下一也」
 【光棍】ツル 惡黨曲者。無頼の匪徒をいふ。
 【光采】ツル 大條に同じ。

【光彩】ツル ひかりのあやうつくしきかぎり。北齊書、魏收傳「朝有二魏收一、便足國一」
 【光參】ツル 海參の一種。我が近海に産す、水煮燥乾して支那に輸出す。
 【光身】ツル 圓はだか(裸體) 光身子。
 【光色】ツル いろつや。南史「一」甚麗。○光澤・色澤。
 【光燭】ツル ひかりかがやく。張衡東京賦「德宇天覆、輝烈一」
 【光昭】ツル ○ひかりかがやく、明かに照らす。魏武帝、秋胡行「明明日月光、何所不一」○かがやく。あはらす。左傳「一」先君之命、德二可不務乎一」
 【光閃】ツル 光のひらめき。
 【光線】ツル ひかり、ひかりのすぢ。○光。
 【光潤】ツル 明かにあらはしひらく。晉書、赫連勃勃載記「智王繼軌一」二微風一」
 【光澤】ツル いろつや。○光色。
 【光波】ツル 光線の波動。
 【光茫】ツル せきらするひかり。杜甫詩「曼浪日一」
 【光被】ツル 徳のひかりが普く世に及ぶ。書、堯典「一」四表、格於上下」
 【光風霽月】ツル 心の高明なる形容。養月は雨後の月。宋史、周惲

傳「人品甚高、智懷洒落、如一」
 【光復】ツル 舊業を恢復する義。南齊書「一」中華、永敦二隣好一」
 【光武帝】ツル 後漢の帝の始祖、姓は劉氏、名は秀、字は文叔、前漢の高祖九世の孫、兵を起して天下を平げ、建武元年洛陽に即位す。
 【光名】ツル ちかしくしき名。管子、中匡「一」滿二天下一」美名。
 【光明】ツル 〇明かにひかる、ひかり。詩、周頌、敬之「學有二緝一熙于一」
 【光明正大】ツル 心の潔白にして、道理正しく大いなる義。清、顧棟高、春秋大事表卷首、讀春秋偶筆「如此幾同二俗吏之引例比律與一」
 【光來】ツル 人の來ることの敬稱。○光臨。光臨。
 【光臨】ツル 人の來ることの敬稱。光は榮なり、降臨を以て榮とする義。晉書、劉驎之傳「枉駕一」二光來一。黃臨。
 【光烈】ツル 大いなるいさを。易林「一」無窮」
 【光祿勳】ツル 漢代の宮殿掖門戸を掌る官。漢書、百官表「郎中令掌二宮殿掖門戸一」武帝更二名一」
 【光祿寺卿】ツル 祭祀・朝會等の事を掌る官。宋史「一」掌二祭祀、朝會、宴饗、酒醴膳羞之事一」

【先】ツル 〇セン 〇先 〇セン 〇先
 ○さき。○はじめ(始)○まへ(前)後に對していふ。吳志、諸葛恪傳「將軍在一」○今よりの前「一」是二〇早し一。韓愈、師說「生乎吾前、其聞道也、固一乎吾」
 ○かしら(首)○むかし(古)詩、大雅「一」民有言、詢于芻蕘。○とほつおや(祖)「一」世司馬遷、報任安書「太上不辱一」○已に死せし者「一」考「一」帝「一」君「一」〇まづ。大學「欲治其國者、一ニ齊其家一」
 ○さきたつ、さきんづ。禮、月令「一」立春三日、〇あによめ(媼)○さきがけ(前驅)洗馬は一馬。○
 【先賦】ツル 先人のなしたるはかりごと。胡宿禁內降詔「祗服一」
 【先愛後樂】ツル 衆人より先に愛へ、衆人より後に樂む。志士仁人の國家に對する心がけ。范仲淹の語。歐陽修、范文正公神道碑銘「先二天下之憂而後、後二天下之樂一」而樂。又抱朴子「先愛爲二後樂之本一」
 【先引】ツル さきにたちて道案内する。漢書、蕭望之傳「少史冠二法冠一、爲二妻一」二先導一」
 【先登】ツル せんぞのはか。過庭錄「吾恐二愚民致一疑害一爾」一」

【先考】ツル 亡き父。考は亡父。爾雅「父曰考、母曰妣」先人・先君。
 【先覺】ツル 人にさきたちて道を悟れる人。孟萬章上于天民之一者也。○先知。
 【先驅】ツル さきばらひ、又さきがけ。史、孟軻傳「鄒子如二燕、昭王擁一」
 【先君】ツル ○亡き父。○他人の亡父。北史、穆紹讓元順曰「老身與二卿一」一、亟連二職事一」二歷代の天皇。書、伊訓「注一」二禹以下少康以上賢王一」二祖父以上の稱。孔叢子「吾一」之相二魯」
 【先月】ツル あとげつ。去月。○前月。
 【先決問題】ツル 一番さきに取らるべき可きこと。○
 【先見】ツル 事に先だちて見込を立てる。後漢書、楊彪傳「愧無二日磔一」之明、猶懷二老牛舐犢之愛一」
 【先賢】ツル むかしの賢人。禮記「祀一」於二西學一」二先正」
 【先後】ツル さきにするとあとにする。大學「知二所一」二則近一道矣」
 【先刻】ツル 図さきほど、いましがた。
 【先妻】ツル 死去又は離縁せしつゝ。後妻の對。
 【先子】ツル 先人に同じ。
 【先祀】ツル せんぞのまつり。左傳、荀守一」二無一廢二三勳一」
 【先實】ツル おやゆづりの財産。○遺產。

【先見の明】をいふ。晉書、宋靖傳「靖有二遠量一、指二宮門一、觸一、會見二汝在一、刑棘中二耳一」
 【先日】ツル さきのひ。このあひだ。○過日。
 【先人】ツル ○亡き父。○先子。先考。先君。○せんぞ。韓愈、祭文、今人稱二先子一。先君。一ニ爲一父、然二不一爾父也。如二魯西稱一。曾子曰、吾先子之所畏也、則稱二祖爲一先子。○先世。祖先。
 【先臣】ツル ○死せし臣。○君王又は主君に對して、已に死せし父の稱。
 【先業】ツル 始祖以前時代の、即ち國時代、禮、河間獻王傳「獻王所得書、皆古文一」二舊書一」
 【先進】ツル 學問、官位の己より先に進める人。論、先進一」二於二禮樂一野人也」
 【先鳴】ツル 人よりさきにいひ出す。文子「一」者窮之路也。○首唱。
 【先手】ツル 人より先に手を著ける。蘇軾詩「告二歸謝一」
 【先儒】ツル 先代の儒者。杜預、左傳序「一」所二傳、皆不一其然」
 【先取特權】ツル 他の債権者より一番先に辨濟を受け得る特別の權利。
 【先春】ツル 茶の異名(茶譜)盧全、茶歌「一」抽出黃金芽」
 【先緒】ツル 先人のこせるしごと。邢昺文「世宗統歷、筆遊一」二遺

る。めしとる。史、倭幸傳「盡没一部通家」〇をさむ、をさめる(納)〇おつ、おとす(墜)〇かへる、かへす(還)きたる、きたす(來)〇租税、收得物、禮、王制「量」以爲出〇四聲の一「聲」其の聲短促にして急なるもの。〇圓いる、要する。〇いり。器の容量、興行ものの数の。

【入實】みつきものをもつて入り来る。周禮「令諸侯春」【入寇】外國より攻め来る。【入國】入府に同じ。【入札】買物いれふだ、せり、物件を賣買するに各自評定の價格を札に書きて投票せしめ、其の最低價の者より買ひ、或は其の最高價の者に賣る方法。〇投票。【入室】習學問藝術などの典義をきはむる義。論、先進「子曰、由也升堂矣、未入於室也」。【入津】津ふねが港に入る。〇入口、入港。

【入神】習藝術などの巧妙の域に入る義。易經「精義」。【入相】〇内閣に入りて宰相となる。〇〇日ぐれがた「一の鐘」。薄暮、日没。【入聲】漢字の四聲の一、屋、沃、覺、質、物、月、曷、黠、屑、藥、陌、錫、職、緝、合、葉、洽の十七韻に分つ、音尾にフ、ツ、ク、チ、キの聲ある八字。

【入觀】習參内して天子にまみゆ。詩經「以三介圭、一以予王」。【入御】天子が内に入りたまふ。出御の對。【入花】國俳諧師の詠、宗匠點者等にさし出す添削料、いればな、古、進物に花の枝を折り添へたるが故。【入買】みつきものをもつて入り来る。周禮「令諸侯春」。【入寇】外國より攻め来る。【入國】入府に同じ。【入札】買物いれふだ、せり、物件を賣買するに各自評定の價格を札に書きて投票せしめ、其の最低價の者より買ひ、或は其の最高價の者に賣る方法。〇投票。【入室】習學問藝術などの典義をきはむる義。論、先進「子曰、由也升堂矣、未入於室也」。【入津】津ふねが港に入る。〇入口、入港。

【入水】水に身を水中に投じて死する。〇投身。【入内】内裏に入る。皇后・中宮などに定まりし婦人が、皇后に引き移るにいふ。【入魂】互に氣を知り合ひて仲が善い、懇意。〇親密、懇親。【入木】晉の王戰之の書は、木に墨のしみ入ること三分なりといふ故事によりて、書道の義とす。〇一、道、書斷「王羲之、晉帝時、祭北郊、更祝版、工人削之、筆一三分」。【入校】入學に同じ。【入閣】内閣に入りて大臣となる。【入學】初めて學校に入る。周禮「春、一、合衆合舞」。【入金】圓金銭を携ひ入る。〇入銀。

【入手】圓手に入れる、うけとる。【入塾】塾舎に入りて寄宿する。【入蜀記】六卷、宋の陸游著す。孝宗の乾道六年閏五月十八日山陰を發し、沿道勝を探り、古を弔し、十月二十七日夔州に至るの紀行なり、行文簡潔、考據精確、遊記の上乗とす。范成大の吳船錄と並稱せらる。【入籍】甲國の人民、乙國に歸化して其の國籍に編入せらるる義。又、出生或は嫁娶等にて其の家の戸籍に入れる義。【入選】選に入る、えらばれる。〇當選、また出品などの審査に合格する。【入湯】湯に入る。〇入浴。又特に温泉にゆあみするにいふ。【入道】〇佛道に入りたる人(唐律疏議)〇佛道に入りたる三位以上の人の稱、又廣く僧の義とす。【入定】禪定に入る。定は梵語、禪那の譯、靜慮の義、轉じて死滅の義とす。智度論「一、火水不能害、亦不三命終」。【入場券】展覽會、演藝場などに入り得る證となる切符。木戸札。【入朝】外國の使臣などの來りて參内する義。史、南越尉陀傳贊「漢兵臨境、嬰齊」。【入梅】梅雨のいり。梅雨季に入る。

【入幕之賓】特別に親しき客をいふ。書言故事「晉郗超爲三桓溫參軍、謝安王坦之詣溫、溫令超臥帳中、聽其言、風動帳開、安笑曰、郗生可謂「一矣」もと世説、雅量篇に出づ。【入泮】童子の初めて入學するをいふ。古、學舍を泮宮といふが故。泮宮參看。【入費】圓つひえ、いりめ、費用、入用。【入夫】圓いりむ。〇入費。【入府】國諸侯が己の領地に赴任する。〇入國、入部、就封。【入滅】圓死す。〇入寂。【入門】師の門に入る、弟子入りする。〇初めて學者の便に供する書物、てびき。〇初歩。【入用】〇いりよう。北魏書、樂志「因天然之有、爲一之物」。〇所用、需用。〇圓つひえ、いりめ。【入浴】湯に入る。入湯。山海經「西海有三黃池、婦人、出則懷妊矣」。【入來】行圓きたるの敬語。【入牢】圓らうに入る。〇入獄。【入洛】洛陽に入る。〇入京。魏書、叱列延慶傳「後隨二爾朱榮、一入京」。〇入京、入洛。

【入緣】圓おもてむきならざるえにし、入藉の手續をせざる婚姻。【内應】ひそかに敵に通ずる、うちぎりする。史、鄧生傳「足下舉兵攻之、臣爲一」。〇内通。【内行】心、心のうち。外界の對。【内行】平生家にをる時のおこなひ。閨門内の操行。史、五帝紀「舜居陂澗、一」。〇内誼。【内閣】中央政府の最高機關、天皇に直隸し、萬機を翼賛し大政を會議する所。【内學】〇もと綴緯の學をいふ。後漢書、方術傳「自是習爲一」。〇尙書文、賞、異、數。〇佛學をいふ。數維詩「一似三支耶」。【内閣】〇奥向き、妻女のへや。北史、魏邢邵傳「邢與婦甚疏、自云、畫入一爲狗所吠、劉長卿詩「一」。〇金屏暖色開。【内監】〇唐代、宮中に内侍監を置く。宦官を以て其の官に任ず、よりて宦官の異稱とす。〇清代、監獄に一あり、強盜の如き重罪犯人を入る。【内翰】〇宋の代、翰林學士(文筆を掌り、參議諫諍するを得る職)の稱。宋史、王旦傳「一得官幾日」。〇内相。〇清の代、内閣中書の稱。【内親】母の喪をいふ。父の喪を外親といふの對。五代史、李琪傳「丁一」。〇貧無以葬。

【内】うち(裏中)區域のうち、又、或時期のあひだ。外の反對。〇ま、へや(房)齊書、蕭綽傳「先爲築室家、有一堂、一、ねや(寢室)〇てん(宮禁)韻會「天子宮禁曰一」。〇大内。〇我が國、漢書、賈捐之傳「貪外虛」、務欲廣地不慮其害。〇ころ(心意)易、坤卦「君子敬以直、養以方外」。〇味方が韓

非、内儲説「明主絶之於一而施之於外。〇うちわ、ひそか。史、匈奴傳「惠后與秋后子帶爲一」。〇つま(妻)〇姫妾、女色、いろこと。魯語「好、女死之、好外、士死之、外とは賢人。〇ほど。〇納。〇水の入りあふ所。〇納。〇い、とりいれる。論、堯曰「出、之、各、謂之有司」。〇納。【内裏】天子の宮殿。舊唐書、李輔國傳「大家但一坐、外事聽老奴處置」。〇禁中、禁闕、宮庭。【内憂】〇このころのうち、意中、内心。梁武帝、淨業賦「縱一而自朝」。【内憂】〇國內の憂。外患の對。次條參看。〇中心の憂。漢書、張安世傳「〇母の喪。〇内親。【内憂外患】國內に生ずる憂と、外國より攻め来る患と。左、成十六「唯聖人能外内無患、自非聖人、外寧必有内憂、盡釋楚以爲一」。【内難】内にくはへ、積む。北史、齊帝紀論「外敷三文教、一雄圖、白居易賦「誠心一、壯容外奮」。【内親】其の妻などにとり入りて内内に面會して請ふ。漢書、翟義傳「一」。〇内親。【内苑】宮中の御苑。晉書、呂光載記「三羣臣於一新堂」。

【内縁】圓おもてむきならざるえにし、入藉の手續をせざる婚姻。【内應】ひそかに敵に通ずる、うちぎりする。史、鄧生傳「足下舉兵攻之、臣爲一」。〇内通。【内行】心、心のうち。外界の對。【内行】平生家にをる時のおこなひ。閨門内の操行。史、五帝紀「舜居陂澗、一」。〇内誼。【内閣】中央政府の最高機關、天皇に直隸し、萬機を翼賛し大政を會議する所。【内學】〇もと綴緯の學をいふ。後漢書、方術傳「自是習爲一」。〇尙書文、賞、異、數。〇佛學をいふ。數維詩「一似三支耶」。【内閣】〇奥向き、妻女のへや。北史、魏邢邵傳「邢與婦甚疏、自云、畫入一爲狗所吠、劉長卿詩「一」。〇金屏暖色開。【内監】〇唐代、宮中に内侍監を置く。宦官を以て其の官に任ず、よりて宦官の異稱とす。〇清代、監獄に一あり、強盜の如き重罪犯人を入る。【内翰】〇宋の代、翰林學士(文筆を掌り、參議諫諍するを得る職)の稱。宋史、王旦傳「一得官幾日」。〇内相。〇清の代、内閣中書の稱。【内親】母の喪をいふ。父の喪を外親といふの對。五代史、李琪傳「丁一」。〇貧無以葬。

【内記】圓古、中務省に屬せし官、大小に分ち、階級宣命の起草を掌る。【内規】圓うちうちのまため、公にせざる規則。【内學】綴緯あるものを採用する。史、晉世家「外學不、仇、一不」。〇杜牧詩「一無術古所難」。【内御】對女御(中宮に次ぐ女官)の別名。儀禮、既夕「其母之喪、則一者浴」。【内宮】對伊勢神宮の天照大神宮。豐受大神宮を外宮といふの對。【内君】對人の妻を呼ぶ敬稱。〇内政、令聞。【内訓】對婦道のをしへ。後漢書、班昭傳「作女誡七篇、有助一」。〇圓官省の長官より部下に達するにないの訓令。〇内達。【内科】對内臓の病を治療する醫術。外科の對。【内外】うちと、そと。史、説法解「一資服曰正」。【内慧】對心の中が敏慧なる義。宋史、成宗紀「資識一、七歲始言、實必合度」。【内兄弟】對母方のいとこ。通鑑、梁紀「母黨以兄弟一、謂之」。【内御】對内又家内のうちわもめ、御は障。史、項羽紀「多一」。〇内

【全甲】全甲の身を全うする。司馬遷「報三任安」書「一保二妻子」之臣、隨而謀其短也」

【全軍】〇すべての軍隊。賈島詩「流流隨大施、登岸見一軍」

【全快】〇病が全くいゆ、平癒する。〇全治。

【全活】〇身を全うしていきる、又、いかして命を全うす。漢書、成帝紀「遣使循行郡國、務有三以一一之」

【全計】〇完全なるはかりごと、十分にぬけぬきはかりごと。

【全經】〇まったき經書、經とは聖人の作りたる書。漢書、劉歆傳「漢興已七八十年、離于一一、固已遠矣」

【全權】〇すべての權利。

【全功】〇十分なるいさを。列、天瑞「天地無一一」

【全國】〇國內すべて、國中こそぞりて。

【全才】〇完全なる才能。劉禹錫詩「出文入武是一一」

【全紙】〇のこらすのかみ、紙一面、一枚の紙そのまま。二分したるを半切紙といふの對。

【全集】〇全書に同じ。〇一作家の詩文を盡く收めたる書物。抄本の

對。文獻通考「一一未見」

【全身】〇からだぜんたい。〇一身。〇漢武內傳「修絶、絶一一之術」

【全眞】〇己の自然の性を完全にたもつ。晉書、曹毗傳「一一養和」

【全書】〇まったくそるへる書物。晉書、新序目錄序「隋唐之世、尙爲一一、今可見者十篇而已」

【全勝】〇勝つことを全うす。孫子「善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上、故能自保而一一也」

【全生】〇生命を保全する。管子「一一之說勝、則廉恥不立」

【全性】〇天性を全うする。淮南子「一一保眞、不虧其身」

【全盛】〇十分に盛んなり。五代史、唐臣傳「臣見長安一一時」

【全精】〇全精を全うする。〇言「一紅顔子、可憐半死白頭翁」

【全然】〇圖まったく、すべて、まるきり。

【全體】〇すべて、みな、全體。劉克莊詩「山晴一一出、樹老半身枯」

【全唐詩】〇唐詩書名、九百卷、目錄十二

卷、清の康熙四十二年彭定求等勅を奉じて編す、作者二千二百餘人、詩數四萬八千九百餘首を收む。

【全唐文】〇唐書名、一千卷、清の嘉慶十九年董誥等勅を奉じて撰す、唐人の文集を彙輯し、并せて五代の文をも收む、體例、全唐詩に同じ。

【全治】〇まったくをささる。子華子「一一而無闕、病が全くなほる、全快」。

【全智全能】〇完全なる智能。

【全通】〇全く通ずる、線路の全體が開通する。〇すべての理に通達する。唐書、選舉志「經策一一爲二甲第一」

【全丁】〇一人前の壯丁。晉書、范甯傳「以二一爲二丁」

【全德】〇まったき徳、完全無缺なる徳。唐書、裴度傳「事四朝」以一一始終」

【全能】〇完全無缺なるはたらき、何でも出来る才智。全用を見よ。

【全敗】〇まったくの負け、すべて敗北する。

【全般】〇圖のこらす、全體。

【全美】〇うちそるひてすべてうつくし。

【全備】〇十分にそなはる。〇完備。

【全部】〇總べての部分、其のもの全體。〇全體。

【全幅】〇きれのはばいばい。〇股成式詩、最宜一一碧紗縠。〇轉じてすべて、ありたけ「一一の精神」

【全福】〇十分に全き幸福。蘇轍「實表、能事既修、一一自至」

【全名】〇後漢書、岑彭傳、高祖「一一柏人之名、遂之以一一」

【全文】〇一篇の文章のこらす。〇全篇。

【全豹】〇まるごと、豹の皮の一斑を以て豹であることを知るといふ故事(管窺參看)によりて俗に一斑を一部分一一を全體の義に用ふ。

【全篇】〇全き一篇の文。李山甫詩「曹溪行者得一一」

【全滅】〇残らず滅ぶ。

【全癒】〇病全くいゆ。〇全治。

【全用】〇この所なきつかひみち、完全なる效用。列、天瑞「天地無全功、聖人無全能、萬物無一一」

【全力】〇ちからいばい。劉子驥詩「克己有一一」

〇入 部 (六 畫) 兩

ふたたび(再)〇たぐひ、ならび、一對(匹耦)〇車數の稱。〇輜。〇布帛二端の稱。〇匹。〇めかたの名、二十四銖の稱。〇隊伍の編制、二十五人の稱。〇題に通ず「一一」〇車乘をいふ。

【兩】〇周南「一一御之」〇國々昔の銀貨四及三分の稱。又金貨四分の稱。〇今の一圓の稱。

【兩】〇俗に兩・兩に作るは非。

【兩握】〇左右の手ににぎりこぶし。陸游詩「汗沾一一色如染」

【兩意】〇ふたこと。宋書、樂志「聞君有一一、故來相決絕」

【兩心】〇一心。

【兩楹】〇堂上の東西に在る二本の大柱。禮記「予嘗昔之夜夢坐奠一一于一一之間」

【兩日】〇日と目と。梁元帝集要「日月謂一一」

【兩腋生風】〇茶を喫して七腕に至れば、兩方の腋の下に清風の生ずるを覺ゆ。盧仝「孟諫議寄三新茶詩」

【兩腕】〇三腕、唯有三腕、五腕、孤獨、三腕、枯腸、唯有三腕、五腕、卷、四腕、發、輕汗、平生不平事、盡向三毛孔、散、五腕、肌骨清、六腕、通、仙靈、七腕、喫不得、也唯覺三兩腋習習清風生」

【兩粵】〇廣東・廣西二省の稱、皆古の百粵の地なるが故。〇兩廣。

【兩河】〇河南と河北と。爾雅「一一閉曰一一」

【兩佳】〇二つながらよし。蘇軾詩「一一雪月一一哉」

【兩江】〇今の江蘇、江西、安徽の稱。

【兩掛】〇旅行用の行李の類、天秤の兩端にかけて荷ぶもの。

【兩幣】〇一種の貨幣を同じ價格の他の貨幣と交換すること。〇兌換・兌換。

【兩唇屋】〇圓切貨を取りて兩唇を繋とす者。〇兌換・錢莊。

【兩開】〇天と地との開。宋史、胡安國傳「至剛可一一塞一一、二怒可一一安一一、天下矣」

【兩漢】〇前漢(西漢)と後漢(東漢)と。顔氏家訓「上書陳事、起自一一戰國、逮于一一、風流彌廣」

【兩儀】〇天と地と。又陰と陽と。儀は宇宙の大法。易、繫辭「易有二太極、是生一一」

【兩脚書】〇博學にして實用の才なき者を嘲りていふ。該餘叢考、卷四三「齊陸隆、學極博、而讀易不解三義、王儉曰、陸公書府也、今人謂讀書多而不能用者、爲一一本」

【兩賢】〇雙賢と雙合と。漢書、兩賢傳「一一皆楚人也、雙賢、字君賓、雙合、字君倩、二人相友善、並著二

名節、故世謂之楚一一」

【兩極】〇地の兩端、北極と南極と。晉書、天文志「北極出地三十六度、南極入地三十六度、一一相去、一八八十二度半」

【兩句三年得】〇唐の賈島が獨行潭底影、數息池邊身の二句を、三年かかりて得たることを述べたる詩句。賈島、自述詩「一一、一吟雙淚流」

【兩君】〇二國の君。論、八佾、邦君爲一一之好、有反玷、管氏亦有二反玷」

【兩廣】〇廣東、廣西の二省の稱。元史、世祖紀「定一一四川成軍、二三年一更、廢其家屬、軍官給俸贖」

【兩關】〇關をいふ、關は、公門の兩傍にあるものみの據。春秋、定二「雉門及一一、雉門は南門」。

【兩賢】〇二人の賢人。史、季布傳「一一豈相尼哉」

【兩臉】〇兩方のほほ、臉は目の下、頰の上の處。李洞贈二龐鍊師詩「一一酒醺紅杏妒、半胸酥嫩白雲饒」

【兩虎相鬪】〇兩雄又は兩強國の互にたたかふに喩ふ。史、廉頗、藺相如傳「今一一、其勢不俱生」

【兩造】〇造は至なり、法廷に至る義、原告と被告と。書、呂刑「一一具備」

【兩造具備】〇原告・被告兩者の訴訟の證據明かに具はるをいふ。書、呂刑「一一、師聽五辭」

【兩三行淚】〇はらはらとおつる涙。賈島詩「三十年來長生客、一一忽然垂」

【兩山排闥送青來】〇兩方の青山が青き色を門戸に送り來る。王安石、書湖陰先生壁「一、一、長掃淨無苔、花木成蹊手自栽、一水護田將綠去、一一」

【兩驂如舞】〇驂は副馬なり、駕御の術の巧なるをいふ。詩、邶風「簡令、執轡如組、一一」

【兩心】〇ふたこと。漢書、律三「持一一」〇兩人の心。白居易詩「一一苦相憶、兩口遙相語」

【兩晉】〇四晉と東晉と。陳書、沈不害傳「古者王世子之貴、獨與一一齒、降及漢、鼓禮不墜、豈乎一一、斯事彌隆」

【兩廂】〇堂の東西の廊。歐陽修詩「聖經日陳前、弟子羅一一」

【兩手】〇やうて。唐風、椒聊「椒聊之實、蕃衍盈一、毛傳「一一曰、一雙手」

【兩制】〇宋の内制と外制と。書言故事「宋、翰林學士謂二之内制、中書舍人知制誥、謂二之外制」

【兩省】〇中書省と門下省の二省(小學稱珠)

【雲笈七籤】注
 【六逸】六人の世外に超逸せし人。即ち唐の世に、徂徠山に隠れて日沈飲せし李白、孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔、(唐書)李白傳、竹溪六逸。
 【六一居士】宋の歐陽修の別號。宋史、歐陽修傳、修始在滁州、號六一居士、晚更號六一歸田錄、歐公曰、吾集古錄一千卷、藏書一萬卷、有二琴、一琴、一局、置酒一壺、吾老其間、是爲六一。
 【六骸】首、體、兩手、兩足。
 【六行】孝、友(兄弟の愛)、睦、婦(外戚を親む)任(人の爲めに力を致す)、恤(人の窮をあはれむ)(周禮、地官、大司徒)六德。
 【六學】國子學、太學、四門學、律學、書學、算學の六つを指す。唐書、職官志、國子監有六學。六經をいふ。漢書、儒林傳、古之儒者、博學、厚六藝之文者、王教之典籍、先聖所以明天道、正人倫、致至治之成法也。
 【六樂】周代に存せる黃帝以下六代の樂。雲門、黃帝樂、咸池、堯帝樂、大韶、舜帝樂、大夏、禹王樂、大濩、湯王樂、大武、武王樂の稱。周禮、大司徒、以六樂防萬民之情、而教之和之。
 【六合】東、西、南、北、上、下の六方。易傳、序、遠在二一之外、近在二一之中、莊、齊物、一ト之外、聖人存而不論。
 【以六合爲家】(後漢書)天地四方を家とするは、天下を一統するをいふ。賈誼、過秦論、一、殺函爲宮。
 【六氣】陰、陽、風、雨、晦、明。左、昭、元、天有六氣、人の六つの氣。好、惡、喜、怒、哀、樂(管子、注)唐書、裴度傳、夫頤養之道、當順三適時候、則一平和、萬壽可保。
 【六紀】紀は理、人道を正し齊ふる六つの理。諸父、兄弟、族人、諸舅、師長、朋友(白虎通、三綱六紀)。
 【六義】詩の六體、風、賦、比、興、雅、頌の稱(毛詩、序)六詩。
 【六儀】祭祀、賓客、朝廷、喪紀、軍旅、車馬の六事に關する儀容。周禮、地官、保氏、養國子、以道、教之、一、唐代の官名。舊唐書、職官志、一、六人、掌教、九御四德、率其屬、以贊、后之禮儀也。
 【六畜】六つの家畜、牛、馬、羊、雞、犬、豕、左、傳、十九、古者一不畜、相爲用。
 【六禽】六種のけもの、麋、鹿、熊、麝、野豕、兔(周禮、庖人、注)。
 【六音】戰國の時の音の六、鄭、韓、氏、魏、趙、氏、范、氏、中行、氏、智、氏の稱。戰國策、昔者一之時、智氏最強。
 【六親】父、母、兄、弟、妻、子の稱(管子、牧民、注)一、說、父、子、從、父、昆、弟、從、祖、昆、弟、從、祖、昆、弟、昆、弟、昆、弟、又、一、說、父、子、兄、弟、夫、婦、老、子、一、不和、有、孝、慈、漢書、禮樂志、一、和睦、六戚。
 【六情】喜、怒、哀、樂、愛、惡の六つの情。詩經、序、一、靜、中、百物、遷、于、外、一。
 【六出】雪の異名。雪に六瓣あり、故にいふ。韓詩外傳、草木花、多五出、雪花獨一、其數、屬、陰、也、六花、六出也。
 【六逆】上にしたがひ事ふる六つの道。六逆の反對。左、隱、三、君、義、臣、行、父、慈、子、孝、兄、愛、弟、敬、所、謂、一、也、一。
 【六書】漢字の構成に關する六つの法。象形(日月魚鳥の類、指事(上下の類、會意(日月を合せて明とする類、形聲、轉注、假借(說文解字)六體の文字。漢書、藝文志、一、者、古文(科斗の書)、奇字、篆書、隸書(今の楷書)、變篆、蟲書、一、六體。
 【六職】人の六つの天職、王公、士大夫、百工、商旅、農夫、婦功(紺珠)。
 【六途】周の制、王國百里の外に在りて、途人の掌る所、鄆(五家)里(五鄆)鄆(四里)鄆(五鄆)縣(五鄆)遂(五縣)の稱(周禮、地官、小司徒)。
 【六瑞】王及び公侯伯子男の五等爵の諸侯のわりよりの玉。周禮、大宗伯、以玉作六等之邦國、一、六牲、六つのいけに、馬、牛、羊、豕、犬、雞、周禮、天官、膳夫、凡王之饋、食用六牲、膳用一、一、王之饋食用六牲、膳用一、一、王、季春、論人、論人者、又、以、四、長、一、六親、四、長、相、而、揚、長、一、何、謂、一、父、母、兄、弟、妻、子、何、謂、一、交、友、故、舊、邑、里、門、閭、一、六親。
 【六籍】詩、書、禮、易、春秋、春秋、禮、記、樂、記、易、記、書、或、傳、注、一、存、固、聖、人、之、權、一、六經。
 【六尺之孤】十四五歳なるみなして、一尺は二歳半。論、泰伯、可、以、託、一、一、
 【六宗】六種の尊び祭るべきもの、四時、寒、暑、日、月、星、水、旱(書、舜典)賈、逵、は、天、宗、は、日、月、星、地、宗、は、河、海、岱、と、す。孟、康、は、星、辰、風、伯、雨、師、司、中、司、命、と、す。
 【六體】六書に同じ。周禮、五、一、疏、書、一、形、聲、實、多、六、書、一、
 【安不調攝、病時悔】
 【六官】周代中央政府を天、地、春、夏、秋、冬の六部に分け、治(天官)教(地官)禮(春官)兵(夏官)刑(秋官)事(冬官)を分掌せしめたる總稱(周禮)六卿。六典參看。
 【六卿】周代の六大臣。冢宰、司徒、宗伯、司馬、司空(周禮)宋代は、右師、大司馬、司徒、左師、司城、大司徒、六官。
 【六經】聖人の手に成りし易、書、詩、春秋、禮、樂記。樂記は秦火に亡び、五經のみ存す(漢書、武帝紀)。
 【六經注我】六經はすべてわが心の理を説明したるものなりとの義。宋史、陸九淵傳、一、我、注、六經、學、苟、知、本、六經、皆、我、注、脚、一、
 【六藝】六種の藝術、即ち禮、樂、射、御、書、數をいふ(周禮、地官、大司徒)史、孔子世家、弟子三千人、身通二一者、七十有二人(易、禮、樂、詩、書、春秋、史、伯夷傳、夫、學、者、載、籍、極、博、信、於、一、一、
 【六月秋】陰曆六月の大暑中も秋の如く涼しき心地する。劉克莊詩、籬外蒼梧、一、
 【六月冰】暑氣の候にある冰。四征記、陵、冰、井、有、一、一、
 【六五】易卦にて、下より數へて五つ目の陰爻。
 【六工】六材を用ひて物を作る工

人。曲禮、天子一、曰、土工、金、工、石、工、木、工、獸、工、草、工、典、制、六材、六材は一一の使用する六種の材料。
 【六功】六種のてがら。紺珠、一、王功曰勳、國功曰功、民功曰庸、事功曰勞、治功曰力、戰功曰多。
 【六國】春秋戰國の時の齊、楚、燕、韓、魏、趙の六諸侯の國。戰國策、一、從親以擯秦、宋之問詩、一、兵、同合、七雄勢未分、七雄は秦を加へし稱。
 【六穀】六種の穀物、稌、稻、黍、稷、粱、麥、苽、粟の稱。周禮、膳夫、一、凡王之饋食、用一、一、
 【六材】六器をつくる六種の材料。六工を見よ。
 【六曹】六官に同じ。宋史、神宗元豐五年依唐六典、建一、之官、一、謂、吏、部、戶、部、禮、部、兵、部、刑、部、工、部、六尚書也。
 【六三】易卦にて、下より數へて三つ目の陰爻。
 【六一】易卦にて、下より數へて二つ目の陰爻。
 【六師】天子の軍。詩、大雅、周王于邁、一、及、之、一、六軍。
 【六詩】詩の六體、風、賦、比、興、雅、頌。漢書、藝文志、國子者卿大夫之子弟也、皆學一、一、六義。
 【六辭】六つの辭令、祠辭、命辭、語辭、會辭、請辭、誅辭。周禮、大司馬、一、以通二上下親疎遠近、一、
 【六獸】六つのけもの、麋、鹿、熊、麝、野豕、兔(周禮、庖人、注)。
 【六音】戰國の時の音の六、鄭、韓、氏、魏、趙、氏、范、氏、中行、氏、智、氏の稱。戰國策、昔者一之時、智氏最強。
 【六親】父、母、兄、弟、妻、子の稱(管子、牧民、注)一、說、父、子、從、父、昆、弟、從、祖、昆、弟、從、祖、昆、弟、昆、弟、昆、弟、又、一、說、父、子、兄、弟、夫、婦、老、子、一、不和、有、孝、慈、漢書、禮樂志、一、和睦、六戚。
 【六情】喜、怒、哀、樂、愛、惡の六つの情。詩經、序、一、靜、中、百物、遷、于、外、一、
 【六出】雪の異名。雪に六瓣あり、故にいふ。韓詩外傳、草木花、多五出、雪花獨一、其數、屬、陰、也、六花、六出也。
 【六逆】上にしたがひ事ふる六つの道。六逆の反對。左、隱、三、君、義、臣、行、父、慈、子、孝、兄、愛、弟、敬、所、謂、一、也、一、
 【六書】漢字の構成に關する六つの法。象形(日月魚鳥の類、指事(上下の類、會意(日月を合せて明とする類、形聲、轉注、假借(說文解字)六體の文字。漢書、藝文志、一、者、古文(科斗の書)、奇字、篆書、隸書(今の楷書)、變篆、蟲書、一、六體。
 【六職】人の六つの天職、王公、士大夫、百工、商旅、農夫、婦功(紺珠)。
 【六途】周の制、王國百里の外に在りて、途人の掌る所、鄆(五家)里(五鄆)鄆(四里)鄆(五鄆)縣(五鄆)遂(五縣)の稱(周禮、地官、小司徒)。
 【六瑞】王及び公侯伯子男の五等爵の諸侯のわりよりの玉。周禮、大宗伯、以玉作六等之邦國、一、六牲、六つのいけに、馬、牛、羊、豕、犬、雞、周禮、天官、膳夫、凡王之饋、食用六牲、膳用一、一、王之饋食用六牲、膳用一、一、王、季春、論人、論人者、又、以、四、長、一、六親、四、長、相、而、揚、長、一、何、謂、一、父、母、兄、弟、妻、子、何、謂、一、交、友、故、舊、邑、里、門、閭、一、六親。
 【六籍】詩、書、禮、易、春秋、春秋、禮、記、樂、記、易、記、書、或、傳、注、一、存、固、聖、人、之、權、一、六經。
 【六尺之孤】十四五歳なるみなして、一尺は二歳半。論、泰伯、可、以、託、一、一、
 【六宗】六種の尊び祭るべきもの、四時、寒、暑、日、月、星、水、旱(書、舜典)賈、逵、は、天、宗、は、日、月、星、地、宗、は、河、海、岱、と、す。孟、康、は、星、辰、風、伯、雨、師、司、中、司、命、と、す。
 【六體】六書に同じ。周禮、五、一、疏、書、一、形、聲、實、多、六、書、一、
 【安不調攝、病時悔】
 【六官】周代中央政府を天、地、春、夏、秋、冬の六部に分け、治(天官)教(地官)禮(春官)兵(夏官)刑(秋官)事(冬官)を分掌せしめたる總稱(周禮)六卿。六典參看。
 【六卿】周代の六大臣。冢宰、司徒、宗伯、司馬、司空(周禮)宋代は、右師、大司馬、司徒、左師、司城、大司徒、六官。
 【六經】聖人の手に成りし易、書、詩、春秋、禮、樂記。樂記は秦火に亡び、五經のみ存す(漢書、武帝紀)。
 【六經注我】六經はすべてわが心の理を説明したるものなりとの義。宋史、陸九淵傳、一、我、注、六經、學、苟、知、本、六經、皆、我、注、脚、一、
 【六藝】六種の藝術、即ち禮、樂、射、御、書、數をいふ(周禮、地官、大司徒)史、孔子世家、弟子三千人、身通二一者、七十有二人(易、禮、樂、詩、書、春秋、史、伯夷傳、夫、學、者、載、籍、極、博、信、於、一、一、
 【六月秋】陰曆六月の大暑中も秋の如く涼しき心地する。劉克莊詩、籬外蒼梧、一、
 【六月冰】暑氣の候にある冰。四征記、陵、冰、井、有、一、一、
 【六五】易卦にて、下より數へて五つ目の陰爻。
 【六工】六材を用ひて物を作る工

大司徒又禮仁信義勇智(紺珠)
 【六馬】天子の馬車に附けたる六頭の馬。書、五子之歌「予臨兆民、讓乎若朽索之馭六馬」。荀勗學「伯牙鼓琴而一仰秣」
 【六博】博すこと。博の類。戰國齊策「閉雞走犬、一閉雞」陸博。
 【六幕】天地四方の稱。幕は覆ふ義。漢書禮樂志「紉紉一浮二大海、黃庭堅詩「屯雲塞一、新月吐二、半規一、二六合」。
 【六八】易の卦に於ける陰の數。漢書注「七九陽數、一一陰數」。
 【六法】六種の畫法。古畫品錄序「一者何、一、氣韻生動、二、骨法用筆、三、應物象形、四、隨類賦彩、五、經緯位置、六、傳移模寫是也」○規矩權衡準繩(新論)○
 【六憲法】刑法民法商法刑訴訟法。民事訴訟法。
 【六飛】天子の車を引く六頭の馬。迅きこと飛ぶが如きによりていふ。漢書袁盎傳「今陛下騁一、馳二、不測山、一、六龍」。
 【六轡】馬に附けたる六つの手綱。詩、秦風、駉「駉孔阜、一、在六手」。
 【六府】水・火・金・木・土・穀(書大禹謨)○土木器具等を司る六つの役所。曲禮「天子之」曰「司土司木司水司草司器司貨」○人

の身内の機關。胃・大腸・小腸・膽・膀胱・三焦。周禮、春官、天府、疏「在人身中、飲食所聚、謂之三一、一、二、六腑」。
 【六服】王畿の外圍に在りて各五百里を一區とする地域六つの稱。侯服・甸服・男服・采服・衛服・蠻服。書、周官「一、羣辟、罔不承德」
 【六柄】生殺・賞・賤・貧・富の權力。齊語「管子曰、聖王之治天下、也(中略)慎用其二、一、焉」
 【六米】六種の穀物。紺珠「一、黍、稷、稻、粱、苽、大豆」
 【六味】苦・酸・甘・辛・鹹・淡の六つの味。○乳・酪・生酥・熟酥・醍醐・淡。
 【六夢】六種のゆめ。周禮、春官、占夢「以三日月星辰、占一、之吉凶、一、曰正夢、二、曰噩夢、三、曰噩夢、四、曰噩夢、五、曰噩夢、六、曰噩夢」
 【六峯】山に三十六の峯あるをいふ。樓異、嵩山三十六峯賦「未觀一、奇峯之六六」
 【六鱗】鯉の異名。其の鱗、一列に三十六枚あるによりていふ。埤雅「鯉三十六鱗、具六六之數」
 【六律】十二律中の陽に屬する六つの音。黃鐘・大蕤・姑洗・蕤賓・夷則・無射の稱。禮運「五聲一、十二管」
 【六呂】十二律中の陰聲に屬する六種の音。夾鐘・仲呂・林鐘・南呂。

應鐘・大呂。六律參看。
 【六龍】天子の御車につく六頭の馬。龍は八尺の馬。易、乾卦「時乘一、一、以御天」轉じて直ちに天子の車駕をいふ。李白詩「一、西幸萬人歡、一、六馬六飛」。
 【六禮】六つの大切な禮。冠・昏・禮・喪・祭・鄉飲酒禮。相見禮。禮、王制「司徒修一、以節一、民性、一、婚姻の六つの禮。文中子、事君、婚嫁必具一、一、法、納采、一、問名、納吉、納徵、請期、親迎」
 【六王】戰國の六國の王。史、始皇紀「一、成伏、一、其率、天下大定」
 【六么】唐代の樂曲の名。康熙字典「一、曲名、琵琶、絃索、即錄要也、本自樂工、進曲、上令、錄三、出要者、乃以爲名、後轉呼三、絃、又訛爲一、也、樂譜、琵琶曲、有、一、唐僧善本彈一、曲、下、一、聲、如雷發、妙絕、入神、白居易琵琶引、先爲一、後一、
 【六衛府】古の左近衛府・右近衛府・左衛門府・右衛門府・左兵衛府・右兵衛府の稱。
 【六界】六種の境界。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の稱。
 【六歌仙】國名高き歌よみ六人の稱。在原業平・僧正遍照・喜撰法師・大伴黑主・文屋康秀・小野小町。
 【六國史】六種の史書の總稱。日本書紀・續日本紀・日本後紀・續

日本後紀・文德實錄・三代實錄。
 【六根】眼・耳・鼻・舌・心・意の六つの稱。法華經科注「以六識、一、六塵、一、六根、一、
 【六根清淨】前條の六根に緣る心の作用を六識といひ、六識より生ずる色・聲・香・味・觸・法の欲性を六塵といひ、六塵の執着を斷ち去るを一、といふ。
 【六齋日】一月中忌み慎むべき六つの日。陰曆の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日の稱。この日、鬼神勢力を得て人命を奪ふといふ。阿含經「若當一、一、奉持八戒、一、一夜、福不可計」
 【六擊】古代、相見する時の六つの贈物。擊は鼓に通ず。諸侯は皮幣、卿は羔、大夫は雁、士は雉、庶人は鷩、商工は雞(周禮)
 【六時】晝一夜を六つの時に分つ。晨朝・日中・日沒・初夜・中夜・後夜。阿彌陀經「晝夜一、而雨二、曼陀羅華」
 【六識】六根清淨を見よ。
 【六十六部】六十六ヶ國の寺に詣てて一部づつの法華經を納むる義。轉じて諸國行脚の俗をいふ。雲水・六部。
 【六尺】國音時、貴人の駕籠をかきしもの、かこかき。陸凡。○酒を造る桶。○酒家の酒造の事に

あづかる下僕。
 【六字名號】淨土宗の念佛に唱ふる南無阿彌陀佛の六字の稱。南無は梵語、歸命と譯し、後生を願ふ義。
 【六趣】衆生が業によりて趣き住むところを六處に分ちたる者。地獄趣・餓鬼趣・畜生趣・修羅趣・人間趣・天上趣。法華經「盡見二彼土一、衆生」二六道。
 【六正刑】國武家時代の六種の本刑。禁獄・追放・流罪・斬罪・梟首・磔の稱。
 【六祖】禪家にて宗派の未だ生ぜざる間の六人の祖師。達磨・慧可・僧璨・道信・弘忍・慧能。○特に慧能の稱。正宗記「一、慧能大師、姓盧氏」
 【六賊】智慧を害し、功徳をそこなふ六つの害物。色・聲・香・味・觸・法。楞嚴經「眼耳鼻舌及與二身心、六爲二賊、一、自劫二家寶」
 【六火】地・水・火・風・大・風・火・空・識・大。前五火は理にして胎藏界に屬し、識火は智にして金剛界に屬す。
 【六道】地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上道の六世界。法華經「見一、衆生、貧窮無二福慧、一、六趣。○死者一の旅費として錢六文を棺に入るを一錢といふ。○紙錢、皆冥錢。

【六道能化】地獄の稱。
 【六道輪廻】善惡の應報によりて、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天上道の六道に流轉するをいふ。翻譯名義集「三世猶二環旋、六道輪廻」
 【六塵】種種の煩惱を生じ、心を穢す六つの物。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根より生ずる欲をいふ。金剛經注「於此一、起憎惡心」
 【六通】六種の通力。天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏盡通。法華經「爲三、世所三恭敬、如一一、種、一、六神通」
 【六入】眼・耳・鼻・舌・身・意の六つ。楞嚴經「眼入色、耳入聲、鼻入香、舌入味、身入觸、意入法、皆虛妄」二六根。
 【六如】六論に同じ。
 【六方】東・西・南・北・上・下の稱。彌陀經科注「同一、諸佛、爲淨土佛」爲二、穢土佛」二六合。
 【六波羅密】善き果報を得べき六つの行。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の稱。波羅密は梵語、到彼岸と譯す。法華經「爲二諸菩薩、一、
 【六部】支那の中央政府の吏部・房部・禮部・兵部・刑部・工部の稱。今は無し。○六十六部の略稱。
 【六附】大腸・小腸・膽・胃・膀胱・三焦。書、盤庚、疏「心爲五臟之主、腹

爲一之總、一六府。
 【六論】人世一切の諸法の常ならざるに喩ふ。金剛經「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」二六如。
 【六欲】六根に生ずる慾情。二六慾。ケイ
 【共】
 ①キヨウカ
 ②キヨウク
 ③キヨウク
 ④キヨウク
 ⑤キヨウク
 ⑥キヨウク
 ⑦キヨウク
 ⑧キヨウク
 ⑨キヨウク
 ⑩キヨウク
 ⑪キヨウク
 ⑫キヨウク
 ⑬キヨウク
 ⑭キヨウク
 ⑮キヨウク
 ⑯キヨウク
 ⑰キヨウク
 ⑱キヨウク
 ⑲キヨウク
 ⑳キヨウク
 ㉑キヨウク
 ㉒キヨウク
 ㉓キヨウク
 ㉔キヨウク
 ㉕キヨウク
 ㉖キヨウク
 ㉗キヨウク
 ㉘キヨウク
 ㉙キヨウク
 ㉚キヨウク
 ㉛キヨウク
 ㉜キヨウク
 ㉝キヨウク
 ㉞キヨウク
 ㉟キヨウク
 ㊱キヨウク
 ㊲キヨウク
 ㊳キヨウク
 ㊴キヨウク
 ㊵キヨウク
 ㊶キヨウク
 ㊷キヨウク
 ㊸キヨウク
 ㊹キヨウク
 ㊺キヨウク
 ㊻キヨウク
 ㊼キヨウク
 ㊽キヨウク
 ㊾キヨウク
 ㊿キヨウク

【共】
 ①ともに、おなじ(同)みな(皆)ともにす。史、張釋之傳「法者所與天下、一也」おほやけにす(公)○もろもろ、おほし(衆)○うやうやし。○つしむ(謹)○給する、そなふ。○供、そなへもの。○むかふ(向)論、爲政「如北辰居其所而衆星」之○こまぬく。○拱。○國とも、ども、雖の義「候へ

田叔傳、漢廷諸臣、無能出其右者と

【其旨遠】トシ、其の旨意の深遠なる也。易、繁辭、其稱名也小、其取類也大、一、其辭文、其言曲而中、【不措其本】而齊其末也、【其本】其の根本を究めずして、徒に其の末にのみ馳せるの非なるをいふ。孟、告子、「一、方寸之木、可レ使、高ニ於竿、一、」

【印】其兩端、而端、其兩端は、兩頭の義、終始本末上下精粗を盡して、餘蘊なきをいふ。論、子罕、有、三郗夫、問ニ於我、空空如也、我、一、焉、

【具】**ク**
 〇そなへ、そなふ(設備)そなはる(完備)晁錯、論貴粟、以、畜積多而備先也、〇そなはり有する。孟、公孫丑、「一體而、備、〇わかきまふ(辦)〇とも、俱に通ず。大學、「民一爾瞻」〇つぶさに(備)ことごとく(悉)〇のぶる(陳)宋史、梁克家傳「上命條一風俗之弊、〇うつは(器物)〇心のはたつき(材)用、才能器量、李陵、答蘇武書、抱將相之、〇器物の件数を計ふるに用ふ。史記、旃席干

【具備】**ク**、具の備。供の別は備(人部十畫)の條を見よ。
 【具案】**ク**、實行の方法をそなへたる考案。
 【具有】**ク**、そなへもつ。
 【治具】**ク**、〇適應の用意をする。具は酒食の具。史、魏其貴嬰傳、魏其夫妻一、〇國家を治むるすべの制度文物。
 【具眼】**ク**、まなこをそなへる。眼識がある。鑿論に富む。
 【具官】**ク**、〇官吏の員に備はり居る義。漢書、儒林傳、「諸博士、一、待、問、未、有、三進者、〇文章の草稿などの官職を書すべきを略するに、いふ辭。歐陽修、上三范司諫書、「月、日、一、」
 【具慶】**ク**、父母ともに存するよろこび。故事成語考、「一、下父母俱存、重慶下祖父母俱在、二程全書、伊川先生曰、人無父母、生日當位悲、痛、更安忍置酒張樂以爲樂、若、一、者、可矣、」
 【具獄】**ク**、獄案已に成りて宣告の文の全く具備するをいふ。漢書、于定國傳、抱、一、哭於府上、
 【具申】**ク**、〇つぶさに申し上げる。
 【具臣】**ク**、聊か其の數に備はるのみの家來。論、先進、今由與求也、可レ謂、一、
 【具象】**ク**、形像を具する義。具具體。

【具瞻】**ク**、三公の位に立ちて、國民のともに仰ぎ見る所となる。詩、小雅、節南山、「赫赫師尹、民具瞻」
 【具然】**ク**、自ら満足する貌。自得する貌。荀子、「一、欲爲、一、人師、」
 【具足】**ク**、〇十分にそなはりたる。法華經、「此大真樂、色香味、皆悉一、〇具全、具備、〇圖、よるひ、甲冑」
 【具體】**ク**、〇全體を完全にそなへる。孟、公孫丑、「冉牛、閔子、顏淵、則一、一、而微、聖人たる要素を備へたれども人物が小、〇形、内容ありて感、覺し得るもの。抽象の對。〇具象。
 【具陳】**ク**、〇つぶさに陳べる。詳細に陳述する。
 【具備】**ク**、そなはり足る。淮南子、「文武一、一、動靜中、備、〇具足。
 【具文】**ク**、形式のみをそなへたる文面。漢書、宣帝紀、「上計簿、一、一、而、一、」

【典】**テン**
 〇つね(經常)「五」みち。詩、大雅、「文王之、〇のり(法)規、則、〇儀式法式、〇ふみ、五帝の書、〇つかさどる(司主)〇質をに入れて金を借る(質貸)〇杜甫詩「朝回日、〇春衣、〇しきたり、故事「一、故」
 〇五帝の書(冊)に同じの

【典範】**テン**、のり、てほん。國語見聞錄、「一、則、有、春秋、毛詩、論語、孝經、爾雅等圖、」
 【典墳】**テン**、三皇五帝の書たる三墳五典の略。轉じて古書の總稱とす。張詰詩、「朝綱在、一、」
 【典誦】**テン**、しちや(質屋)〇當舖・典當舖・印子舖。
 【典調訓語】**テン**、古の帝王の定めたる法則にして、書經の篇名とす。魏典、舜典、大禹謨、皋陶謨、伊訓、湯誥などの總稱。
 【典樂案】**テン**、〇古、宮内省に屬せし役所。醫藥の事を掌る。其の長官を典樂頭、トイふ。
 【典律】**テン**、〇定りたるおきて。後漢書、宋登傳、使持節、鄆州、大守、一、定、一、
 【典禮】**テン**、〇定まりたる儀式。後漢書、張湛傳、修、一、
 【典制】**テン**、〇定まりたるはし。南史、王柳傳、文辭、一、
 【典論】**テン**、〇文章の篇名。魏の文帝の撰、文選に出づ。

【兼】**ケン**
 〇かね、かね、合せ有する。易、繫辭、「三才而兩之、〇かね

隋書、百官志、改、龍威、一、日、一、
 〇圖左、一、は左馬頭、〇の唐名。
 【典】**テン**、〇定めておきてより、とるあり。大唐新語、成有、「一、」
 【典訓】**テン**、〇正しき人道のをし。後漢書、班昭傳、蒙、一、先君之餘寵、〇母、師、一、
 【典刑】**テン**、〇一定してかはらざる刑罰。書、舜典、象、以、一、〇常刑。〇古來のおきて。詩、大雅、難、無、〇老成人、〇向有、「一、〇舊法。〇定まれるおきて。鄭語、修、「一、〇以守、一、〇之、〇典要。
 【典製】**テン**、〇常ののり、てほん、製はかた。〇典刑・常刑・典法。
 【典經】**テン**、〇聖人の書。晉書、儒林傳、序、「祖述堯、一、〇、〇撰、〇里、一、〇、〇經、一、〇、
 【典午】**テン**、〇典は司、午は馬、司馬の官をいふ。劉志、關周傳、「一、〇忽、今、月、四、沒、令、一、〇者、謂、〇司、馬、一、〇、〇曾、代、の、稱、〇司、馬、氏、なるが故。魏、形、賜、山、詩、當、蓋、一、〇事、紛、紛、〇西、〇山、川、〇附、〇、〇、
 【典故】**テン**、〇典例と故實と。後漢書、東平王蒼傳、慈、一、愛、骨、肉、事、過、一、
 【典義】**テン**、〇古、軍陣の取りしまり。を掌る官の名。監軍の類。
 【典記】**テン**、〇國家にて定めたるまつり。國語「凡、諸、郊、宗、祖、報、此、五、者、國、之、一、〇也、〇古、祭、祀、を、掌、る、官、名、周、禮、の、春、官、の、屬、。

【典侍】**テン**、〇園女官の名。内侍の次、正權の二に分つ。
 【典式】**テン**、〇のり、さだめ。漢書、爲二世「一、一、」
 【典章】**テン**、〇のり、さく。隋書、牛弘傳、「探、三、王、之、損、益、成、二、代、之、一、一、〇典制。
 【典常】**テン**、〇常に守るべき道。書經「一、一、〇、〇、
 【典由】**テン**、〇以善王室、
 【典證】**テン**、〇典故ある證據、よりど、る。魏書、高允傳、允、送、著、二、名、字、論、一、一、〇典據。
 【典職】**テン**、〇職務を掌る。史記、「一、〇數、十、年、
 【典制】**テン**、〇のり。史、禮書「禮作、一、一、〇典章、法、制、
 【典籍】**テン**、〇ほん(書物)
 【典勝】**テン**、〇天子の膳部を掌る官。唐書、車服志、主、膳、一、〇局、〇園、宮、中、の、内、膳、司、の、判、官、天、子、の、食、膳、を、掌、る、官、
 【典則】**テン**、〇のり、さだめ。北史、李諤傳、選、史、學、人、未、遑、一、〇、一、〇典法、常、法、
 【典國】**テン**、〇古、夷狄を歸服せしむる、〇を、掌、る、官、の、名、
 【典賞】**テン**、〇賞を入れたる金を借る。後漢書、劉虞傳、「一、〇胡夷、〇、〇抵、當、
 【典質】**テン**、〇抵當にして質拂ふ。白居易文「舊宅、一、〇、〇、
 【典法】**テン**、〇のり、てほん。史、禮書、「一、不、傳、〇典刑、典刑、
 【典範】**テン**、〇のり、てほん。國語見聞錄、「一、則、有、春秋、毛詩、論語、孝經、爾雅等圖、」
 【典墳】**テン**、〇三皇五帝の書たる三墳五典の略。轉じて古書の總稱とす。張詰詩、「朝綱在、一、」
 【典誦】**テン**、〇しちや(質屋)〇當舖・典當舖・印子舖。
 【典調訓語】**テン**、〇古の帝王の定めたる法則にして、書經の篇名とす。魏典、舜典、大禹謨、皋陶謨、伊訓、湯誥などの總稱。
 【典樂案】**テン**、〇古、宮内省に屬せし役所。醫藥の事を掌る。其の長官を典樂頭、トイふ。
 【典律】**テン**、〇定りたるおきて。後漢書、宋登傳、使持節、鄆州、大守、一、定、一、
 【典禮】**テン**、〇定まりたる儀式。後漢書、張湛傳、修、一、
 【典制】**テン**、〇定まりたるはし。南史、王柳傳、文辭、一、
 【典論】**テン**、〇文章の篇名。魏の文帝の撰、文選に出づ。

【兼】**ケン**
 〇かね、かね、合せ有する。易、繫辭、「三才而兩之、〇かね

【兼學】各種の學問をかね學ぶ。八宗一。

【兼金】好む黄金、價の普通の金に倍する。孟、公孫丑「王餽一兼百」。

【兼勤】二つ以上の役をかねつとめる。兼務。

【兼官】官の外に兼ねる官。

【兼采】采はせ取る。裴松之、上三國志注「表、續事、以二采色一成文、裴議以二采爲味」任昉、廣士表「非取製于二狐、求味于二兼採」。

【兼載】多量の物をあはせのせる。管子「二萬物」。

【兼濟】あはせよく。易經、注「二萬物、其業廣也」。

【兼人】人に勝る義、一人にて能く二人の事を兼ねる。字解を見よ。

【兼掌】本職の外に他の務をかねつかさどる。晉書「太常職奉天地一兼掌三宗廟」。

【兼弱】よわきを併せすべし。書、仲虺之誥「一攻一取」。

【兼旬】十日以上にわたる。

【兼職】本職の外に兼ね勤むる職。

【兼攝】かねをさめる、二つ以上の事務を一人にて兼ねる。禮、喪服小記「疏、士喪無主、不敢使大夫一爲主也」兼掌。

【兼總】あはせする。公羊傳、春王正月疏「兼者是二其成功一之稱也」。

【兼帶】二職を兼ねて帶ぶ。事文類聚「一脩起居注」。

【兼題】國前にて出し置く歌の題。豫め課する歌の題。宿題。

【兼珍】美味を多くあはせ食ふ。後漢書「自御浣衣、食無兼珍」。

【兼程】常に行く道の倍行く。錢起詩「有意一夫、飄然二翼輕」兼行。

【兼聽】衆人の説をかねてきく。漢書「博覽一、謀及疏淺」唐書、魏徵傳「帝問一君者、何道而明、何失而暗、徵曰、君所以明、一也、所以暗、偏信也」。

【兼統】あはせする。魏志「吏無二一之勢」。

【兼吞】一に合せ吞む。孔叢子「秦有二天下之心」併併吞兼并。

【兼任】二以上の官職に兼ね任ぜらるる。

【兼倍】一倍に同じ。王融、策問「周官三百、漢位一、歷、鼓以降、游情實繁」。

【兼備】かねさへる。史、禮書「管仲之家、二三歸」。

【兼覆】廣くかねおほふ。管子「天之裁大、故能一萬物」。

【兼并】かね合せて一にする。漢書「又禁二之塗」併兼。

【兼務】かねもち、二以上の職を兼ねつとめる。兼掌、兼勤。

【兼覽】かねて博く見る。後漢書、胡廣傳「臣聞君以二博照一爲德、臣以三獻可登否」爲忠。

【兼領】兼てすべしをさめる。李白詩「漢家戰士三十萬、將軍一霍暉」。

【兼】(次條に同じ)。

【冀】(十四畫) 又冀に作る。

○(一)ひねがふ(希)左、倍三三「鄭有確突、不可一也」のぞむ(望欲)ひねがはくは、韓愈、與孟東野書「一足下、一來相視也」のぞみ、ねがひ。○古、九州の一、今の直隸、山西及び河南省と滿洲との一部。晉書、地理志「州其地有險有易、帝王所都、舜以南北闕大、分衛以西爲并州、燕以北爲幽州」。

普通、何ひ望む意あり。○希はまれと訓む、故にまれなること、出來るやうに願ふなり。○尙は庶幾也と註す、黎民尙亦有利哉の如し、尙の字たふといふ義あり、たふと願ふ意なり。○幸は非分而得曰幸と註す、幸謂天子の如し。○庶は冀也と註す、幾と同義なり、庶幾と運用しても、一字づつ別ち用いても同じ、又、庶乎とも連用す。○庶幾はひねがはくは、あかしとも訓む、遠きものは及び難き故、望を絶つ、近きは及びべし、されば願辭、又は近辭と註すれども、意は一なり。孟子「王庶幾無疾病」。

【冀願】ねがひのぞみ。吳志、周勳傳「經年一冀」。

【冀望】のぞむ。○希望、觀望、冀願。

【冀北】冀州の北方、馬の産地。左、昭、四、冀之北土、馬之所生、韓愈、送温處士一序「伯樂一過一之野、而馬羣遂空」。

【冀】(頁部十畫)の俗字。

【冀】(頁部十畫)に同じ。

門部

【門】(門部)に同じ、甲(土部五畫)の古字。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

ふみ(書籍)○書物を數ふる詞「一」○はかりごと(謀略)。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

孔門十哲の一人、孔子曰く、雍や南面せしむ可しと。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

書外成傳、一願領三人城、一願入國。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【冊】(冊部)に同じ、冊(竹部五畫)の古字。

○すすむ(進)行く貌。○龜の甲の縁。

【再選】^ツ ぶたたび當選する。又、再度選舉する。
【再訂】^ツ ぶたたび訂正する。二度改め直す。
【再度】^ツ ぶたたび。〇二回。二度。
【再讀】^ツ ぶたたびくりかへしてよむ。宋史、張方平傳「方平少穎悟絶倫、凡書皆一閱不三」
【再任】^ツ ぶたたび官に任ずる。
【再拜】^ツ ぶたたびおじぎする。丁寧に禮拜する。曲禮「一稽首」三拜。九拜。
【再犯】^ツ ぶたたび罪ををかす。
【再版】^ツ 〇同一の書物を再び版に刷む。〇重刻。
【再發】^ツ 再びおこる。病氣。〇「再來」^ツ ぶたたびきたる。史、淮陰侯傳、時者難得而易失也、時乎時、不三。〇

【問】^ケ キヤウ 青
あきらか(明)ひかる(光)
【問問】^ツ 光りがやく。韓愈詩「鳥鳴空山幽、月吐曉」
【問然】^ツ 光り明かなる貌。木華海賦「一鳥逝」

【冒】^マ 冒(口部七畫)の俗字。
【冒行】^マ 冒(口部七畫)の俗字。
【冒犯】^マ 犯(干)の別は侵(人部七畫)の條を見よ。
【冒行】^マ 冒(口部七畫)の俗字。

【青】^チ ヲカ
〇かぶと(首鏡)〇〇〇誤りて甲冑を轉倒して訓む。
【青】^チ 〇かぶと(首鏡)〇〇誤りて甲冑を轉倒して訓む。
【青】^チ 〇かぶと(首鏡)〇〇誤りて甲冑を轉倒して訓む。

【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。〇「矢石」〇むさぼる(貪)〇わたる(涉)〇ふれる(觸)〇かぶりもの(頭巾)漢書、雋不疑傳「著黃」〇かうむる(被)〇かりに名の、假稱する。漢書、衛青傳「姓衛氏」〇おほむ、媚に通ず。〇いむ(忌)〇毒はたいまい、魅の屬。〇玳瑁。〇むさぼる、犯して取る「貪」〇「頓」は、古、匈奴單于の太子の名。
【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。

【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。
【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。

【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。
【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。

【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。
【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。

【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。
【冒】^マ 〇おほふ。おほひ(蔽覆)〇をかす(侵犯)むか、見ずに進む。

【青】^チ 〇かまふ。〇構。〇宮中の構結深密。〇詩、邶風「中」之言、不可道也。
【冕】^マ 〇かまふ。〇構。〇宮中の構結深密。〇詩、邶風「中」之言、不可道也。

【冕】^マ 〇かまふ。〇構。〇宮中の構結深密。〇詩、邶風「中」之言、不可道也。

【冕】^マ 〇かまふ。〇構。〇宮中の構結深密。〇詩、邶風「中」之言、不可道也。

【元】^ヰ イウ 元
〇「豫はうたがふ(狐疑)疑ひて決せざる貌。後漢書、馬援傳「豫未決」猶豫。
【元】^ヰ 九(口部二畫)の俗字。
【元】^ヰ 九(口部二畫)の俗字。

【冠】^ク クラン 冠
〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。
【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

【冠】^ク 〇かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)〇元服の禮。曲禮「二十日弱冠」禮、冠儀「者禮之始也、故聖王重」〇成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初、舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、灌夫傳「夫名」三軍。〇かんむりを著く。

自以不^一〇ぬれぎぬ。史、淮陰侯傳「嗟乎^一哉烹也」〇うらみ(恨)あだ(仇)韓愈詩「往者不可悔、孤魂抱^一深」〇かむ(屈)かかまる(枉曲)

【冤】^{ウヰ} 無實の罪にからしむる。漢書「獄亡^一、邑亡^一、盜賊^一」

【冤親】^{ウヰ} 無實の罪を受けたるを傷め、其の囚徒。唐書「唐臨^一、按^一、獄交州、出^一、三千人」

【冤恨】^{ウヰ} 無實の罪にかりしうらみ。杜甫詩「忠貞負^一」

【冤罪】^{ウヰ} 無實の罪。親愛する者と。五燈會元「佛教慈悲、一^一平等」

【冤讐】^{ウヰ} 無實の讒言。漢書「孫寶傳^一、蒙^一愛^一」

【冤讐】^{ウヰ} 無實の讒言。漢書「孫寶傳^一、蒙^一愛^一」

【冤讐】^{ウヰ} 無實の讒言。漢書「孫寶傳^一、蒙^一愛^一」

【冤讐】^{ウヰ} 無實の讒言。漢書「孫寶傳^一、蒙^一愛^一」

【冤讐】^{ウヰ} 無實の讒言。漢書「孫寶傳^一、蒙^一愛^一」

【冤讐】^{ウヰ} 無實の讒言。漢書「孫寶傳^一、蒙^一愛^一」

【冤讐】^{ウヰ} 無實の讒言。漢書「孫寶傳^一、蒙^一愛^一」

【冤讐】^{ウヰ} 無實の讒言。漢書「孫寶傳^一、蒙^一愛^一」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

唐書「肅宗諸子傳」帝曰、廣平既^一、安用^一元帥^一、嫡長子^一。

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

莊、逍遙遊「北^一有^一魚」〇玄^一は水神「禮、月令」〇土^一はあ

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

部

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冢】^カ 無實の罪にからしむる。東方朔、七諫「獨^一、而無極分」

【冬氷可折】水は柔なれども氷となれば折ることを得、人の剛柔の性も時によりて異なるに喩ふ。

【四】書

【決】決(水部四畫)の俗字。

【五】通して潤に作る。

○こほる(凝結)寒くして閉ぢ凝る。ひの(冷)こほる、いつ(凍)○さむし、さむさ(寒)○園さゆ、すみわたる。

【沖】同沖に。

○やはらく(和)○むなし、うつろ(空虚)老子「太盈若一」○ふかし(深)○わく(湧)○をさなし、いとけなし(幼稚)書、金騰「惟予一人弗及知」○ひひる、高くなる。○いーは氷を鑿つ聲、又、垂るる貌。

【冲盈】空しきと満つると。孫観詩「圖畫表二一」

【冲虚】ふかくむなし。阮籍詩「養

【冰凍】こほりの如くきよし。晉書、衛玠傳「婦公一、女婿玉潤」

【冰雪操】氷柱の異名。類書纂要「層潭凝于窗下一日二一」

【冰鮮】氷づけの魚。清嘉錄「土人置三嘗氷、街坊擔賣謂之涼冰、鮮魚肆以護魚謂之一一」

【冰炭不相容】氷と炭火とは性質反對にして相容れず、以て君子と小人とは和合し難きに喩ふ。

【冰柱】つらら。氷筍。

【冰點】水の凍る温度。攝氏零度

【冲虚】ふかくむなし。阮籍詩「養

【冲虚】ふかくむなし。阮籍詩「養

【冲虚】ふかくむなし。阮籍詩「養

【冲虚】ふかくむなし。阮籍詩「養

治・况・泮

【冲虚】ふかくむなし。阮籍詩「養

【四】書

【况】况(水部五畫)の俗字。

【泮】通して泮に作る。

○こほる(凍)禮、月令「孟冬水始一」○あふら(脂)○やぶつ(のふた)矢筈蓋左、昭「公徒釋甲執一而踞」

【冰肌玉骨】海の形容。竹坡詩話「清無汗、水殿風來暗香滿」○氷姿玉骨。○もと美人の形容(後蜀主孟昶詞)

【冰既解釋、還復凝合】

【冰渙】こほりがとける。渙は散なり。閻丘冲詩「陽升土潤、一川盈」

【冰鏡】氷の如く潔白にして光澤ある絹、漢書、地理志「齊俗織作一一綺縠純麗之物」此は素なり。

【冰鏡】月の異名。孔平仲詩「圓團一一吐清輝」○月輪。○人物の潔白なる形容。晉書、衛玠傳「冰鏡而奇之、曰此人之一、見之堅然若披雲霧而觀青天」

【消銷】○とける(銷)いもの(鑄造物)○いもの(鑄匠)

【冶金】ふきわけ、鑛石より金屬を分析して採る、又、其のこと、採鑛一一莊、大宗師「今大冶鑄、金鑛躍日、我且必爲鍊、大冶必以爲一不詳之金」

【冶匠】かちや、鍛冶職。名山藏「憲宗紀一一與潘家一有連」

【冶杏】なまめきてうつくしき花のあらず。汪元量詩「一、天桃紅勝一錦」

【冶工】いものし、かちや、鍛冶

【治匠】鑄匠・治匠・冶金匠。

【治匠】治匠に同じ「考工記」

【治匠】前條に同じ。

【治匠】ゆつたりとなややかにある

【治匠】かたちをなまめかしくよそほひかざる。易、繫辭「一一講

【治匠】たはれを、なまめかしくよ

【冰結】氷が凝りかたまりてこほりとなる。こほる。唐太宗詩「塞外悲風切、交河冰已結」

【三】書

【冰魂】氷の如くきよし。孔融、衛尉張儉碑「一、淵清、介然特立」

【冰話】媒介人のこと。曹雪芹「紅樓夢」一一「一、一、

【冰玉骨】海の形容。竹坡詩話「清無汗、水殿風來暗香滿」

【冰肌】こほりの如き清く美くしきはだ。莊、逍遙遊「藐姑射之山、有神人居焉、肌膚如氷雪」

○梅花の形容。黃庭堅詩「寒香寂寞動一一氷魂」

【冰肌玉骨】○海の形容。竹坡詩話「清無汗、水殿風來暗香滿」

【冰渙】こほりがとける。渙は散なり。閻丘冲詩「陽升土潤、一川盈」

【冰鏡】氷の如く潔白にして光澤ある絹、漢書、地理志「齊俗織作一一綺縠純麗之物」此は素なり。

【冰鏡】月の異名。孔平仲詩「圓團一一吐清輝」○月輪。○人物の潔白なる形容。晉書、衛玠傳「冰鏡而奇之、曰此人之一、見之堅然若披雲霧而觀青天」

【冷】ひやか。熱の反對。○ひの、ひえる。○すずし(涼)さむし(寒)さびし(凄)○清くしてひまあり、閑散なり。杜甫詩「廣文先生官獨一」○さびし。

【冶金】ふきわけ、鑛石より金屬を分析して採る、又、其のこと、採鑛一一莊、大宗師「今大冶鑄、金鑛躍日、我且必爲鍊、大冶必以爲一不詳之金」

【冶匠】かちや、鍛冶職。名山藏「憲宗紀一一與潘家一有連」

【冶杏】なまめきてうつくしき花のあらず。汪元量詩「一、天桃紅勝一錦」

【冶工】いものし、かちや、鍛冶

【治匠】鑄匠・治匠・冶金匠。

【治匠】治匠に同じ「考工記」

【治匠】前條に同じ。

【治匠】ゆつたりとなややかにある

【治匠】かたちをなまめかしくよそほひかざる。易、繫辭「一一講

【治匠】たはれを、なまめかしくよ

【冷卻】つめたくなる。熱を失ふ。却は却の正字。

【冷遇】ひやかかへし。冷遇の反対。なる待遇。厚遇の反対。

【冷灰】火のけなきはひ。李商隱詩「十歲競詩走馬成。一殘燭動離情。轉じて名利の欲なき心に喩ふ。

【冷官】いやしく閑散なる官職。張籍詩「年長身多病。獨宜作一冷官」。

【冷月】陰曆七月の異名。【冷血動物】體温が外氣の温度より低き動物。爬蟲類の屬。轉じて冷酷なる人を罵りていふ。

【冷酸】甚だむごたらし。無慈悲。【苛酷】。

【冷齋夜話】十卷。宋の釋惠洪撰す。己の見聞せし所を雜記す。詩話多きに居る。

【冷齋庫】夏時飲食物などをひやし又は腐敗を防ぐ爲めに氷にてひやすくら。

【冷酒】ひや酒。白居易詩「小童吹醋醬」。【冷水浴】衛生上、皮膚をつよくする爲めに冷水をあびる。又、皮膚を濕布にてこするを冷水摩擦といふ。

【冷靜】物事にあわてずしてしづかなり。

【冷笑】あざけりわらふ。北史崔瞻傳「何容讓國士議文。直此一止」。

【冷峭】寒氣のきびしき義。張耒詩「東風一著衣寒」。

【冷節】寒食の節の異名。四民月令「齊人呼寒食爲冷節」。

【冷泉】鍾物質を多量に含める泉。温泉の對。浙江省、西湖の近傍、飛來峯下に在る泉の名。白居易「一亭記あり」。

【冷然】輕妙なる貌。莊、逍遙游「列子御風而行。一善也」。説すずしき貌。○ひやかに思ひやりなし。冷淡。

【冷淡】あざりする。白居易詩「白花一無人愛」。○さびしくしづか。又、同情なし。李中詩「少三知音」。

【冷暖自知】我が事は他人の言を待たずして自ら心に知る義。傳燈錄「今蒙指授入處。如人飲水。一」。【冷腸】つめたきはらわた。不親切。不熱心。又、其の者。顔氏家訓「楊朱之侶。世謂一」。【冷燈】ひかりのさびしきともしび。蘇軾詩「一殘月照空牀」。寒燈。

【冷熱】ひやかかなると熱きと。○冷淡なると熱心なると。○さびしきと、にぎやかなると。

【冷厲】ひやかしのしる。嘲罵する。【冷透肌】冷氣肌膚にしみこむ。司馬光詩「烏皮几穩風侵。寶白玉樓高」。【冷飯】ひやめし。陸游詩「一雜砂礫。短榻蒙霜露」。【冷評】ひやかしたる批評。【冷僻】人跡の到ること罕なる地。白居易詩「雲溪殊一」。轉じて文字の見ることに罕なる者をいふ。

【冷泠】清涼の貌。東方朔「七諫。下而來風」。○音韻の清き貌。陸機、文賦「音一而盈耳」。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【冽】ひやかかしてきよし。東京賦「陰池幽流。支泉一」。【冽泉】ひやかかなるいづみ。韋應物詩「一前堵注」。【冽冽】風のげしき貌。左思、雜詩「秋風何一」。寒氣の嚴しき貌。韓愈詩「霜風一」。【冽】。

【涸】こほり(凝)○とつ(閉)○こほりとつ。張衡、四京賦「一運寒」。【涸】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄】シヤウ。ス。【凄】。

【凜】シヤウ。ス。【凜】。

【凄爽】さびしくさわやか。韋應物詩「戸牖已一。長夜感一」。【凄日】さびしく秋の日。梁元帝集「一凄」。【凄辰】秋の季節。梁元帝集「一凄」。【凄凄】寒くいたましき貌。詩、鄭風、風雨「風雨一。雞鳴喈喈」。【凄切】身にしむほどかなし。皮日休詩「君同亦一」。【凄然】凄凄に同じ。莊、大宗師「一似秋。暖然似春」。【凄其】似秋。暖然似春。【凄其】。【凄楚】ささまじくかなし。李予卿、聽秋蟲賦「志苦者易一」。【凄風】ささまじきかぜ。左、昭四「春無一。秋無苦雨」。【四南風】呂覽「四南曰一」。【凄凄】さびしくさむし。陸游詩「霜露已一」。【凄涼】さびしき。李賀詩「一四月開千里一時綠」。【凄凄】さびしき。舒頌詩「且容花鳥伴一」。【清】シヤウ。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

○さむし(寒)○ひやか(冷)○すずし(涼)すずしくする。涼氣を致す。曲禮「凡爲人子之禮。冬温而夏一」。【清】。

書、隨玩傳「臣實一、風操不立」

【凡庸】凡庸の人物に喩ふ。世説、簡傲、范康與二呂安一善、每一相思、千里命駕、安後來、值二康不在、喜出戶延之、不入、題二門上作「鳳字一」也。喜は康の兄。

【凡童】つねなみのこども。神童の對。南史「蔡興宗年十歲喪父、哀毀有異於一」

【凡鄙】いやしき俗人。晉書「庾亮傳「臣一小人」

【凡夫】〇なみなみの男。〇未だ佛道を悟らざる者。法華經「一淺識、深著二五欲」

【凡庸】つねなみのため、凡庸の民。五、盡心「待二文王」而後興者、一也。

【凡庸】つねなみ。史、周勃世家贊「才能不過二一」

【凡流】つねなみのもの。任昉、爲二范向書「讓二封侯一表「臣素門一、輪關無取」

【凡庸】〇戸部五畫に同じ。

【凡庸】がらし、秋末より冬初にわたりて吹きすさむ風。

凡部 (一十二畫)

凡・処・風・果・風・凭・風・凱・凭・〇口部

【凭】「國字」なく、なき。風波しづまる。

【凭】「憑」に同じ。

【凭】〇よる(倚)几に依る。〇もたれる、よりかかる。史達祖、詠燕詞「日日畫欄獨一」

【凭】クワウ

【凭】陽

【凭】ほらうの雌(鳳は雄)想像上の靈鳥、雞頭蛇頸無頸鱗背魚尾五采あり、高さ六尺許、聲は五音に中り、梧桐にあらざれば棲まず、竹實にあらざれば食はず、醴泉にあらざれば飲まず、飛べば羣鳥これに従ふ、天下治平の嘉兆としてあらはるといふ。通じて皇に作る。書、益稷、鳳皇來儀」

【凭】ガイ 簡 愷に同じ

〇やわらぐ(和)〇たのしむ(樂)〇よし(善)善き人。史、五

口部 (一十三畫)

口・凡・風・果・風・凭・風・凱・凭・〇口部

帝紀「高陽氏有才子八人、謂之八一〇から、戦勝。〇からどき、戦捷の音楽。史、主父偃傳「天子大一」

【凱歌】凱歌の時につたふ歌。凱歌の軍歌。蔡邕、禮志「黃帝使岐伯作二軍樂一」二愷歌。

【凱歌】かちいくきの音楽。周禮、大司馬「一獻三社」二愷樂。

【凱歌】凱歌に述べて歸る。梁元帝文「班師一、休牛息馬」二凱歌。

【凱歌】凱歌に唱へてかへる。「宋書、謝靈運傳」二愷歌、凱歸。

【凱歌】凱歌の將士を迎へ入る爲め、又は戦勝を記念する爲めに建てる大門。

【凱歌】凱歌に勝つてちんやに歸る。【凱歌】やばらしたのしむ、弟は【凱歌】小雅「君子、民之父母」二愷樂、樂易。

【凱歌】〇和らぎ吹く風。詩、衛風「一自南吹二被棘心」〇南風。爾雅、釋天「南風謂之」二

【憑】凭(几部六畫)に同じ。

口部 (一十三畫)

口部

〇物を受くる器。〇口を張る貌。

【凶】〇キョウ 〇キョウ 〇キョウ 〇キョウ

【凶】〇あし、わるし(惡)〇よこし(邪)〇とが(咎)〇わかに(天短折)〇わざはひ(禍)吉の反對。〇五穀みのらす。〇きん「一年」〇わるもの。唐書、孝友傳「父死、手二一兒、〇うれふ、おそる。晉語「敵人入而一懼怖に通ず。

【凶】〇極めてあし。又、其の者、易林「一不疑」

【凶】〇あしきしらせ、不吉なるたより。〇凶報。

【凶】〇あしきしてこすし。後漢書、朱穆傳「一無行之徒、媚以求官」

【凶器】〇人を殺すに用ふるもの。史、主父偃傳「兵者、一也」

【凶器】〇人を殺すに用ふるもの。史、主父偃傳「兵者、一也」

【凶器】〇人を殺すに用ふるもの。史、主父偃傳「兵者、一也」

の時に用ふる器。周禮、天官、冢宰「喪服一不入レ宮」

【凶逆】心悪しく理にさかふ。又、其の者、顔氏家訓「抗拒一、二惡逆、凶悍」

【凶逆】悪しくして物をしへた。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、列、楊朱「仁聖亦死、一亦死」

【凶逆】あしくけがれたるもの。曹植文「薄二滌一、二勳二除醜」

【凶逆】五穀みのらす。きん。周禮、地官「掌三縣都之委積、以待二一」

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【凶逆】わるくおろか。又、其の者、

【刀】 刀を以てひたひを刺み、これに似て、周語「有斧鉞一之民」に似る。

【刃】 刀(前條)に同じ。

【刀】 刀の字の旁ツクの名。

【刀】 斗は、銅にて造り一斗の量を入る、晝は炊具とし、夜は陣の警戒の爲めに撃つ、即ち鑊と銅鑊とを兼ねたる古の軍用の具。漢書、李廣傳「不擊一斗自衛」○一は風止まんと欲して微しく動く貌、そよぐ貌。莊、齊物「而獨不見之調調之」一乎。

【刃】 ジン 俗に、刃にニ作るは非

○やいば、兵器の鋭利の處「刀」○やいばす、きる、きりこみす「自」

【刃】 刀がたなのみ。北齊書「以二柔鐵爲二一」刀背。

【刀尖】 刀がたなのきさき。

【刀泉】 刀がたなに通貨。刀は人に利ある處、泉は到る處にあまねく流通する義。

【刃】 刀を以て之を断つ。○きる、刀を以て之を断つ。○きざむ(刻)○さく(割)○みがく、骨角の類をみがきあける。○せまる(迫)○しきりに。○いそぐ(急)○まこと(懇實)ねんごろ(懇到)○たしかに(確實)○おさへる(按)史、扁鵲傳「不待一脈」○かなめ(要)○とじきみ(門限)○かへし。○反。字音を示すために、或字の發聲と或字の聲韻と相磨して一の音を生ずる法。○みぎり。○初に通ず。○おほし(家)○一

【刃】 刀を以て之を断つ。○きる、刀を以て之を断つ。○きざむ(刻)○さく(割)○みがく、骨角の類をみがきあける。○せまる(迫)○しきりに。○いそぐ(急)○まこと(懇實)ねんごろ(懇到)○たしかに(確實)○おさへる(按)史、扁鵲傳「不待一脈」○かなめ(要)○とじきみ(門限)○かへし。○反。字音を示すために、或字の發聲と或字の聲韻と相磨して一の音を生ずる法。○みぎり。○初に通ず。○おほし(家)○一

【刃】 刀を以て之を断つ。○きる、刀を以て之を断つ。○きざむ(刻)○さく(割)○みがく、骨角の類をみがきあける。○せまる(迫)○しきりに。○いそぐ(急)○まこと(懇實)ねんごろ(懇到)○たしかに(確實)○おさへる(按)史、扁鵲傳「不待一脈」○かなめ(要)○とじきみ(門限)○かへし。○反。字音を示すために、或字の發聲と或字の聲韻と相磨して一の音を生ずる法。○みぎり。○初に通ず。○おほし(家)○一

【刃】 刀を以て之を断つ。○きる、刀を以て之を断つ。○きざむ(刻)○さく(割)○みがく、骨角の類をみがきあける。○せまる(迫)○しきりに。○いそぐ(急)○まこと(懇實)ねんごろ(懇到)○たしかに(確實)○おさへる(按)史、扁鵲傳「不待一脈」○かなめ(要)○とじきみ(門限)○かへし。○反。字音を示すために、或字の發聲と或字の聲韻と相磨して一の音を生ずる法。○みぎり。○初に通ず。○おほし(家)○一

【刃】 刀を以て之を断つ。○きる、刀を以て之を断つ。○きざむ(刻)○さく(割)○みがく、骨角の類をみがきあける。○せまる(迫)○しきりに。○いそぐ(急)○まこと(懇實)ねんごろ(懇到)○たしかに(確實)○おさへる(按)史、扁鵲傳「不待一脈」○かなめ(要)○とじきみ(門限)○かへし。○反。字音を示すために、或字の發聲と或字の聲韻と相磨して一の音を生ずる法。○みぎり。○初に通ず。○おほし(家)○一

【刃】 刀を以て之を断つ。○きる、刀を以て之を断つ。○きざむ(刻)○さく(割)○みがく、骨角の類をみがきあける。○せまる(迫)○しきりに。○いそぐ(急)○まこと(懇實)ねんごろ(懇到)○たしかに(確實)○おさへる(按)史、扁鵲傳「不待一脈」○かなめ(要)○とじきみ(門限)○かへし。○反。字音を示すために、或字の發聲と或字の聲韻と相磨して一の音を生ずる法。○みぎり。○初に通ず。○おほし(家)○一

刑

○のり(法律)○つね(常法)
「典」○のつとる(法)孝經
「德教加於百姓」於四海

罪事件。○刑事巡查の略語。犯罪人
を偵察逮捕するを専務とす。
【刑人】刑を受けて身體を傷つけ

【刑罰】つみと、ばつと。刑法罰則。
論、子路、「一不中」
【刑法】○罪人を處分するおきて。

【刎】ゲツ
○あしきる(斷足)あしの筋
をたちきる刑。刎。たつ

刎

○わかつ、わかる(分解)○つ
らなる、つらぬ(陳連)○なら
ぶ(並)○くらむ(位位次)○

【列子】八卷、一に冲虛眞經とい
ふ、鄭人列禦寇撰す、天瑞・黃帝・周

【刎】ゲツ
○おびやかす(刎)○うばふ

○けづる(削)○のぞく(削除)
理に合はざる不要の文字を除

する。伊洛源録附録、其他浮辭多
合ニ一ニ一刪省。

【刪撰】文字文章の不要のものを
除き去りて撰定する。刪定。
【刪削】けづりける。劉寛夫文、
「成、功、繁、無、立、盡」
【刪除】けづりて除き去る。刪
省。

【刪定】删修に同じ。
【刪補】不要の字句をけづり必要
の字句を増し加へる。刪拾、刪削
増補。

初

【初】シヨ 魚
○はじめ(始)○はじめて。○
もと(本原)莊、繕性「復其」
○はじめり、おこり(端緒)ふ
ること(故事)檀弓「夫魯有」
○まへかた(以前)舊「左、隣
元」遂爲「母子」如「〇」ひ、
はつ。

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

始なり。大雅「后稷肇祀」○創は創
始の意、新に爲し始むる義。詩傳
「時秦君始有車馬、故國人創見而
驚美之」○初は創に同じ、創業を
指し、初も書く、初、俗字。○初は日
の初めて出る意。通鑑「三皇之號、
訪於周禮」○首は頭首の義、一
番がけの意。○甫は始也と註す、
大きくなることの始めなり。後漢
書「甫從博士爲刺史」
【初衣】〇未だ仕官せざる前の衣
服。李白詩「久辭榮祿遂」
〇初服。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
て著せる衣服。〇産衣。
【初念】〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
し心、最初の一心。

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚
【初】ハツ 魚

る。是非曲直を決断する。又、
さばき、裁決。○わかちる
(離散)○なかば(半)○かたわ
れ(片)配耦者一方、夫、又
は婦。○つかさ。○大官の人が
小官を兼ねるにいふ、宋代、宰
相が樞密院にとなる類。〇
〇〇印形。〇〇紙などの大さ。〇
古の金貨の稱「大」小。

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚
【判】ハツ 魚

李白詩「桃花流水杳然去，別有天地非人間」別乾坤。
 【別途】^ト ほかのみち、異なる方面。
 【別支】^ト 國本隊の外に在りて別に行動し、本隊を援助する軍隊。
 【別派】^ト ほかの流派。北史「同派一」。
 【別房】^ト 〇妾をいふ。世説「謝太傅劉夫人性妒，不令公有一」。
 【別室】^ト 〇べつのへや。
 【別品】^ト 〇國かけて善き品物。〇うつくしき女、別嬪。〇美人。
 【別名】^ト 〇異名に同じ。史「五帝紀注」。
 【別族】^ト 〇族者、氏之別名也。
 【別離】^ト 〇わかれる。わかれ。楚辭「九歌」悲莫悲兮新離。〇離別。
 【別淚】^ト 〇わかれのなみだ。杜甫詩「天涯春欲催，遲暮一遙添錦水波」。

【利】^リ 〇とし(銛)するとし(銳)鈍の反對。〇はやし(疾)物事がすらすらと通りてとどこほらす。孟「盡心」惡「口」〇よし(吉)よろし(宜)易、賁卦「有攸往」〇つがふよし(便宜)〇こころよし(快)〇なめらか

【利】^リ 〇とし(銛)するとし(銳)鈍の反對。〇はやし(疾)物事がすらすらと通りてとどこほらす。孟「盡心」惡「口」〇よし(吉)よろし(宜)易、賁卦「有攸往」〇つがふよし(便宜)〇こころよし(快)〇なめらか

【利】^リ 〇とし(銛)するとし(銳)鈍の反對。〇はやし(疾)物事がすらすらと通りてとどこほらす。孟「盡心」惡「口」〇よし(吉)よろし(宜)易、賁卦「有攸往」〇つがふよし(便宜)〇こころよし(快)〇なめらか

人の利を求むるときは、皆、孟賁、專諸の如き勇氣を發して、少しも畏ることなき義(韓非、内儲説)【利倍】^リ 益を得ること一倍する。白居易「策林」應疾而化速、一而功兼。【利不從天來】^リ 利は天より降り來ることなし。鹽鐵論「利不從地出」。【利兵】^リ するときはもの。孟「梁惠王」堅甲。【利病】^リ 利と害と。後漢書「羊續傳」侯「民」一利。【利便】^リ 都合よろし。賈誼文「因利乘便、宰割天下、分裂河山」。【利鋒】^リ するときは。韓詩外傳「莫邪之」。【利用】^リ 〇物の用ひ方をよくする。書「大禹謨」正徳一、厚生惟和。〇巧に應用する。【利用厚生】^リ 利用とは工の器を作り商の貨を運する類、厚生とは帛を衣、肉を食ひ、飢えず寒えずの類をいふ。前條參看。【利欲】^リ 〇むさぼりほしがる心。抱朴子「不爲一動」。【利率】^リ 利息の元金に對するわりあひ。【利祿】^リ 〇ふちのもうけ、又、ふちを得るを利する。禮記「事君三達而不出竟則一也」。

【刮】^ク 〇けづる(削)〇する(刷)〇する(擦)韓愈「進學解」一垢磨光。【刮目】^ク 〇目をこすり拭うて明かに見る。吳志「呂蒙傳」注「蒙曰士別三日、即當一刮目」。【刮】^ク 〇さく、わる(割)〇割きて取る。戰國策「魏之東野」〇さす(刺)易、歸妹「士」羊無血。【刑】^ケ 刑(刀部四畫)の本字。【券】^{ケン} 〇てがた、わりふ(契)古、木ふだに契約の事項を書き、兩分して各一を雙方に保存し、後日の證とせしもの。史「孟嘗君傳」合「契」之。〇きつぷ。きつて印紙證文の類「郵」有價證。【折券】^セ 借用證書を破り棄てる。

【割】^ケ 〇さく、わる(割)〇割きて取る。戰國策「魏之東野」〇さす(刺)易、歸妹「士」羊無血。【刑】^ケ 刑(刀部四畫)の本字。【券】^{ケン} 〇てがた、わりふ(契)古、木ふだに契約の事項を書き、兩分して各一を雙方に保存し、後日の證とせしもの。史「孟嘗君傳」合「契」之。〇きつぷ。きつて印紙證文の類「郵」有價證。【折券】^セ 借用證書を破り棄てる。

【刻】^ク 〇さく、わる(割)〇割きて取る。戰國策「魏之東野」〇さす(刺)易、歸妹「士」羊無血。【刑】^ケ 刑(刀部四畫)の本字。【券】^{ケン} 〇てがた、わりふ(契)古、木ふだに契約の事項を書き、兩分して各一を雙方に保存し、後日の證とせしもの。史「孟嘗君傳」合「契」之。〇きつぷ。きつて印紙證文の類「郵」有價證。【折券】^セ 借用證書を破り棄てる。

【刻】^ク 〇さく、わる(割)〇割きて取る。戰國策「魏之東野」〇さす(刺)易、歸妹「士」羊無血。【刑】^ケ 刑(刀部四畫)の本字。【券】^{ケン} 〇てがた、わりふ(契)古、木ふだに契約の事項を書き、兩分して各一を雙方に保存し、後日の證とせしもの。史「孟嘗君傳」合「契」之。〇きつぷ。きつて印紙證文の類「郵」有價證。【折券】^セ 借用證書を破り棄てる。

【剛強】ガク かくしてつよし。漢書、王莽傳「曾蒙詩、一必死仁義王」剛強。

【剛玉】ガク 鋼玉石の異稱。

【剛果】ガク 心つよくしておもひきりよし。後漢書、楊政傳「其一任情、皆如此也」剛決。

【剛決】ガク 志かたくおもひきりよし。唐書「犯上」剛果。

【剛健】ガク 剛直にして正言して偉らず。北史、李諤傳「務存大體、不尙嚴猛、由是無一之譽、而潛有匡正之志」。

【剛直】ガク 剛直にして風せざる義。魏志、桓階傳「一少黨」。

【剛嚴】ガク つよくしてきびし。唐書「皆以剛操下」。

【剛毅】ガク 心がつよくしてせつちかち。剛毅。

【剛毅】ガク 心がつよくしてせつちかち。剛毅。

【剛毅】ガク 心がつよくしてせつちかち。剛毅。

人。論、公治長「吾未見剛者」。

【剛剛】ガク 剛剛に同じ。

【剛剛】ガク 志つよくしておもひきりよし。漢書「剛剛者一性」剛剛決。

【剛剛】ガク 心つよく物に風せず。南史、弘正傳「詳讀似優、一似直」。

【剛直】ガク 志かたくしてただし。後漢書、倫雖「一、然常疾俗吏苛刻」。

【剛卯】ガク 漢代、官吏が佩びたる飾の具。剛はつよし、卯は國姓の劉の字を折つて卯金刀となるによる。漢書、王莽傳。

【剛敏】ガク つよくしてさとし。元史、阿沙不花傳「廉直一、愛國如愛家」。

【剛武】ガク つよくいさまし。漢書、地理志「周末有子路、夏育、民人慕之、故其俗一、上氣力」。

【剛風】ガク 道家にて高き處の風をいふ。抱朴子「去地四千里、風力猛壯、有一世界」。

【剛愎】ガク がらじやうにしてもとる、剛愎愎愎の義。左、宣十二「一不仁、未肯用命」剛愎。

【剛愎】ガク 心つよくして急なり、剛愎愎愎の義。魏志、呂布傳「卓性剛而褊、唐書、崔元翰傳「性一不能取容於時、孤特自恃」。

【剛辯】ガク 剛健にして明辯なり。北史、李彪傳「一之才、頗堪時用」。

【剛猛】ガク つよくしてたけし。三國論「高祖有二果銳一之氣」。

【剛來】ガク 剛今來る、剛は助字。

【剛力】ガク 剛つよく大いなる力。○修驗者の伴ふ奴等轉じて高山の靈場に登る者を案内する人足をいふ。

【剛戾】ガク 強情にして理にもとる。史、秦紀「始皇爲人天性一自用」剛戾。

【剛戾自用】ガク 剛がらじやうにしてもとる、自ら才智を用ひて人の説を容れず。前條を見よ。

【剛烈】ガク こはくしてはげし。後漢書「肆情一、成其不撓之威」。

【剛猛】ガク 剛の異名。曲禮。

【剛健】ガク つよくして威嚴あり。後漢書、王允傳「允性一疾惡」。

る(鈔取)うばひとる(奪取)剗。

【剗】ガク ①サン・セン ②サン・セン ③セン

○けづる(剗)剗に通ず。○たひらける(平)戰國策「一而類破吾家」○をさむ(治)平に治める。韓愈詩「活計以剗」○かる(剗)除き去る。蘇軾詩「賊壘何足」。

【剗】ガク けがれたるものを剗り去る。白居易詩「新聞聊一剗」。

【剗】ガク ①さす、さしこむ。○刀を挿む。史、張耳陳餘傳「敢一刃公之腹中」剗し殺す義。通じて傳に作る。

【剗】ガク 剗傳、指整の別は剗刀部六畫の條を見よ。

【剗】ガク 剗刀部六畫の俗字。

【剗】ガク 剗刀部六畫の俗字。

【剗】ガク 剗刀部六畫の俗字。

す。韓愈、進學解「爬羅一、刮垢磨光」賢者を求め出して登用する形容。

【剗】ガク 剗たち切る。詩、大雅、疏「去之、一之者」。

【剗】ガク ①チツ ②タツ ③タツ

○けづる(剗)商子、定分「有敢」定法令者死「○さす(剗)兵器にて剗す。史、張耳陳餘傳「剗一無可擊者」○さく(剗)剗き取る。漢書、賈誼傳「盜者一、廢戶之廉」○けづりさる(剗去)。

【剗定】ガク けづりて定める。字解を見よ。

在地、其文一。

【剗】ガク 剗面などが古くなりてはげける。缺損する。餓はむしはみし如く見える。老學庵筆記「漢諫歲久、風雨一、故其字無復鋒銛」。

【剗】ガク 鳥獸などの皮を剗ぎ肉を去り、防腐劑を塗りて、これを原形の如く縫ひあはせて標本用などにせし者。

【剗】ガク 剗こつこつと敵の音の形容。足音又は訪問者の戸を叩く音の形容。韓愈、一、行「剗剗啄啄、有客至門」輟耕錄「門無一、松影參差」。

【剗】ガク 剗がしおつる。荀子「不二」。

【剗】ガク 剗はぎとる。奪ひ取る。元稹詩「患在二子一之不已」剗奪。剗はぎとる。易、剗卦「君子得剗、小人一」。

【剗復】ガク 二字共に易の卦、剗卦は一陽、五陰の上在り、即ち陰が長じて陽が消するの象。復卦は震下坤上に一陽が五陰の下在り、即ち陽氣が漸く將に盛んならんとするの象。亂世の極、治世となる如く、乘除消長の理にいふ。宋史、程元鳳傳「極論世運一之機、及人主所當法」天者、理宗覽之曰、有「古遺直風」。

【剗】ガク 剗を重くして民を苦しめる。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

【剗】ガク 剗はげおつる。李邕賦「苦蘇一、雨露淋漓」。

記、一有「朱書」。

【剗】ガク 剗さげやぶる。さきやぶる。蔡邕疏「肝腦流離、白骨一」。

【剗】ガク 剗わかれ開く。韓非、解老「自天地一、以至子今」剗開。

【剗】ガク 剗はらわちわる。晉書「岐伯一、以剗」。

【剗】ガク 剗わかれる。成公綏賦「清濁一、玄黃判離」。

【剗】ガク 剗わちさく、分割する。漢書、諸侯王表「一、疆土、立二等之爵」。

【剗】ガク 剗はらわちさく、分割する。漢書、諸侯王表「一、疆土、立二等之爵」。

【剗】ガク 剗はらわちさく、分割する。漢書、諸侯王表「一、疆土、立二等之爵」。

【剗】ガク 剗はらわちさく、分割する。漢書、諸侯王表「一、疆土、立二等之爵」。

【剗】ガク 剗はらわちさく、分割する。漢書、諸侯王表「一、疆土、立二等之爵」。

【剗】ガク 剗はらわちさく、分割する。漢書、諸侯王表「一、疆土、立二等之爵」。

【剗】ガク 剗はらわちさく、分割する。漢書、諸侯王表「一、疆土、立二等之爵」。

【剗】ガク 剗はらわちさく、分割する。漢書、諸侯王表「一、疆土、立二等之爵」。

肉をけづりて骨を置く。
割 クワク 割

物の破ぶるる聲。
剝 ショウウ 剝 俗字

〇あまる、あまり(餘)〇ながし(長)おほし(過多)〇あまっさへ、おまけに。

【割】マ割・餘・衍・賸等の別は餘(食部七畫)の條を見よ。

【剝】マ事の過ぎて後、尙殘るかなし。李嬌詩「莫聽西秦奏、等尋有二一」餘哀。

【剝】マあまりたる人數。玉海「初置二一」以處二退兵」

【剝】ママ割。又あまれる金。剝餘金。

【剝】マむだぐち。傳燈錄「浮杯無二一」剝賢言。

【剝】マあまり「一一金」剝餘。剝餘。

【剝】マあまり「一一金」剝餘。剝餘。

く(佐助)〇かなふ(稱)適合する。〇そへ(貳)たすけ(輔佐)〇つまびらか(審)〇うつし(謄寫本)〇すべてそへの者、正の對「一使」「一將」「一車」〇古、后、夫人の首飾、髪を編みて作る「一算」

【割】マ副。添・馥・沿の別は添(水部八畫)の條を見よ。

【剝】マ副。監につきそひて之を輔佐する官。唐書「裴寂傳」歷侍御史晉陽宮「一」

【剝】マ副。長官に直屬して軍事上の庶務を掌る武官。

【剝】マ副。追白、追啓二仲。

【剝】マ副。古、貴夫人の髪かざり、歩搖の類。詩「鄘風」「一六珈」

【剝】マ副。本業のあひまにする仕事、新作のかたはら養雞、養豚を爲す類。

【剝】マ副。主産物に附隨して生ずる物品。石炭瓦斯を製造する時生ずる酸炭の類。

【剝】マ副。薬が其の目的たるはたらきに附隨して生ずる別の作用。

【剝】マ副。そのつかひ、正使につきその使者。唐代、節度使、觀察使、團練使など皆「一」あり。

【剝】マ副。そのつかひ、書經傳「一三三公」

【剝】マ副。動詞・形容詞又は他の副詞につきそひて其の意味を限定することば。

【剝】マ副。そへぐるま。史「謂侯世家」良擊二秦皇帝傳浪沙中、誤中「一」

【剝】マ副。主將の副たるもの、次將。

【剝】マ副。皇太子の稱。後漢書「儲君「一」

【剝】マ副。勅語の御名御璽に關係大臣が姓名をそへがきする。

【剝】マ副。副車に同じ。

【剝】マ副。食物に同じ。飯にそへて食ふ食物、おかず。

【剝】マ副。正本のひかへ。正本のうつし。唐書「百官志」使先驗「一」

【剝】マ副。正本のひかへ。正本のうつし。唐書「百官志」使先驗「一」

【剝】マ副。刀を以て裂く。〇

たつ(裁)きる(切)裁り取る。〇わる、やぶる(破)〇わかつ(分)杜甫詩「陰陽」昏曉「わか(分)〇そこなふ(損)害」書、堯典「洪水方」〇わざはひ(災害)書、大誥「天降」于我家「〇國わり、率」の義。一は十分の一。〇わる、數を除する「一算」

【割】マ割。割・析・劈等の別は裂(衣部六畫)の條を見よ。

【剝】マ副。残り惜しき心をさきて去る。徐堅詩「皇恩曉」下人「一」遠和親。

【剝】マ副。地をさき取りて據る。漢書「傳」席三卷三秦、一「河山」

【剝】マ副。地をさきとる。阮瑀文「割」授江南、不屬二本州」

【剝】マ副。いにへを料理する。禮樂記「天子親而割牲」

【剝】マ副。座を別にする。同席せず。六帖「魏晉寧與三華故同學」中略「一」曰、子非「我友」也

【剝】マ副。數學にて圓周と交りて二つの交叉點を生ずる直線。

【剝】マ副。肉をさきてにる。料理する。孟萬章「尹尹以「一」要湯有諸」

【剝】マ副。國はらさる。〇切度。【割】マ割。割らあひ、一率。〇彼此を

比較して、くらべて、「一」に高い。【割】マ割。割き合せて證據とする爲め一の印を二枚の紙にかけて押すをいふ。わりはん。

【割】マ割。小きくわりたる石、土壘下文、道著跡などに用ふ。

【割】マ割。國本文の下に二行に記する。かきいれ。〇註脚。

【割】マ割。國定價の幾分を引きさげらる。〇減價。

【割】マ割。木片に文字を記して二つにわり、一片を止め一片を授け、他日合せて證とするもの。〇符節・符契・勘合。

【割】マ割。國わけまへ、配當額。又分擔して支拂ふ一人あてのたか。

【割】マ割。國剩餘金を割り出金者にありあてて返す。

【割】マ割。〇シヤウ・サウ 〇シヤウ・サウ 〇シヤウ・サウ

〇さす。漢書、曹參傳「身被七十」〇さすつく(刃傷)〇できもの、かさ。曲禮「頭有「一則沐」〇さす。〇はじむ、始める(始)造る。〇さす。〇いたむ(傷)〇さす(懲)る。〇さす(懲)る。

【割】マ割。〇シヤウ・サウ 〇シヤウ・サウ 〇シヤウ・サウ

【割】マ割。〇シヤウ・サウ 〇シヤウ・サウ 〇シヤウ・サウ

【其性吉士、用一ニ我國家】

勸

【勸】クン 古字

いさを、いさをし(功績)皇室又は國家に盡したるてがら。説文「能成王功也」

【勸位】皇室又は國家に功ありし者に授けられるくらゐ「大ニ」勸級。

【勸隆】子弟が父兄の功業によりて官爵を得るをいふ。齊書「一人勸記」勸等に敘せらるる證として、勸章と共に賜はるるかきつけ。

【勸賞】勸てがらある貴族。宋史「出於一、文辭清麗」

【勸善】國家に勸功ある故舊の臣。晉書「陳壽傳」帝以其一善老禮之甚重

【勸功】勸いさを、てがら。勸功績。勸臣「勸てがらあるけら。宋書、感質傳、質國戚一、忠誠篤亮」

【勸狀】勸いさをを賞めて大將などより賜る感狀。

【勸章】勸てがらをあらはす爲めに賜はるるしるし。勸功を表する勸章。勸緒「勸いさを。勸業、勸緒」

爲ニ一、使三人知ニ善老事、長之義一

【勸進】勸進のすすめ。六代論「一ニ賢能一〇〇〇寺院建立などに寄附金をすすめる」一帳一〇〇〇喜捨、勸化。〇國或資金を得る爲めに興行物を催し、觀覽料の收入を以て之に充てる義「一相撲」一〇〇元

【勸進帳】寺院建立などの寄附金を募る帳面。勸化帳。

【勸進表】帝位に即くことを勸める上表。魏晉六朝、凡そ位を奪ふ者、皆禪讓に託す、讓國の詔既に下るも、猶遜讓して受けず、朝臣乃ち一を率る、大抵功德を頌美して、之を天命に歸す、諛辭滿紙、文品の最下なるもの。

【勸相】勸すすめ助ける。易經「君子以勞民一」

【勸獎】勸はげましたすむ。唐書「尊三尚節、發揚一」勸勸。

【勸賞】人に善行を勸むる爲め賞與する。宋史、長吏傳「以充一〇〇勸請」佛の靈のうつしを他の所に請ひ、迎へて、永く其の所にまつる。大乘法數「虔心一、以達二歸敬之誠」

【勸善懲惡】よきことをすすめ、惡しきことをこらす。左、成、十四「懲惡而勸善、非聖人誰能修之」勸懲。

【勸善懲惡】よきことをすすめ、惡しきことをこらす。左、成、十四「懲惡而勸善、非聖人誰能修之」勸懲。

【勸善懲惡】よきことをすすめ、惡しきことをこらす。左、成、十四「懲惡而勸善、非聖人誰能修之」勸懲。

【勸善懲惡】よきことをすすめ、惡しきことをこらす。左、成、十四「懲惡而勸善、非聖人誰能修之」勸懲。

【勸善懲惡】よきことをすすめ、惡しきことをこらす。左、成、十四「懲惡而勸善、非聖人誰能修之」勸懲。

勸

勸

勸

勸

勸

勸

勸

勸

勸

【勸述】勸いさをのあと。晉書「家君一一如此」

【勸績】勸いさを。晉書「刻石爲三碑、紀一其一二勸業、功績、功勳」

【勸等】勸てがらいさをの大小の等級「勸二等」

【勸望】勸いさをを、ほまれと。北史「賈儼傳、前朝舊臣、一兼至」

【勸問】勸いさをあるいへがら。宋史、吳挺傳「挺少起一、弗居其責一勸勸」

【勸勞】王事又は國家に盡したるてがら、ほねをり。禮記「成王以二周公、爲有ニ一於天下」勸勞。

【勸烈】勸大いなるいさを。後漢書「歷事二主、一獨昭」

勸

【勸】レイ 通じて厲

〇はけむ、つとむ(勉)「勸一〇はけます(勸勉)「獎一〇すすむ(勸)」

【勸行】勸はげまおこなふ。又、おこなひをはげます。南史「修身一非禮不動」

【勸志】いこころをさしをげます。晉の張華、一詩九篇を作る、文選に載す。厲志。

【勸精】心をはげます。精勵・厲精。

【勸率】勸すすめひきめる。晉書「一有功、深加二獎勵」

【勸懲】勸善をすすめ、惡をこらす。宋史、禮志「是非較然、用爲一勸懲」勸懲惡を見よ。

【勸農】農業をすすめはげます。事物紀原「漢承秦、置太農丞十三人、入部一州一以一乘力田一者、此一官之始也」

【勸勉】勸すすめはげます。獎勵

勸

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

勸

【勸】ケン

〇すすむ(獎)つとめ行はしむ。漢書、賈誼傳「慶賞以善、刑罰以懲惡」〇つとむ(勉)力行する。〇たすく(助)〇悦び從ふ。論、爲政「舉善教不能則一〇おしへみちびく(教導)誘掖する。書、大禹謨「一之九歌」〇はげます。

【勸誘】勸進・晉・前・蕭・蓋・獎の別は進(走部八畫)の條を見よ。

【勸誘】勸すすめいざなふ、説きさとして従はしむ。

【勸誘員】勸進・保險會社等にて保險に加入せんことを説きすすめる運動員。

【勸戒】勸善をすすめ、惡をいましむ。左傳、序「其教之所存、文之所、則刑正之、以示一勸懲」

【勸解】勸進の争を説きさとして和解せしむる。輟耕錄「某甲與一某乙、鬪毆、某甲之母一、授方任能」

【勸學】勸すすめはげます。左傳、敬教一、授方任能」

【勸學院】勸弘仁十二年、藤原冬嗣の創建せし藤原氏の學校。

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸學田】勸古、學問獎勵の目的にて大學寮、典藥寮、勸學院の生徒の食費に充つる爲めに、朝廷より附與せられたる租稅免除の田。

【勸學文】勸學問を勸むる爲めに、作れる有韻の文。古文眞寶前集に、宋の眞宗皇帝・仁宗皇帝・柳屯田(永)王荊公(安石)白樂天(居易)朱文公(熹)の一、及司馬溫公(光)の勸學歌を載す。

【勸課】勸人民にわりあてて仕事をすすめ行はしむる。

【勸誨】勸すすめをいふ。宋史「建一學館一」

【勸化】勸信者の善捨をつのる。「一帳」釋氏要覽「一得財、疑一造佛像」

【勸業】勸なりはひをすすめはげます。殖産興業を獎勵する。史、貨殖傳「各勸其業、樂其事」

【勸業銀行】勸業工業の改良發達のため、其の資本を貸附するを以て目的とする株式組織の銀行。又、其の銀行が發行する債券を勸業債券といふ。

【勸工】勸工業をすすめはげます。中唐「勸百工」

【勸告】勸言ひかかせてすすむる。忠告する「辭職一」

【勸酬】勸酒をすすめむくゆ。宋史、道學傳「張載爲三學、每月言、具酒食、召一鄉人、高年一會、難展、親上作橋、長一百五十步、一甚嚴飾、一之名、始見此」勸酬、勸

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

【勸】ハク

三 匚

【匚】カイ 匚・カチ 匚に作る
○こふ(乞)○もとむ(求)漢書西域傳「乞無所得」○あたふ(與)後漢書竇武傳「施貧民」

【匚】カイ 匚(前條)に同じ。

【勿】俗に忽と同じく用ひ、一説、勿勿を誤用せしならんと。

【包】ハワ 匚

○つつむ。禮、樂記「倒載干戈、以之虎皮、つつみ(裹)つつみしもの、と(苞)○いる(容)○とる(取)○かぬ(兼)す(兼)○ふくむ(含)○をさむ(藏)かくす(隱)李翺、幽懷賦「深懷而告誰」○おひしける(叢生)書、禹貢「草木漸」苞に通ず。○はらごもり、はらごもる(孕)○くりや。易、姤卦「有魚」匚。○ひさじ。匚。

【匚】ハワ 匚

四 匚

【包含】ハツツみふくむ。後漢書「一山澤、遠帶二丘荒」匚包容。【包儲】ハツツみふくむ。伏義に同じ「易、繫辭」匚包。【包舉】ハツツみふくむ。物をつつむ如く、悉く取る。漢書、賈誼傳「席卷天下、一匚字内」。【包囊】ハツツみふくむ。范成大詩「葉實豐、肌危欲死、尙能一匚絲菓」絲菓はまゆ。

【包懷】ハツツみい。くす。すべて所有する。晉書、武帝紀「廓清梁嶼、一匚揚越」。【包荒】ハツツみい。くす。宰相が人の言を聴きいれる器量ある義。易、泰卦「一匚用鴻河」。【包括】ハツツみい。くす。とめてひとくりにす。西京雜記「賦家之心、一匚字宙」ハツツみ括。

【包華】ハツツみい。くす。皮が龜頭に つきて離れる男根。【包製】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。【包藏】ハツツみい。くす。左、昭元「一匚禍心」。【包子】ハツツみい。くす。銀錢を包みて封じたるもの。宋武林遺事「大内賜匚匚」匚匚頭銀匚のあるもの(鶴林玉露)。

【包圍】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【包紮】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【包圍】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【包圍】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【包圍】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【包圍】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

匚

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

匚部

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

匚

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

【匚】ハツツみい。くす。つみよそぼふ。韓愈詩「古道自愚秦、古言自匚」。

八世孫の高弟十人。榎本其角・服部
胤雪・森川許六・向井去來・各務支
考・内藤丈草・立花北枝・河合曾良・
志田野城・越智越人。〇黨門十哲。
【十方】〇東南西北の四方と其の乾・
坤・艮・巽の四隅と上下との稱。天
下又、宇宙の義。唐太宗、聖教序
「弘三濟萬品」典「御一」
【十法界】〇地獄・餓鬼・畜生・修
羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・佛
の十世界。〇十界。

【廿】

ニフ

又、廿に

作る

はたち、二十。

【千】

セン

〇ち、百を十倍せし數。〇ちた

び「一回」中庸「人十能之、已
之」〇ち、數の多き義。〇ち
また、南北に通ずる路。〇ち
〇一錢をいふ。
【千鎰之裝非二狐之白】〇千鎰は千鎰の義。
狐の國を治むるには衆賢の力に資る
に喩ふ。墨子「江河之水非二水之
源」一鎰は二十兩、又二十四

兩。
【千葉桃花】〇やへぎきの桃の花。
開天遺事「御苑」一開、明皇折二
枝「實紀」二曰、此花亦能助嬌
【千億】〇甚だ多き數にいふ。吳越春
秋「君臣同和、福祐一」
【千鈞】〇おほくのはなぶき。白居易
詩「削、碧排二一」
【千容萬變】〇國多數のきくが
入り代りて集り來る。
【千巖萬壑】〇おほくの岩と溪と。
すぐれたる溪山をいふ。晉書「顧愷
之傳」千巖競秀、萬壑爭流
【千金】〇大金又、甚だしき高價の
義。一金は十兩。說苑「建本」一之
裝非二狐之皮」〇かねもち、富豪
の義。史、越世家「一之子不死
於市」
【千金之價】〇甚だ貴きあたひ。一
金は十兩。論衡「有利劍」一
【千金之裝】〇ねうちあるかほご
ろも。說苑「建本」一、非二狐之
皮」
【千金之裝非二狐之皮】〇千金の裝は狐の皮より貴き。狐の皮は狐の能く成す所にあらず、國を治むるは衆賢の力によるに喩ふ。史、劉叔孫通傳

史、袁盎傳「千金之子、不垂堂」
【千金不垂堂】〇千金の子は堂の瓦が落ちても死なぬ。刑徒刑にても免れ得られる。地獄の沙汰も金次第。尉繚子「將理」今世語云「一」
【千鈞】〇重量の甚だ大いなるに
いふ。一鈞は三十斤。魏志「一」之弩、
不爲三鴈足、發機、韓愈、與孟尚
書「書」一髮引二一」
【垂千鈞之重於鳥卵上】〇千鈞の重きを鳥卵の上に置く。重大を以て輕小に比ぶれば直ちに破る。以て形勢の危きに喩ふ。史、張儀傳「三孟賁烏獲之士、以攻三不服之弱國、無異、垂千鈞之重於鳥卵上、必無幸矣」
【以三千鈞之重】〇千鈞の重きを以て疲勞に乘ずれば、之を破ること甚だ易きに喩ふ。晉書「張華傳」以天下擊之、譬猶、以三千鈞之重、潰一也」
【千軍萬馬】〇多くの兵士と馬と。
〇千兵萬馬。

文「激三清一時、流二馨一」
【千古名】〇永世まで殘るほまれ。
李白詩「登傳」一」
【千斛船】〇米千石を積む大舟。
〇千石舟。
【千戶侯】〇千戸ある廣き領地を有する大名。史、貨殖傳「渭川千畝竹、(中略)其人皆與」一」等
【千呼萬喚】〇幾度となくしきりによぶ。白居易「琵琶行」一始出來、猶抱二琵琶、半遮二面」
【千劫】〇幾世。唐太宗、聖教序「無滅無生、歷二一」〇萬世。
【千載一遇】〇幾千年に一たび相あふ。容易に遇ひがたき義。三國名臣序贊「一賢智之嘉會、遇之不、能無欣、喪之何能無愴」〇千載一時。
【千載之會】〇幾千年目に一度出あふ義。容易に得難きははりあはせ「宋書、袁淑傳」〇千載一遇。
【千載一時】〇千載の會に同じ。晉書「慕容暎載記」機運難、遊、公焉、辭也」
【千歲冰】〇永久とけざるこほり。西陽雜俎「頽梨、一所以化也」
【千差萬別】〇さまざまのちがひ。
【千山萬水】〇多くのやまかは。深山の形容。續元怪錄「一不見有路」
【千秋】〇ながき年月。李陵詩「嘉會難、再遇、三載爲千秋」

【千狀萬態】〇いろいろのさま。
歐陽修題跋「一筆簡而意足難矣」
【千手觀音】〇千手千眼觀世音菩薩の略。六觀音の一、像には四十の手あり、千手千眼は廣大無礙の化用をあらはす。
【千種萬類】〇いろいろの種類。
【千乘】〇千乗は兵車、周の制、天子は畿内の地千里四方を領し、兵車萬乗を出し、諸侯は方百里兵車一乗を出す。一乘には甲士三人、歩卒七十二人、車士二十五人附屬す、即ち千乗の車、十萬人の卒を出すを大諸侯の兵賦とす、轉じて大諸侯の義とす。孟、梁惠王「萬乘之國、試其君者、必一之家、一之國、試其君者、必百乘之家」
【千乘之國】〇大諸侯のくに。兵車千乗を出す國の義。論、學而「道二、敬事而信」
【千緒萬端】〇種種難多の事から。晉書、陶侃傳「遷三荊州刺史、侃性聰敏、勤於吏職、閫外多事、一、同有遺漏、遠近書疏、莫不、手答、筆翰如流」
【千石舟】〇千石の米をつむむほどのふね。せんごくふね。大學衍義補「造二一」〇千斛船。
【千搜萬索】〇いろいろにさがす。韓愈詩「一何處有」
【千朵】〇おほくのえだ。成廷珪詩「一

聲兩聲松子落、一萬葉芙蓉開」
【千丈隄以三蟻蟻之穴一潰】〇千丈の隄も蟻の穴が潰れば大害を來す。韓非、喻老」
【千日紅】〇草の名。秋日重瓣にて楊梅に似たる深紫色の花を著く。〇千日草。
【千人所指無病而死】〇千人が指す病に病む人多數の人にたまはじきさるれば病なくとも死する義。漢書、王嘉傳」
【千芳】〇多くの花。徐魁賦「百藥爭妍、一競、護二」千花。
【千般】〇いろいろのさま。韓偓詩「翠樹綠楊垂、一黃鳥語」〇千種、萬樣。
【千萬】〇いくへにも、くれぐれ「一自重」通俗韻「一今簡牘了寧語也、唐宋已皆用之」〇國世し。「不都合一」
【千百】〇あまた、多數の義。韓愈與孟尚書「書」所謂存二什一千一」
【千兵萬馬】〇おほくの兵とおほくの馬と。南史、陳慶之傳「一遮二白袍」〇千軍萬馬。
【千篇】〇多くの詩文をいふ。蘇軾詩「君才敏、贈兼三百、夫、朝作二一日未、晴、陸游詩、醉裏、一風雨速」
【千篇一律】〇詩文の作法が同じ調子にて變化なし。藝苑卮言「白樂天詩、一」
【千變萬化】〇いろいろにかはる。

列、湯問「一惟意所適」
【雖三千萬人吾往】〇自ら反省して直れば千萬人の多勢ありとも、少しも畏れず、之に抗して進み行かん。孟、公孫丑「自反而不縮、雖三褊、吾不備焉、自反而縮、一矣」
【千門萬戶】〇禁中の宮室の多きをいふ。史、封禪書「帝作二建章宮、度爲二」〇市中の人家の多きにいふ。
【千羊皮不、如二狐腋二】〇千羊の皮は狐の腋の皮より貴き。史、商君傳「趙良曰、一、千人之諾、諾不、如二一士之諾、諾」
【千里】〇はるかに遠き所。漢書、高帝紀「運三籌帷幄之中、決二勝一之外」〇極めて長し。淮南、人間訓「一之、以二蟻蟻之穴、一漏」
【千里鶯啼綠映紅】〇鶯の啼く處に鶯が鳴きて綠樹が紅花に映じて春色正に好し。杜牧、江南春「一、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中」
【尺二寸千里】〇千里の遠方の景を僅に一尺一寸程の場所に集めて見る。柳宗元、始得二西山、一宴游記「其高下之勢、呀然注然、若、怪若、穴、一、攢、蹙、累、積、莫、得、二、遊、隱」
【千里不、開行】〇千里の遠きに行くにも、遮り止むる者なし。天下

【千秋節】〇天子の誕生を賀するいはひ日。唐の開元十七年八月五日に始まる。明皇實錄「二天長節」
【千秋雪】〇千古の久しきに涉りて消えざる雪。杜甫詩「窗含西嶺、門泊東吳萬里船」
【千秋萬歲】〇千年萬年の義。長壽を願ふいはひのことば。ちよよるづよ。韓非、顯學「一之聲聒、耳、而一日之壽無、徵、于、人」
【千秋萬古】〇千年萬年、極めて久しき歲月。劉延芝、公孫行「百年同謝西山日、一北邙塵」
【千枝萬葉】〇道の千萬殊なるに喩ふ。淮南、傲眞「道有三經紀條貫、得二之道、連、一」
【千思萬考】〇いろいろに考ふ。
【千紫萬紅】〇紫や紅のいろいろのはな。
【千尋】〇ちひろ、尋は八尺、千尋は八千尺、轉じて極めて高く又甚だ深き形容とす。庾信詩「高閣一、起」
【千辛萬苦】〇おほくのくるしみ。
【千字文】〇一卷、梁の周興嗣撰す、四言古詩二百五十句より成る故に名づく、蓋し興嗣が魏の鍾繇の名づく、韻をふみて撰せしものなりといふ。
【千章】〇千本、大木を數ふるを章といふ。史、貨殖傳「山居一之材」
【千觴】〇千杯をおほくかさねる。李

白詩「高談滿四座、一日傾二一」
【千狀萬態】〇いろいろのさま。
歐陽修題跋「一筆簡而意足難矣」
【千手觀音】〇千手千眼觀世音菩薩の略。六觀音の一、像には四十の手あり、千手千眼は廣大無礙の化用をあらはす。
【千種萬類】〇いろいろの種類。
【千乘】〇千乗は兵車、周の制、天子は畿内の地千里四方を領し、兵車萬乗を出し、諸侯は方百里兵車一乗を出す。一乘には甲士三人、歩卒七十二人、車士二十五人附屬す、即ち千乗の車、十萬人の卒を出すを大諸侯の兵賦とす、轉じて大諸侯の義とす。孟、梁惠王「萬乘之國、試其君者、必一之家、一之國、試其君者、必百乘之家」
【千乘之國】〇大諸侯のくに。兵車千乗を出す國の義。論、學而「道二、敬事而信」
【千緒萬端】〇種種難多の事から。晉書、陶侃傳「遷三荊州刺史、侃性聰敏、勤於吏職、閫外多事、一、同有遺漏、遠近書疏、莫不、手答、筆翰如流」
【千石舟】〇千石の米をつむむほどのふね。せんごくふね。大學衍義補「造二一」〇千斛船。
【千搜萬索】〇いろいろにさがす。韓愈詩「一何處有」
【千朵】〇おほくのえだ。成廷珪詩「一

聲兩聲松子落、一萬葉芙蓉開」
【千丈隄以三蟻蟻之穴一潰】〇千丈の隄も蟻の穴が潰れば大害を來す。韓非、喻老」
【千日紅】〇草の名。秋日重瓣にて楊梅に似たる深紫色の花を著く。〇千日草。
【千人所指無病而死】〇千人が指す病に病む人多數の人にたまはじきさるれば病なくとも死する義。漢書、王嘉傳」
【千芳】〇多くの花。徐魁賦「百藥爭妍、一競、護二」千花。
【千般】〇いろいろのさま。韓偓詩「翠樹綠楊垂、一黃鳥語」〇千種、萬樣。
【千萬】〇いくへにも、くれぐれ「一自重」通俗韻「一今簡牘了寧語也、唐宋已皆用之」〇國世し。「不都合一」
【千百】〇あまた、多數の義。韓愈與孟尚書「書」所謂存二什一千一」
【千兵萬馬】〇おほくの兵とおほくの馬と。南史、陳慶之傳「一遮二白袍」〇千軍萬馬。
【千篇】〇多くの詩文をいふ。蘇軾詩「君才敏、贈兼三百、夫、朝作二一日未、晴、陸游詩、醉裏、一風雨速」
【千篇一律】〇詩文の作法が同じ調子にて變化なし。藝苑卮言「白樂天詩、一」
【千變萬化】〇いろいろにかはる。

列、湯問「一惟意所適」
【雖三千萬人吾往】〇自ら反省して直れば千萬人の多勢ありとも、少しも畏れず、之に抗して進み行かん。孟、公孫丑「自反而不縮、雖三褊、吾不備焉、自反而縮、一矣」
【千門萬戶】〇禁中の宮室の多きをいふ。史、封禪書「帝作二建章宮、度爲二」〇市中の人家の多きにいふ。
【千羊皮不、如二狐腋二】〇千羊の皮は狐の腋の皮より貴き。史、商君傳「趙良曰、一、千人之諾、諾不、如二一士之諾、諾」
【千里】〇はるかに遠き所。漢書、高帝紀「運三籌帷幄之中、決二勝一之外」〇極めて長し。淮南、人間訓「一之、以二蟻蟻之穴、一漏」
【千里鶯啼綠映紅】〇鶯の啼く處に鶯が鳴きて綠樹が紅花に映じて春色正に好し。杜牧、江南春「一、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中」
【尺二寸千里】〇千里の遠方の景を僅に一尺一寸程の場所に集めて見る。柳宗元、始得二西山、一宴游記「其高下之勢、呀然注然、若、怪若、穴、一、攢、蹙、累、積、莫、得、二、遊、隱」
【千里不、開行】〇千里の遠きに行くにも、遮り止むる者なし。天下

に敵なき義。莊、説劍「臣聞大王喜劍故以劍見王、王曰、子之劍何能禁制、曰、臣之劍、十步一人、王大説之、曰、天下無敵矣」

【千里命駕】遠方の友を思ひ之を訪はんとて、車を用意をなす。晉書、嵇康傳、呂安服、嵇康高致、每一相思、輒命駕

【千里眼】遠方まで見とけず力、探偵を使ふによる。魏書、楊逸傳「逸爲政愛人、尤憎繁猾、廣設耳目、其兵吏出使下邑、皆自持楮人、或爲設食者、雖在閭室、終不進、咸言楊使君有千里眼」

【千里同風】遠方まで同じ風が吹く、世の太平なる義。論衡「千里不同風、百里不同俗」

【千里猶一對面】書狀を以て陳述することの巧なるをいふ。唐書、房玄齡傳、高祖曰、房玄齡機識、實宜委任、每爲吾兒陳事、千里之外、猶一對面語

【千里馬】一日に千里を走る名馬。戰國策、齊、年一至於千里、轉じて、才智の勝れたる人に喩ふ。韓愈、雜説「世有伯樂、然後有千里馬」

【千里行始於足下】天下の事、皆微小を積みて大を成すに喩ふ。老子「合抱之木、生於毫末、九層之臺、起於累土」

【千里駒】年少にして才のすぐれたる者に比す。漢書、楚元王傳「千里駒に同じ。楚辭、卜居、寧昂昂若千里之駒乎」

【千里信】遠國よりのおとづれ。杜牧詩「故國香無千里信」

【千里月】遠方を照す月。李峤詩「他鄉千里月」

【千慮一失】智者もたまには思ひがひあり。史、淮陰侯傳「智者千慮必有二失、愚者千慮必有三得、故曰、狂夫之言、聖人擇焉」

【千慮一得】前條を見よ。

【千木】上古家屋の棟の上に交叉して取りつけたるかたそぎの材。今神社の建築にのみ用ふ。

【千代】千世に同じ。國極めて長きとしつき、ちよやちよ。千載、萬世。

漢書、劉向傳「朝臣舛」

【旁】はたてよこ(縦横)十文字に交る。字彙「一縦一横曰旁」

【午下】過午過ぎ。過午。

【午供】僧のひるめしのそなへ。僧清瑛詩「山廚修午供」

【午橋】唐の裴度、別墅、花木萬株、中起涼臺、名曰午橋。裴度、度視事之隙、與詩人白居易、劉禹錫、酬宴終日、高歌放言、以詩酒琴書自樂、當時名士皆從之游。

【午月】五月の異名。夏の正は寅に建つが故。月。

【午午】こみあふ貌。雜沓する。梅堯臣詩「雲中峯午午」

【午後】午下に同じ。晝の十二時より夜の十二時まで。唐書、韓愈傳「禁僧不得出」

【午刻】うまのこく、まひる。正午、亭午、午時、午牌。

【午餐】ひるめし。白居易詩「何所食、魚肉一兩味」

【午時】ひるめし、ひるじぶん。白居易詩「不作一眠、日長安可度」

【午飯】ひるめし。鄭谷詩「溪鷺喧山、山殿止春飢」

【午睡】ひるめし。陸游詩「寬腹一餘、午睡」

【午初】午前十一時。

【午睡】ひるめし。張耒詩「深堂無人」

【午餘】晝眠。

【午前】ましまへ、正午まへ。○夜の十二時より晝の十二時まで。

【午饌】ひるめし。皮日休詩「爲子備、午饌、午饌、午饌」

【午餐】ひるめし。楊萬里詩「夜熱依然、開門小立月明中」

【午砲】正午を知らせる爲めに放つ大砲。午砲。

【午飯】ひるめし。白居易詩「朝眠因客起、一伴僧齋、午飯」

【午梵】正午の執行。王安石詩「一隔雲知有寺」

【午夢】ひるめし。朱熹詩「倦來拂石支拳睡、萬壑吟風、午夢」

【午門】北京の紫禁城の正門。俗に五鳳樓といふ。前は皇城の端門に接す。

【午夜】夜の十二時。晝の十二時の午の轉用。李賀詩「羅幃一愁、午夜半、一説、午、五通、五夜(五更)に同じと。

【卅】ソフ。合。三十、みそ。

【升】シヨウ。別字。量目の名、一合の十倍。○ます、一升ます、俗に斛とも書く。○なる(成)禮、樂記「男女」

無辨則亂。○よみ、布八十縷の稱。禮、雜記「朝服十五、易の卦の名、巽下坤上。○すすむ(進)○あがる、のほる、のほす(登)降の反對。詩、小雅「如日之升」。○さかんなり(隆)○みのる、穀物成熟す。論、陽貨「新穀既」。同訓、升、上、昇、陞、登、騰、陟。の別は上(天)三(日)三(星)の條を見よ。

【以升量石】升と石とは共に秤目の名、升は少く、石は多し、故に量ること能はず、以て愚者が賢者の心を測ること能はざるに喩ふ。淮南子「使榮度、榮是猶以升量石也」

【升選】天子の崩御したまふをいふ。通鑑、梁武紀「先帝、胡注「記曲禮曰、告喪曰、天主登假、注、登上也、選已也、上已者、若仙去耳、登即升也」

【升登】さかんなりと、おとるふると、書、畢命「道有升、汗隆、盛衰。○上り下り。○昇降。○學位。○學位が進む。○昇級。進級。○官位が高くなる。○昇進。

【升恒】人の壽をいふ語。詩、小雅、天保「如二月之恒、如三日之升」

【升斛】ます。ますめ。王褒文「推之、以二、五、之、以二、權衡」

【升勺】一升一勺の量。ますめの多少。元好問詩「金粟論」

【升進】官位が、のぼりすすむ。後漢書、王符傳「符獨耿介、不同於俗、此遂不得升進、志竟蘊憤、乃隱居、著書三十餘篇」

【升階】高き階にのぼりて地をふむ。後漢書、章帝紀「經平原、一階防、詢訪者老」

【升沈】のぼるとしづむと、榮えると衰ふると。李白詩「一應已定、不必問君平」

【升殿】天子の殿上にのぼる。唐書、禮樂志「應、一者、詣東西階」

【升騰】のぼる。騰ものぼる。後漢書、左雄傳「騰躍、超等陰」

【升開】上なきこゆ。書、舜典「玄德、乃命以位」

【升平】穀物がよくみりて其の價がたひらかなり、轉じて、泰平の世の義とす。漢書、梅福傳「民有三平之儲、曰、一、宋之問詩「相與樂、一、昇平」

【升龍降龍】のぼり龍とくだり龍と。旌旗等の模様を用ふ。周禮、大行人「載大旗日月」

【半】ハ。合。○なかば(中央)「月」「夜」

○はんぶん(半分)「太」

「強」戰國策「秦不接刃而得趙之」

○わかつ(分)半分にわける。「折」世説「斫諸屋柱悉割、爲薪」

○全からず、少しばかり、終らず。○おほぎれ(大片)○はん、奇數。

【半價】はんねだん、半代價。南史、郭原平傳「裁求半價」

【半解】はんぶんだけわかる、なればとくする。滄浪詩話「有透徹之悟、有二知一之悟」

○はんぶんに分ける。左傳、註「享則二其體、一而薦之、所三以示其儉」

【半篋】篋はふなさを、半半分程の深さの水、一篋の半分。陳與義詩「寒碧秋垂釣、一笛西風夜倚樓」

【半額】○眉の廣きをいふ。ひたひの半分の義。後漢書「城中好廣眉」

四方且。○はんぶんの金高。【半可通】はんまものじり。一知半解の者。

【半規】はんまものはんぶん。規ははんまはし、轉じて圓の義とす。黃庭堅詩「新月吐、半圓、半輪」

【半旗】國意を表する時、旗竿の中程の所に掲げるはた。半旗。

【半弓】○はんまもの一種。大弓の半分位の長さのもの。

【半句】少しのことば。「一言」

【半官報】○はんまもの機關新聞。

【半夏】はんまもの、藥草の一種。月令「一、生、木槿榮」

○夏至より後十一日に當る日。凡そ七月二日頃、田植の終期とす。○半夏生、圓【半徑】はんまものはんぶん、圓又は球の中心より其の周圍又は表面に至る距離。直徑の半分。

【半頃】五十畝の田。頃は百畝。元好問詩「溪田耕半頃」

【半月】○はんまもの。徐陵、孝義寺碑「明星皎皎、流光」

○一ヶ月の半分。

【半流】はんぶんへる、はんぶんにへらす。汽車賃

【半山】宋の王安石の號。

【半産】流産なり。同春、婦人懷孕、血氣不能榮養、以致數月而墮、名「半産」

【半子】○はんまもの子に於て、むすめ

のむこ(唐書、回紇傳)劉禹錫祭二楊庶子文「爲君一」二女塚。
 【半紙】ハツシ 國紙の一種、二十枚を一帖とす。もと延紙を半分に切りたる大きなが故。
 【半日村】ハツシ 高山の麓にありて、一日の中、なかはは日陰になるむら。樂史太平寰宇記「此村山高蔽三陽影、常照其一半」
 【半死半生】ハツシ ながば死し、ながば生く、生死のさかひに在る。
 【半信半疑】ハツシ ながば信じ、ながばうたがふ、眞偽に迷ふ。
 【半身不遂】ハツシ 半身不遂の義、中氣などにて、身體の半分が自由を失ふ状態。半身不仁、半身不遂、偏枯。
 【半响】ハツシ 半時なり。水滸傳「王進看了一」
 【半鐘】ハツシ 圓つりがねの小なるもの。
 【半生】ハツシ 一生の半分、半生涯。陸游詩「天公惜我一勞、寄傲江湖亦足豪」
 【半生半熟】ハツシ なまにえ、未だ十分に心を相知らざる義。拈掌「莫怪尊前無笑語、一未相諳」轉じて技藝の未だ熟達せざるにもいふ。
 【半宵】ハツシ 半夜に同じ。
 【半切】ハツシ 唐紙を縦に半分に切りたるもの。半折。〇ハツシ 圓手紙を書

く紙。〇卷紙。
 【半島】ハツシ 陸地が海中につき出て、三方海に圍まれたる地。
 【半濁音】ハツシ 濁音と濁音とのなかばの音、バ・ビ・ブ・ボの五音。
 【半直】ハツシ はんね、半分の直。宋書、郭世道傳「以二一與世道」二半直。
 【半天】ハツシ 天のなかば。鮑照詩「高峯插二一〇中空、中天」
 【半鐘】ハツシ 圓形に似て袖短く、襟の折れてかへらざるもの。
 【半點鐘】ハツシ 三十分毎に撃つ鐘の義。轉じて半時間とす。一點鐘は一時間。
 【半途】ハツシ 事のちゆう、ちゆうとはんば、中途。李白詩「百歲落二一〇中道、半塗」
 【半風子】ハツシ 圓らしみの隱語。虱の字は風を半分にし形なるが故。
 【半幅】ハツシ 半分のはば、半枚。唐書、裴度傳「欲收二天下英雄之心、惟有二詔書紙一」
 【半腹】ハツシ 山のいただきと麓との中間の所。山中腹。韓愈詩「噴雲泄霧藏二一〇」
 【半部論語】ハツシ 通鑑、宋紀、趙普云、以「一治天下」
 【半面】ハツシ 〇かほの半分。南史、后妃傳「帝將至、必爲二一〇妝、以俟」
 【半面之識】ハツシ ナシのしりあひ、

少しく面を識れる義。後漢書、應奉傳注「嘗詣二彭城、相二賀、賀時出行、閉門造二車、匠於内、閉扇出二半面、視二奉、奉即委去、後數十年、路見二車匠、識而呼之」
 【半夜】ハツシ 夜半、半宵。
 【半輪】ハツシ 半ばかけたるつき。李白詩「蛾眉山月一秋、影入二平羌江水一流」二半規。
 【四】シツ 俗字
 【音】キ 俗字
 〇くさ、百草の總名。南史、徐勉傳「聚石移果、難以花」
 〇くさき、草木の總名。詩、小雅「山有嘉二維栗、維梅」
 【音犬】ハツシ 草にて作れる犬。朝野僉載「徐彦伯爲文、多變易求新、以二芻狗二爲二一、竹馬爲二獲麟」
 【冊】シツ 俗字
 よそ、四十。
 【音】世(一部四畫)に同じ
 【音】マン 俗字
 〇まんじ、佛書に用ふる萬の字。華嚴音義「音之爲萬、謂吉祥萬德之所」集也。〇〇巴

【五】シツ 俗字
 【六】シツ 俗字
 【協】ケフ 俗字
 〇かなふ、あはす(合)〇やはらぐ(和)〇つきしたがふ(服從)音、微子之命「下民祇」〇輔助をなす。
 【協韻】ハツシ 互に通じ合ふ詩の韻。滄浪詩話「楚辭及選詩、多用二一〇叶韻」
 【協韻】ハツシ かなひやはらぐ。宋史、樂志「必使二八音一、歌者從容而能永二其言」
 【協韻契約】ハツシ 債權者と破産者との間に結ぶ和解約束、裁判所の許可を得て猶豫又は債權の一部を棄てて破産處分を落着せしむる一法。
 【協合】ハツシ やはらぎあふ。禮記、疏「天地一、而生二養萬物」
 【協洽】ハツシ 十二支の未の異名。爾雅「大歲在二未、曰二一〇」
 【協韻】ハツシ はなしあひ、相談。宋史、禮志「淳寧同詞、指紳一」
 【協恭】ハツシ 相うやまひて心をあはせる。書、皋陶謨「一和衷哉」

【協會】ハツシ 會員の協同一致によりて設立する會。
 【協契】ハツシ 心をあはせて、相ちぎる。晉書、簡文帝紀「羣后竭二一〇斷金」
 【協贊】ハツシ 力を合せてたすける。議會の二一〇蜀志、來敏傳、並能二一〇大將軍姜維二協扶、協和贊襄。
 【協心】ハツシ 心をあはす。書經「三后一、同底二道」
 【協商】ハツシ 協賛してとりはからふこと。さうだんする。
 【協從】ハツシ かなひしたがふ。陸倕、銘「龜筮一、人祇響應」
 【協奏】ハツシ 種種の樂器を合せかなづ。宋史、樂志「麗養一、匏蓋華陣」二合奏。
 【協定】ハツシ 協議して決定する。相談の上にてきめる。
 【協定税率】ハツシ 國家が或る物に課する關稅に就き、特に他の國と協定せし税率。
 【協同】ハツシ 力をあはす。阮籍、隱、内外一
 【協比】ハツシ やはらぎしたしむ。左傳「詩云二一〇其隣、昏姻孔云」
 【協扶】ハツシ 力をあはせてたすける。宋史、樂志「天人一、一統有二〇」二協贊。
 【協睦】ハツシ やはらぎむつふ(和親)北史、王紘傳「朝廷一、遐邇歸心」
 【協約】ハツシ 雙方の利害關係によりて

彼此協商して定めたる約束、國際にも個人間にも皆これあり。
 【協力】ハツシ ちからをあはせる。〇戮力。
 【協和】ハツシ かなふ、やはらぐ、和合する。書、堯典「二一〇萬邦」
 【冊】ハツシ 冊(十部四畫)に同じ。
 【卒】ハツシ 俗字
 〇しもべ、やつ(隸人、僕)「從一〇下級の軍兵「兵一〇軍除。〇周代の制、平民百人をいふ。周禮、小司徒、五人爲伍、五伍爲兩、四兩爲一〇〇むら、民戸三百ある邑。齊語「二十家爲邑、邑有司、十邑爲一、一有帥」〇あわてる(匆遽)
 【倉一〇にはか(暴急)吳子「一遇敵人二にはかの出來事。漢書、辛慶忌傳「應一〇をばる、をふ(終)〇すむ、やむ(已)〇つく(盡)大夫の死をいふ。〇つひに(竟)〇
 【卒】ハツシ 終、畢、訖了等の別は終(糸部五畫)の條を見よ。
 【卒】ハツシ 遂、竟、終等の別は遂(走部九畫)の條を見よ。
 【卒愕】ハツシ あわておどろく。公羊傳「桓公一不能應」

【卒去】ハツシ 〇大夫の死をいふ。卒の正音はシツ。〇〇五位以上三位以下の人の死をいふ。
 【卒選】ハツシ 漢書「御史大夫一不能二詳知」二急選。
 【卒業】ハツシ 或る事業をなす。司馬相如、難蜀父老「百姓力屈、恐不能二一〇」
 【卒乘】ハツシ 歩兵を卒といひ、車戰の兵を乗といふ。左、隱、元「繕二甲兵、具二一〇」
 【卒然】ハツシ にはかなる貌。孟、梁惠王「一問曰、天下惡乎定」二卒爾、率爾。
 【卒卒】ハツシ あわておちつかざる貌。漢書、司馬遷傳「一無二須臾之間」黃庭堅詩「北門一都會、塵埃人一一二粹粹」
 【卒倒】ハツシ にはかたふれる、にはかじめをまはす。卒然暈倒する病。〇卒假。
 【卒中】ハツシ 卒中風の略。にはかにかに中風を起して死する病。血が腦に鬱結して腦膜の破裂する病。〇腦溢血ハツシ
 【卒徒】ハツシ 隨從の者。莊子「夫畏途者、必盛二卒徒」而後敢出」

【卓】ハツシ 俗字
 〇たかし(高)「一見」一識「高」立つ貌「一立」〇〇(ゆ)越すぐれる(殊)〇つく(几案)今、桌に作る。
 【卓異】ハツシ 衆にすぐれてことなり。漢書、宣帝紀「恩惠一〇卓絶」
 【卓偉】ハツシ すぐれてえらし。吳志、載「赫赫之龍體二一〇之才」
 【卓逸】ハツシ すぐれてひいでる。又、其の者。蔡邕文「才藝言行、一不羣」二秀逸、卓絶。
 【卓越】ハツシ すぐれてこえも。晉書「州郡有二貢薦之舉、猶未二出羣一之人」二超絶。
 【卓行】ハツシ すぐれて高きおこなひ。漢書、霍去病傳「一殊遠」
 【卓詭】ハツシ 詭は異、言行などの高くすぐれて、衆人に異れる義。後漢書「此其言必有二一切至當二聖心者」
 【卓冠】ハツシ 高くぬきでる。後漢書「二一〇古人、當世莫一及」

【南船北馬】支那の南方を旅行するには船を便とし、北方は馬を便とす、よりにて忙しくかけまはることにいふ。

【南詔】唐の初、雲南の蠻族六部に分かる、之を六詔といふ、詔とは蠻語の謂、蒙合詔最南に在り、故に又「一」といふ。

【南殿】唐の紫宸殿の別名。

【南天燭】南天燭、俗謂「一」、木而似「一」、南天竹。

【南斗】南方の星宿の名、其の形斗に似たり。三輔黃圖「長安故城、城南爲「一」、城北爲「一」、故號「斗城」。

【南都】今の河南省南陽縣、後漢の光武帝の生長せし地、洛京の南に在り、故に「一」といふ、張衡「一」賦を作る。○國奈良の別稱、南方に在る古き都なるが故。

【南方之強】含忍の力を以て人に勝つをいふ、即ち君子の勇なり。中庸「子路問「強」、子曰、「一」、與、北方之強與、抑而強與、寬柔以教、不報無道、一」、也、君子居之、莊、金革、死而不厭、北方之強也、而強者居之」。

【南八男兒】南八とは南齊雲を斥す、八は其の輩行なり。韓愈「張中丞傳後序」「死耳」とあるによりて、轉じて四字を連讀して大丈

夫の義として用ふ。

【南蠻】南方のえびす。孟、滕文公「今也一、缺舌之人、非先王之道、一」、○國葡萄牙人、西班牙人等の呂宋、地方より本邦に入り來りしもの稱、轉じて外國の義に用ふ「一」。

【南冰洋】五大洋の一、南極に近く、終年氷結す。

【南風不競】南風は南方の詩なり、其の音微弱にして振はず、以て南方の國の勢力衰へて振はざるに比す。左、襄十八「晉人聞有楚師、一」、師曠曰、不書、晉驟歌北風、又歌南風、一」、多死聲、楚必無功、○轉じて我が國にて南朝の勢の振はざるに借り用ふ。

【南敵】南方の日當りよきはたけ。詩、南風、同「我婦子、饑彼一」、田峻至喜。

【南北司】唐代、宦官を北司、内閣を南司といひし總稱。

【南北朝】東晉の末より隋の一統に至るまで南北對立百五十年間の稱、即ち宋、齊、梁、陳の四朝が建康に都して江南の地を領せしを南朝といひ、之に對して江北の諸國が後魏に合併せられ、更に分裂して後周に至るを北朝といふ。○國延元元年、後醍醐天皇、吉野に遷幸したまふや、足利尊氏は光明天皇を京師に擁立せり、よりにて吉野

を南朝、京師を北朝と稱す、爾後五十七年、後小松天皇に至りて南北一統となる。

【南冥】南の海、道遠遊、一者天池也。

【南漢】前漢に同じ。

【南面】天子のくらし、天子の座は南の陽に向ふが故にいふ。北面の對、易、說卦傳「聖人一、而聽、獨、明而治」。

【南面稱孤】人君となる義、孤は王公などの謙稱(史、荆燕世家)。

【南面百城】南面は人君の位、人君となりて百城を領する富貴の榮をいふ。北史、李暹傳「暹集諸經、廣校異同、(中略)每日、丈夫推書萬卷、何假一」。

【南陽縣菊水】河南省南陽縣に出る水の名、此の水を飲めば、長壽を得るといふ。風俗通「南陽縣有甘谷、谷中水甘味、上有大菊、落水從山流下、得其流液、谷中人家飲此水、上壽百二十、其中百餘歲、七八十則爲天」。

【南呂】十二律の一、陰曆八月に配す、よりにて陰曆八月の異名とす。南は任、呂は拒、陽が盛にして黍稷を滋生し、陰が之を拒きて漸く秋氣に感せしむるをいふ。

【南鏡】國昔の貨幣二朱銀の稱、銀一兩の八分の一。銀は眞實の銀。

【南樓之會】晉の庾亮が武昌の南樓に登りて殷浩の徒と秋夜談笑したる故事によりて、觀月の宴の稱とす。晉書、庾亮傳「在武昌、諸佐吏殷浩之徒、乘秋夜、往共登南樓、俄而不覺亮至、諸人將起避之、亮徐曰、諸君少佳、老子於此處、興復不淺、便據三胡牀、與浩等談詠竟坐」。

【博】ハク、(廣)ひろさ、ひろむ。○ひろし(廣)ひろさ、ひろむ。論、子罕「我以文」○あまねし(普)多し。史、伯夷傳「載籍極一、學問に通する、多聞。○大いなり。○かふ(貿易)○(局戲)又それを爲す。○十に从いふ、俗に博博に作るは並に非なり。○博(部十一畫)の條を見よ。○博愛「ひろく衆を受する。周語注「一」於人「爲仁」韓愈、原道「一」之謂仁、行而宜之之謂義、一汎愛。○博依「詩はひろく物にかこつけて己の志を言ふ、轉じて詩をいふ。禮記「不學一」、不、能、安

【博引旁證】ハク、事を論ずるに廣く類例を擧げあまねくよりどころを示す。○考證該博。

【博奕】博は局戲、奕は圍碁、論、陽貨「不有「一」者、乎、爲之猶賢乎已」轉じて俗にばくち、賭博の義に用ふ。○一六丁半、楊柳、名し博奕。

【博治】ひろくあまねし。後漢書「京師士大夫、咸推「一」」。

【博識】ひろく物事をしる、又其の國之博老也。

【博習】ひろく學藝をならぶ。禮記「五年視「一」親師」博學。

【博詢】ひろく問ひはかる、ひろく人の意見を聞く。後漢書、陳元傳「一」可「一」博學。

【博綜】ひろくすべをさめる。晉書、王導傳「一」萬機、不可「一」有「一」。

【博徒】ばくちうち。史、信陵君傳「毛公藏「一」」。

【博物】ハク、ものしり、博識の人。左、昭、元「晉公問「子產之言、一」、君子也」○動物・植物・礦物學の總

爲三獸、注「一」賭博爲樂也。博六、六博、局戲。

【博濟】ひろくすくふ。魏志「咸以「一」、加「一」天下、一博濟」。

【博搜】ひろくさがす。丁謂、大業賦「一」聖書「廣召「一」」。

【博山】山東省青州府に在る山名。○壘器の上に山の形を刻して飾とするもの「一」爐、「一」鐘。

【博山爐】香爐の名。考古圖「香爐象「一」海中博山、下盤貯湯、使「一」潤氣、蒸香、以象「一」海之四環、一」。

【博施】ひろくおよぶ。ひろく行きわたる。荀子「風雨「一」、一」くほどす。論、雍也「一」於民、而能「一」衆」。

【博識】ひろく物事をしる、又其の國之博老也。

【博習】ひろく學藝をならぶ。禮記「五年視「一」親師」博學。

【博詢】ひろく問ひはかる、ひろく人の意見を聞く。後漢書、陳元傳「一」可「一」博學。

【博綜】ひろくすべをさめる。晉書、王導傳「一」萬機、不可「一」有「一」。

【博徒】ばくちうち。史、信陵君傳「毛公藏「一」」。

【博物】ハク、ものしり、博識の人。左、昭、元「晉公問「子產之言、一」、君子也」○動物・植物・礦物學の總

稱。

【博物志】ハク、十卷、舊本晉の張華撰と題するも、實は原本は散佚して傳はらず。後人、張華の遺文を採りて編を成し、又、他説を雜取して、之に附益せしなり。

【博物新編】三集、英國の醫士合信「一」著す。一集は、地氣論・熱論・水質論・光論・電氣論、二集は、天文略論・地球論、三集は鳥獸略論を載す。

【博聞】ひろく聞き知る。史、屈原傳「一」強志、明於治亂、明於辭令、一博覽」。

【博覽】ひろく文を學びて事理を究め之をしめくくるに禮を以てすれば、正しき道に背くことなしとの教。論、雍也「子曰、君子、博學於文、約之以禮、亦可「一」弗「一」矣」。

【博辯】ハク、辯論の博く大なる義。韓愈文「奇能「一」」。

【博約】ハク、博文約禮をつづめたる語。

【博勞】ハク、鳥の名、もず。孟、滕文公「缺舌「一」也、惡聲之鳥」。

【博】ハク、伯勞。○轉じて牛馬を賣買する商人。俗に馬喰とも書く。銀兩學隨筆「俗謂「一」市馬、一」初余不詳「一」其義、偶閱「一」伯勞、一作「一」、乃知互市之際、能相馬者、或稱之曰「一」、後訛爲「一」

市之義。

【博浪沙】河南省陽武縣の南に在る地名、張良、力士をして秦の始皇を狙撃せしめたる所。

【博覽】ひろく書物を見る。廣く古今の事物を知る。漢書、成帝紀「一」古今、容「一」受直辭、一博聞、博覽」。

【博覽會】ハク、農工等の出品を陳列して衆覽に供し優劣を比較して勸工の資とするもの。○賽會。

【博士】ハク、○教學を掌る官。漢書、百官志「一」、秦官、掌「一」古今、秩比六百石、員多至數十人、武帝建元五年初置「一」五經、一」○國古大學、又國學の教官、明經、明法、文章、音、書、算の諸「一」に分つ。○現制にて専門の學術に熟達して、學位令の規定に基きて授くる稱號。轉じて廣く博學者ものしりの義とす。

ト、ボク、

○うらなひ、うらなふ、龜の甲を灼き、その縱横のわれ目を見て、吉凶を判斷する。○えらぶ、選定する。史、周紀「成王使周公「一」居、一」らなひて定むるが故。○あたふ(予)たまふ

【賜】詩、小雅「君曰爾、萬壽無疆」

【卜居】居所をうらなひさだめる。字解を見よ。

【卜相】うらなひと、人相家相見と。唐書、方技傳序「凡推歩、醫巧皆技也」

【卜祀】吉凶をうらなひて祭る。宋史「三年一、百世承」

【卜者】吉凶をうらなふひと。占者・卜師・易者。

【卜商】字は子夏、衛の人。孔子の弟子、孔子より少きこと四十四歳、文學に長ず。

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜筮】トは龜甲をやき、筮はめどきを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲ト、筮爲筮」

【卜鄰】住居を定むるに當り、先づ其の鄰近の善惡をうらなひ定むる。左昭三「非宅是卜、惟鄰是卜」

【卜部】國古、神祇官に隸屬して占トの事を司りし職。

【廿】クワン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【卜】ヘン・ベン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

【占】セン 同 卯に

ト部

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

【ト】セツ 節(竹部九畫)の古字

けはし、さがし。峨。

【厚】 ヌウ

○あつし。薄の反対。○大いなり、多し、重し。○こし(濃)濃。○むつまじ(睦)○あつさ、あつみ。○あつくす、ねんごろにす、優待す。

【厚】 厚は薄の反、物の厚薄の厚なり。易經「坤厚以載物」又、廣く用ふ、温厚、情厚なども、輕薄ならず、厚くたのもしき義。大學「其所厚者薄其所薄者厚、未之有一也」○篤は心を用ふること確かにして、專一にかたまりたる義、篤學、篤行などと連用す、轉じて病の重りて、とりつめたるを、病篤といふ。○敦は薄の反なれども、厚の如く物の厚みには用ひず、性行の上のみ用ふ。孟子「聞下惠之風者、鄙夫寬、薄夫敦」○淳は滴の反にして、醇と通ず、風俗又は性質の厚くして、まじりけなき義。○醇はまさりけなき、良き酒なり、淳に通ず。漢書「黎民醇厚」○渥はうるほひの治、きをいふ、恩の字の意を帯ぶ。○腆は非の反なり、進物の念の入りたるよき物をいふ、不腆は謙辭にて、自分の進物をいふ。

【厚】 趙廣漢傳「不忘卿一」厚情、厚志。【厚恩】 元六王傳「稱一」崇恩、洪恩、高恩。【厚顔】 あつかまし、面の皮厚き者は感鈍くして恥を知らずとの意。詩、小雅「巧言如簧、顔之厚矣」孔稚珪、北山移文「豈可使芳杜、孔、薛、嘉、恥、一」鐵面皮。【厚誼】 あつきよし、厚情なる交誼。【厚給】 あつき俸給。【厚賜】 あつきたまもの、人よりの贈物又は禮遇を稱する語(太平廣記)厚賜。【厚遇】 あつきもてなし。漢書「漢王一」寵遇。【厚眷】 あつきめぐみ。唐明皇文「答二人神一」深眷。【厚臉】 厚顔。鐵面皮。【厚載】 地をいふ。易經「坤厚載物」後漢書、皇后紀贊「坤惟一、陰正平内」。【厚葬】 あつきほうむり。薄葬の反對。莊子「莊子將死、弟子欲一」一。【厚志】 ねんごろなることさし。【厚賜】 あつきたまもの。詩經「受此一也」厚賜。【厚積】 あつきたまもの。陸游

詩「富商賈吏多一」。【厚收】 多くのとりいれ。陳造詩「良匠有ニ妙斷、積無一」。【厚酬】 あつきむくゆる。左傳「飲一之酒、一之宋史、一以一金帛」厚報。【厚唇】 あつきくちびる。周禮「一」身口、出目短耳。【厚樹】 たかきうてな。墨子「高臺一」危樹。【厚謝】 あつき禮をのべる。唐書「更爲一」厚意。【厚情】 あつきところ。厚意。【厚賞】 あつきほめる。てあつき要英。書經「功多有一」重賞。【厚流】 流くしてよき酒。韓非、揚推「一肥肉、甘口而疾形、曼理、嗜尚、説情而損精」醇酒。【厚精】 あつきつむぎ、かとりぎぬ。後漢書、馬援傳「陛下躬服一」。【厚生】 民のくらしをてあつくる。帛を衣て寒をしのぎ、肉を食ひて體を養ふ類。書、大禹謨「正徳利用、一惟和」身體を大切にす。【厚餽】 あつきはなむけ。【厚送】 あつきみおくる。史、晉世家「一重耳」。【厚待】 あつきもてなす。宋史「故吾一」敬待、禮待、厚遇。

【厚澤】 あつきめぐみ。虞世南詩「鴻施決一幽遠、一潤涸枯」厚恩。【厚秩】 あつきふち。北史「高位一、與一終始」厚祿。【厚德】 あつき行。國語「唯一者、能受一多福」あつきめぐみ。【厚報】 あつきむくゆる、鄭重なる返禮。厚酬。【厚貌深情】 外貌は深愛を示して心の底は深くして知り難き義。莊子「孔子曰、凡人心險於山川、難於知天、天猶有ニ春秋、冬夏、且暮之期、人者一」。【厚薄】 あつきと、うすきと。淮南子「豈其隨捨一之勢異哉」濃きと淡きと。○多きと少きと。【厚福】 あつきさいはひ。宋史「能保全而享一者、由一也」。【厚幣】 贈り物。てあつくる。又、てあつき贈り物。【厚朴】 あつきあつて飾りけなし。紀異錄「既飾一之才」。○厚はの樹、葉は樹に似て大きく、木蓮に似た白花を著く、其の樹皮を乾して漢薬とす。【厚味】 うまき食物。列、揚朱、曾屋美服、一姣色、美味。【厚味寔腊】 腊は臘は味、味の厚き者は、其の薄すみやかなりと

の義、重祿は禍を受くること速くなる。周語「高位寔疾、一」【厚利】 多いなる利得。史記「説一」以「一」。【厚祿】 あつき扶持。高祿。【厚】 テン 俗に釐の省字として用ふ。○みせ、たな(市郎)○園りん、一錢の十分の一。

書、董仲舒傳「道之大一出於天、一みなもと。源。一。はじめ、漢書、食貨志「農漁商賈四者衣食一」もとの、もとづく(基)○ふたたび(再)かさね(重)○たづね(尋)本を推し究むる。漢書、薛宣傳「心定罪」○ゆるす(宥赦)晉書、潘岳傳「會詔一」○つしむ(謹)一感。○すなほ(直)○よみち、又、墓地。禮、檀弓「從先大夫於九」もとの地名より轉訛せしもの。○文體の名、其の本原を推論するを主とす、韓愈「道一人などの五一あり、後人之一に因りて作る。○姓、一憲は孔子の弟子。

【原價】 もとの、仕入れし時のねだん。玉堂雜字「照一」。【原稿】 書いたがき。草稿。【原活】 死罪をゆるしていかす。唐書「一其餘」。【原遺】 罪人などをゆるしてはなちやる。晉書、武帝紀「帝臨臨、觀一囚徒多所一」。【原意】 周の宋人、孔子の弟子、原思なり、人と爲り狷介、居る所蓬樞、上漏り下漏る、匡坐して弦歌す、子貢之に過ぎりて曰く、夫子病めるかと、憲曰く、財なき之を貧といふ、道を學びて行ふこと能はざる之を病といふ、思の如きは貧なり、病にあらざるなりと。杜甫詩「踏生一貧」。【原語】 もとのままたのことは、語の對。

【原隔】 高く平かなる地と低く平かなる濕地と。書、禹貢「一底」。【原人】 人智の未だ發達せざる太古の民。○人の性に本づきしたかぶ。韓愈「一驚あり」。【原心】 此ところを推したづねる。漢書、薛宣傳「一一定罪、探意立」。【原狀】 もとのありさま、以前の狀態。【原情】 事の情實を尋ね究むる。後漢書、郭舉傳論「凡言一或事一者以三功著、易、顯、謀、幾、初、一者、以三理隱、難、昭、斯、固、一、比、述、所、宜、推、察、一者也」。【原色】 もとのいろ、紅、黃、青の三色の稱、この三色の配合によりて種種の色を現す。【原色寫眞版】 實物の色そのままの寫眞銅版、實物の色を赤、黃、青の三色に分けて、三個の寫眞をとり、之を銅版に製し、三色のインキにて重ねて印刷する。三三色版。

【原】 ゲン

○はら、地の平かにして廣き處。○もと(本)元と通ず。漢

【原由】 事のおこり。原因。【原宥】 罪をゆるす。蔡邕文「雖見一、一、仰愧、一先臣、傷肌入骨」一赦免。【原因】 物事のおこり、もと。原

【原籍】 もとの戸籍、本籍、寄留籍の對。又其の所在地を原籍地といふ。

【龐】 ヲウ

○大いなり。龐。○あつし(厚)左、成、十七「民生敦」○ゆたか(豐)○まじる、まじは(雜)

【龐眉】 毛深きまゆ、老人をいふ。四子講徳論「一耆者之老」

【原雪】 あつゆるしす、罪を宥し汚

【八】

【原委】 本と末と。禮、學記「或原也、或委也」。【原由】 事のおこり。原因。【原宥】 罪をゆるす。蔡邕文「雖見一、一、仰愧、一先臣、傷肌入骨」一赦免。【原因】 物事のおこり、もと。原

【原委】 本と末と。禮、學記「或原也、或委也」。【原由】 事のおこり。原因。【原宥】 罪をゆるす。蔡邕文「雖見一、一、仰愧、一先臣、傷肌入骨」一赦免。【原因】 物事のおこり、もと。原

【原雪】 あつゆるしす、罪を宥し汚

【可】(上)たふとぶ(上尙)〇すすむ。侑に通ず。〇つよし(強)

【右學】(上)殷の世の太學をいふ。西郊に在り。大夫の老いたる者を養ふ。又、左學は、庶民の老いたる者を養ふ。禮、王制、殷人養國老于左學、養國老于左學。

【右軍】(上)天子に中軍、左軍、右軍あり。〇天子に中軍、左軍、右軍あり。〇天子に中軍、左軍、右軍あり。〇天子に中軍、左軍、右軍あり。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

句

【句】(上)詩文のひとくぎり、詞絶の、とどまる(止)〇まがる、か(まる)屈曲(鉤)に通ず。〇あたる(當)俗に勾に作る。〇當は任務に當る、辦理の義。〇かか(はる)拘(〇弓)を引きしほる、又、や(ころ)殺(〇)矩形を對角にそひて折半せしもの、稱、直角三角形「股」〇まがる(曲)か(まる)。〇國發句の略。俳句。

【句】(上)詩文のひとくぎり、詞絶の、とどまる(止)〇まがる、か(まる)屈曲(鉤)に通ず。〇あたる(當)俗に勾に作る。〇當は任務に當る、辦理の義。〇かか(はる)拘(〇弓)を引きしほる、又、や(ころ)殺(〇)矩形を對角にそひて折半せしもの、稱、直角三角形「股」〇まがる(曲)か(まる)。〇國發句の略。俳句。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

可

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

可

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【可】(上)決定。想像。命令。可能の意を表はす辭。〇又、助字として軽く用ふる。中庸、體物不遺。〇うけがふ(背)承諾する。〇ゆるす(許)否の反對。〇よし、やよし。論、雍也。〇かしづき、もり(傳御)禮、内則、擇于諸母與。〇ばかり、ほど。史、滑稽傳、飲五六斗。〇汗(汗)は突厥の君長。

【司敗】古、陳・楚の二國にて刑罪を司りし官名。左、文、十、注「陳、楚名二司寇爲二一」

【司法省】唐、十省の一、國家の司法行政に關する事務を掌る中央官廳。

【司服】周代、天子皇后の衣服の事を掌る官名（周禮、天官）

【司廩】唐、米ぐらの事を掌る官名。唐書、百官志「一司庫各一人」

【司隸校尉】京師に在りて盜賊を捕へ非常を警戒する官名。今の我が警視總監の類。

【司令塔】軍艦の甲板上に設けた一室。交戦中艦長司令官等が此内にて號令する。

【司祿】周代俸祿の事を掌る官名。周禮、地官。○星の名。史記、文昌宮六曰「一」

【史閣】史書を藏する所。○史書を編纂する所。吳兢文「居二一」

【史學】歴史を研究する學問。

【史可法】明末の忠臣、字は憲之、清の順治二年清兵南京城を陥るや、捕へられて殺さる。明末南渡の時、待む所は「一人のみ、人或は之を宋の文天祥に比す。」

【史漢】司馬遷の史記と、班固の漢書と。世説「張茂先論二一、應龍可聽」

【史翰】歴史の文書（齊書、榮緒傳）

【史記】百三十卷、漢の司馬遷撰す。上は軒轅に始まり、下は漢の武帝に至る。十二本紀・十表・八書・三十世家・七十列傳に分つ。

【史魚】春秋の衛の大夫、靈公適伯玉を用ひずして彌子瑕に任ず。史魚、死して尸を以て諫む、靈公乃ち伯玉を進めて子瑕を退く、孔子之を稱して直哉「一」と曰ふ。

【史官】歴史を編修する官。晉書「司馬談父子皆爲二一」

【史館】修史局をいふ。事物紀原「史職、自二帝、而倉頡沮誦掌之、周及列國亦有二史名、漢武置太史公、漢以後職在二秘書、唐太宗始置二一、以修二國史」

【史劇】歴史上の事實をたねとして脚色せし芝居狂言。世話物劇

【史策】ことがらを記せし文書、記録。○史冊。

【史實】歴史上の事實の略語。

【史臣】史事を記する臣。杜甫詩「直筆在二一」

【史生】平安朝時代に官廳の文書を寫すことを司る役人。

【史乘】歴史の書、乘は記載の義。孟、離婁「晉之乘」

【史職】歴史を編修する官。唐書、蔣父傳「父在二朝廷、久居二一」

【史蹟】歴史にのこれる事跡。○史跡。

【史籍】歴史の書。後漢書「班彪才高、而好二述作、遂專心二一之閉」

【史遷】司馬遷良史の才あり、故にいふ。

【史談】歴史のはなし。○史話。

【史馬遷】父、太史公馬談。宋書、謝靈運傳「雖二相如之筆、庶免二一之憤」

【史籀】周の宣王の時の太史。古文を變じて大篆を作りし人。故に大家を二一と曰ふ（法書攷）

【史傳】史乘と同じ。南史、劉湛傳「傳二一、譜前代舊典」

【史有三長】○前代舊典、○歷史を書くには、才學識の三長を備ふべし。唐書、劉知幾傳「禮部尚書鄭惟忠嘗

問、自古文士多、史才少何耶、對曰「一、才學識、世罕兼之、故史者少」

【史二體】編年體と紀傳體と。編年は左傳に始り、紀傳は史記に始る。

【史筆】歴史をかき筆。晉書「既登二東觀二一」

【史部】目錄家、書物を分類して經史子集の四部と爲す、凡そ事を記するの書、正史、編年史、紀事、本末、別史、雜史、傳記より地理、時令、職官、政書等に至るまで皆一に屬す、一に乙部ともいふ。

【史料】歴史の材料。

【史論】歴史の評論。文心彫龍「一序注、則師三範子要一」

【史】シ 紙 支

○たが、これのみ（唯但止）○詞の終に用ふる助字。詩、小雅「樂君子」○のみ。耳に同じ。左、襄二七「諸侯歸晉之德」

朱子語錄「一怕人聽不得、故重疊說」

○よろこぶ（悅）史、太史公自序「唐堯遜位、虞舜不」○やしなふ（養）○うしなふ（失）

【台位】三公のくちわ。轉じて宰相の稱。楊巨源詩「心期玉帳親二一」、魏勃因君說「姓名二台座」

【台階】三公の位。杜甫詩「一翊戴全」台位。○人の居室をいふ敬語。

【台翰】台書に同じ。

【台桃】三公。台は三星、周代に三桃を朝廷に植ふ、これに面して三公の座位を定む、故に三公の職とす。晉書、鄭袤等傳、或以二雅望一處二一三桃。

【台鉉】三公の位。鉉は鼎のみみづる。陳書、章昭達傳「初世祖嘗三昭遙升二一三台鼎」

【台座】三公の位。王維詩「久踐二中一」、終登三上將壇二台位、台席。

【台宰】天子を輔佐して百官を統べ治める大臣。後漢書、謝弼傳「一重器、國命所二繼」宰相、冢宰、台輔、台弼。

【台司】三公の位。孔氏雜說「荀爽自被二徵命、至登二一、四十五日」

【台書】御手紙、人のてがみをいふ敬語。○台書、台翰、台墨。

【台席】三公の位。通鑑、唐敬宗紀「柳公綽曰、奇章公甫離二一」注「宰相之位、取二象三台、故曰二一」

【台鼎】三公。三台星と鼎の三足とに象る。後漢書「位登二一」

【台背】しみてはだ、老人をいふ。最も年老いたる人の背が鮫魚の斑文に似る故。詩、大雅「黃耇二一」

【台背】黄耇は白髪の上に黄變するに至る大老。

【台弼】宰相をいふ。弼は天子を輔弼する義。宋史「建三事兩朝、專升二一」

【台輔】宰相、傳はかしづきたすける。北史「歷三朝、師訓少主、不出二官省、坐致二一」

【台甫】他人に對して其の號を問ふときにいふ。

【台儀】三公、宰相の稱。後漢書「詢謀二一」

【台命】三公の命令、轉じて目上の人の來意をいふ敬語。御來命。○國皇族の御命令。

【台覽】○みそなはす、御覽す、貴人の見ることの敬語。○國古は主に公方の御覽に用ひ、今は主として皇族にいふ。經二一

【台嶽】○天台山の一名。○台嶽。北嶽。○圓比叡山の一名。○怡怡。

○かたじけなく、謙遜のことば。○みだりに（濫）「一竊」○むさぼる（貪）「一」

【叨咎】むさぼりて事を忘る。唐書、李光顏傳「以二一」

【叮】テイ 音

○噂はねんごろ。○しんせつにいひつける、再三告げる。

【可呼】ねんごろ、親切。○丁寧。

【召】テウ 通音 音

○めす。○よぶ（呼）○まねく、手を以てするを招といひ、言を以てするをといふ。「一集」一、○めし、尊長者よりのまねき。曲禮「父一無諾、唯而起」○人名。又、地名。○「一」めす、飲食其他の事を爲す敬語「一しあがる」羽織を「一」

【召按】召してとりしらべる。

【召福】わざわひをまねく。荀子「言有二一、行有二一」

【召選】めしかへす。

【召喚】めしかへす。官廳よりよび出しのかきつけ。

【召見】よびよせて對面する。水經、注「李延年女弟、上一二」

【召集】歸休せる陸海軍人を

【叱責】叱りかきしめる、ことをいふ。○詞責、責責

【叱石成羊】石（部首五畫）の條下を見よ。

【叱咤】大聲にしかる。又、いきまきて舌打する。史、淮陰侯傳「項王、暗啞二一、千人皆廢」

【台】ダイ、ダイ 俗に臺の略字として用ふるは非

○ほしの名、上、中、下の一の三星あり、故に三といふ。轉じて三公の稱、更に轉じて敬意を表する語となる「一安」

臨「一端」○はらごもり。○胎。○さめはだ。○胎。○われ、わが（予）我、誓、説命「以輔」徳

【台】シツ 質

○よるこぶ（悅）史、太史公自序「唐堯遜位、虞舜不」○やしなふ（養）○うしなふ（失）

【台位】三公のくちわ。轉じて宰相の稱。楊巨源詩「心期玉帳親二一」、魏勃因君說「姓名二台座」

【台階】三公の位。杜甫詩「一翊戴全」台位。○人の居室をいふ敬語。

【台翰】台書に同じ。

【台桃】三公。台は三星、周代に三桃を朝廷に植ふ、これに面して三公の座位を定む、故に三公の職とす。晉書、鄭袤等傳、或以二雅望一處二一三桃。

【台鉉】三公の位。鉉は鼎のみみづる。陳書、章昭達傳「初世祖嘗三昭遙升二一三台鼎」

【台座】三公の位。王維詩「久踐二中一」、終登三上將壇二台位、台席。

【台宰】天子を輔佐して百官を統べ治める大臣。後漢書、謝弼傳「一重器、國命所二繼」宰相、冢宰、台輔、台弼。

【台司】三公の位。孔氏雜說「荀爽自被二徵命、至登二一、四十五日」

【台書】御手紙、人のてがみをいふ敬語。○台書、台翰、台墨。

【台席】三公の位。通鑑、唐敬宗紀「柳公綽曰、奇章公甫離二一」注「宰相之位、取二象三台、故曰二一」

【叨】タウ 案

○かたじけなく、謙遜のことば。○みだりに（濫）「一竊」○むさぼる（貪）「一」

【叨咎】むさぼりて事を忘る。唐書、李光顏傳「以二一」

【叨】テイ 音

○噂はねんごろ。○しんせつにいひつける、再三告げる。

【可呼】ねんごろ、親切。○丁寧。

【召】テウ 通音 音

○めす。○よぶ（呼）○まねく、手を以てするを招といひ、言を以てするをといふ。「一集」一、○めし、尊長者よりのまねき。曲禮「父一無諾、唯而起」○人名。又、地名。○「一」めす、飲食其他の事を爲す敬語「一しあがる」羽織を「一」

○かたじけなく、謙遜のことば。○みだりに（濫）「一竊」○むさぼる（貪）「一」

【叨咎】むさぼりて事を忘る。唐書、李光顏傳「以二一」

【叨】テイ 音

○噂はねんごろ。○しんせつにいひつける、再三告げる。

【可呼】ねんごろ、親切。○丁寧。

【召】テウ 通音 音

○めす。○よぶ（呼）○まねく、手を以てするを招といひ、言を以てするをといふ。「一集」一、○めし、尊長者よりのまねき。曲禮「父一無諾、唯而起」○人名。又、地名。○「一」めす、飲食其他の事を爲す敬語「一しあがる」羽織を「一」

【史治】刑官吏のあつかふ政。史記「繁刑嚴誅、一一刻深」政治。
 【吏能】官吏としてのはたらき。北史「秀之有能、任齊爲吳令、
 吏才、吏幹。
 【吏部】支那の中央官廳の一、始は尙書省の一部なりしが明清にては獨立の一省とし、戶・禮・兵・刑・工の五部と合せて六部といふ。
 【吏目】宋元以後、提舉司、及諸州に置きし官名、盜賊を緝捕し獄囚を防ぎ簿籍を典する。

【叫】オン 倣
 ○牛鳴く。○阿阿は息の出入の稱。

【呀】カ 麻
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

以爲「波濤」也。○波濤の吞吐する貌。木華海賦「猶尚一、餘波獨涌」
 【吭】カウ 陽 倣 深
 ○のど、のんど(咽喉)亢航。頡。○くび(頸首)柳宗元文「仰首伸一」○物事の要處。

【告】カウ コウ 通音
 ○つぐ、かたる(語)○しらす(報)上に告ぐるをといひ、下に發するを語といふ。○をし(教)しめす(示)管子、水地「聖人之治於世也、不人」也、不戸説也。○まをす(白)啓。○とふ(問)たづぬ(訪)禮、王制、疏「君毎月使人致膳、問存否、○おはす(命)○こふ(請)○やすみ(休暇)史、汲黯傳「黯多病、病且滿三月、上常賜一者數」
 【告歸】自分の家に歸ることを申

【告】カウ コウ 通音
 ○つぐ、かたる(語)○しらす(報)上に告ぐるをといひ、下に發するを語といふ。○をし(教)しめす(示)管子、水地「聖人之治於世也、不人」也、不戸説也。○まをす(白)啓。○とふ(問)たづぬ(訪)禮、王制、疏「君毎月使人致膳、問存否、○おはす(命)○こふ(請)○やすみ(休暇)史、汲黯傳「黯多病、病且滿三月、上常賜一者數」
 【告歸】自分の家に歸ることを申

【告】カウ コウ 通音
 ○つぐ、かたる(語)○しらす(報)上に告ぐるをといひ、下に發するを語といふ。○をし(教)しめす(示)管子、水地「聖人之治於世也、不人」也、不戸説也。○まをす(白)啓。○とふ(問)たづぬ(訪)禮、王制、疏「君毎月使人致膳、問存否、○おはす(命)○こふ(請)○やすみ(休暇)史、汲黯傳「黯多病、病且滿三月、上常賜一者數」
 【告歸】自分の家に歸ることを申

【告】カウ コウ 通音
 ○つぐ、かたる(語)○しらす(報)上に告ぐるをといひ、下に發するを語といふ。○をし(教)しめす(示)管子、水地「聖人之治於世也、不人」也、不戸説也。○まをす(白)啓。○とふ(問)たづぬ(訪)禮、王制、疏「君毎月使人致膳、問存否、○おはす(命)○こふ(請)○やすみ(休暇)史、汲黯傳「黯多病、病且滿三月、上常賜一者數」
 【告歸】自分の家に歸ることを申

【告】カウ コウ 通音
 ○つぐ、かたる(語)○しらす(報)上に告ぐるをといひ、下に發するを語といふ。○をし(教)しめす(示)管子、水地「聖人之治於世也、不人」也、不戸説也。○まをす(白)啓。○とふ(問)たづぬ(訪)禮、王制、疏「君毎月使人致膳、問存否、○おはす(命)○こふ(請)○やすみ(休暇)史、汲黯傳「黯多病、病且滿三月、上常賜一者數」
 【告歸】自分の家に歸ることを申

【告】カウ コウ 通音
 ○つぐ、かたる(語)○しらす(報)上に告ぐるをといひ、下に發するを語といふ。○をし(教)しめす(示)管子、水地「聖人之治於世也、不人」也、不戸説也。○まをす(白)啓。○とふ(問)たづぬ(訪)禮、王制、疏「君毎月使人致膳、問存否、○おはす(命)○こふ(請)○やすみ(休暇)史、汲黯傳「黯多病、病且滿三月、上常賜一者數」
 【告歸】自分の家に歸ることを申

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

【含】オン 倣
 ○口を張る。○むなし(虚)○大なるくち。○谷は谷の大きくうつろなる貌。
 【呀呀】○猛獸の口を張る貌。獨孤及、射虎圖詩「饑虎一立當路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王母開以笑、衛官助一」
 【呀呀】○口をあけてのしる。又、口を開く貌。五代史「劉蕡每視殺人、不覺柔顏垂涎、一、人

〇ふく、いきふく(嘯)〇嘯は俗語、それぞれにいひつける義。

【嘯】フツ

〇もとの(戻)書、堯典「吁ー哉」〇たがふ(違)〇いな(否)

【命】ミヤウ

〇つかふ(使)せしむる。〇のる、みことりのり、大を命といひ、小を命といふ。のり、をしへ、をしふ。〇政令、告示、示す、いましめ、いましむ、おほせ、申しつけ、まうしつく。〇うん、めぐりあはせ(運)〇いのち(生)〇みち(道)〇な、なづく(名)〇亡は名籍を脱して逃亡する。〇ことば(辭)〇はかる(計)〇官服。〇古、貴人の名に添へし敬稱。命は使なり、口に从ひ令に从ふ。【命案】罪人殺入事件。【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【命】命は、託、上たる者の命に託して言ふ。戦國齊策「一命以償賜諸民」。【命根】いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護身先護命根」。

【哀】アイ

〇かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】アイ

【哀】アイ、かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【哀】かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。〇あはれ、あはれむ(閔)〇憐、應科目時與人書「其窮而連轉之」〇いつくしむ(愛)〇いたむ(傷)〇母のなき者「子」

【喜見城】^喜次條に同じ。
 【喜見天】^喜三十三天の地居天の正にありて帝釋天の居る天宮。喜見城。
 【喜子】^喜蜘蛛の異名。爾雅「蟪蛄長跲」注「蜘蛛長脚者、俗呼爲喜子」
 【喜字餘】^喜國七十七歳をいふ。喜の字の草書が、七十七と讀まるるによる。喜餘。
 【喜心】^喜よろこぶ心。禮記「其一感者、其聲發以散」
 【喜捨】^喜よろこびて、財寶を棄てる。神佛のことに金品を寄附するにいふ。
 【喜聲】^喜喜字餘を見よ。
 【喜色】^喜よろこばしきかほ。有。家語「孔子爲魯司寇、攝三行相事、有喜色」
 【喜聲】^喜うれしげなるこゑ。楊萬里詩「一番雨過來、幽徑、無數飛禽有喜聲」
 【喜舞】^喜よろこびてをどる。柳宗元文「無任三井蹈一之至」
 【喜樂】^喜よろこびてたしむ。詩「唐風、且以一、且以永日」
 【喜】^喜キ

【喝】^喝キョウ・グ
 魚の口の水面に見ゆるにいふ。あぎとふ「喉」轉じて上の徳を慕ひて争ひ歸する義とす。○となふ(唱)○よぶ(呼)又互に呼びあふ、又其の聲。莊、齊物論「前者唱于而隨者唱」
 【喝】^喝ク
 魚の口の聚りつどふ貌。○魚のあつまりあぎとふ貌。轉じて衆人の仰ぎ慕ふ義。史、司馬相如傳「延頸舉踵、一然皆驚」
 【喝】^喝ク
 呼吸。○ふく(吹)漢書、中山靖王傳「衆一漂山」あたむ、温め潤す。○照。轉じて保護する義。唐書、魏徵傳「護民之勞、一之若子」○しめす(呈示)○一は詔ひて強ひて笑ふ貌。柳宗元文「一超起」
 【喝】^喝ク
 呼吸。○ふく(吹)漢書、中山靖王傳「衆一漂山」あたむ、温め潤す。○照。轉じて保護する義。唐書、魏徵傳「護民之勞、一之若子」○しめす(呈示)○一は詔ひて強ひて笑ふ貌。柳宗元文「一超起」

【喚】^喚クワン
 〇よぶ(呼)白居易詩「千呼萬一始出來」わめく(叫)○まねく(招)聲をかけてよびよせる。解を見よ。
 【喚】^喚クワン
 〇よぶ(呼)白居易詩「千呼萬一始出來」わめく(叫)○まねく(招)聲をかけてよびよせる。解を見よ。
 【喚】^喚クワン
 〇よぶ(呼)白居易詩「千呼萬一始出來」わめく(叫)○まねく(招)聲をかけてよびよせる。解を見よ。

【喬】^喬ケウ
 〇たかし(高)〇木高くして上部がまがる。○おごる、ほしいまま。禮記「一而野」
 【喬】^喬ケウ
 〇たかし(高)〇木高くして上部がまがる。○おごる、ほしいまま。禮記「一而野」

【喬木】^喬ケウ
 〇たかき木。詩、小雅「出自幽谷、遷于喬木」
 【喬松之壽】^喬喬は王子喬、松は赤松子、共に長壽の仙人、よりに長壽の義にいふ。戰國策、蘇深曰「世世稱喬、而有」
 【喬遷】^喬人の家を移すを賀していふ。詩經の語に木づく、喬木の條を見よ。又仕宦して位の進みにいふ。張籍詩「滿堂虛左待、衆目望」
 【喬木】^喬〇たかき木。詩、小雅「出自幽谷、遷于喬木」
 【喬松之壽】^喬喬は王子喬、松は赤松子、共に長壽の仙人、よりに長壽の義にいふ。戰國策、蘇深曰「世世稱喬、而有」
 【喬遷】^喬人の家を移すを賀していふ。詩經の語に木づく、喬木の條を見よ。又仕宦して位の進みにいふ。張籍詩「滿堂虛左待、衆目望」

【噉】^噉ケン
 〇くちす(食)〇のむ(飲)杜甫詩「對酒不能」
 【噉】^噉ケン
 〇くちす(食)〇のむ(飲)杜甫詩「對酒不能」

【噉】^噉ケン
 〇くちす(食)〇のむ(飲)杜甫詩「對酒不能」
 【噉】^噉ケン
 〇くちす(食)〇のむ(飲)杜甫詩「對酒不能」

【噉】^噉ケン
 〇くちす(食)〇のむ(飲)杜甫詩「對酒不能」
 【噉】^噉ケン
 〇くちす(食)〇のむ(飲)杜甫詩「對酒不能」

【善不】^レ善惡の義。左傳「夫人朝夕退而游焉、以譏執政之。」
 【善舞】^レよく舞ふ。本事詩「白尙書、姬人樊素善歌、妓人小蠻、皆爲詩曰、櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰。」
 【善辯】^レ辯口よき義。唐書「崔浩傳、性滑稽。」
 【善謀】^レよきはかりごと。晉書「武帝紀、明達、自斷大事。」
 【善以爲寶】^レ金玉を寶とせずして、善人を寶とす。大學「楚書曰、楚國無以爲寶、惟。」
 【善藥】^レよくきくすり。唐書「一不可離手。」
 【善諭】^レよくさとす。禮記「和易以思、可謂。」
 【善手】^レたくみに物をあたへる。淮南子「善手、用約而爲、德、善取者、入多而無怨。」
 【善用】^レたくみに用ふる。左傳「惠恤其民、而。」
 【善鄰】^レよく鄰國にしたしむ。左、六「親仁、國之寶也。」
 【善長】^レよく長善。子華子「善類、善長なるもがら。子華子「旌、而誅勳、法之正也。」

【善遊】^レ遊に耽る。技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

〇口部 (九) 善・單 嗔・喃・喟・喋・噓・啞・啞・啞・啞・啞・啞

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

【善遊者】^レ技能に長ずる者は、これに誇りて、御して禍を受くるに喩ふ。淮南原道「夫、善騎者、各以其所好、反自爲禍。」
 【善待問者】^レ如「鐘」の鳴るもの、質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くもの、力に應じて、鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて、適當の答をなす義。禮記「叩之以小者、則小鳴、叩之以大者、則大鳴、待其從容、然後盡其聲。」

〇口部 (九) 善・單 嗔・喃・喟・喋・噓・啞・啞・啞・啞・啞・啞

